

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(58)

鹿児島県立埋蔵文化財センター建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

ひら まつ ばる  
平 松 原 遺 跡

1991年3月

鹿児島県教育委員会

---

## 序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が鹿児島県立埋蔵文化財センター建設に先立って実施した平松原遺跡の緊急発掘調査の記録です。

この平松原遺跡では、古墳時代、平安時代、中世・近世にいたる時期の遺構・遺物が発見されました。

なかでも、溝状遺構から出土した墨書土器や刻書土器などは、官衙的な施設や集落跡などの存在をうかがわせるもので、本県における平安時代研究の貴重な資料として注目されています。

始良地方の歴史の解明に貴重な手掛かりとなるこの報告書を、広く南九州の古代文化の研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、発掘調査に御協力くださった始良町教育委員会並びに関係各位に心から感謝いたします。

平成3年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 大 田 務

## 例 言

1. 本報告書は、平成2年度に実施した鹿児島県立埋蔵文化財センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の実施及び実測は、大野重昭と東和幸が担当した。
4. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
5. 遺物の水洗・注記・拓本等の整理作業は鹿児島県教育庁文化課埋蔵文化財収蔵庫で行った。
6. 獣骨については鹿児島大学農学部助教授西中川駿氏に依頼した。
7. 遺物の実測・トレース・写真撮影は東和幸が行った。
8. 土器実測図の断面黒塗は還元焼成を表し、断面白抜きは酸化焼成の土器を表す。
9. 甕形土器の煤・丹塗土器及び砥石の研磨面はスクリーントーンで示した。
10. 傾きが不明の土器については、基準線を引いていない。
11. 本書に記録した遺物番号はすべて続き番号とし、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
12. 本書の執筆・編集は大野重昭・東和幸・西中川駿が行った。

分担は次の通りである。

第1章・第2章・第5章・第6章第3節・第7章	.....大野重昭
第3章・第4章・第6章第1節・第2節・第8章第1節	
第9章・第10章.....	東 和幸
第8章第2節.....	西中川駿

# 本文目次

序文	
例言	
目次	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置及び環境	4
第3章 発掘調査	
第1節 調査の概要	7
第2節 土層	7
第4章 古墳時代	
第1節 1号住居跡	12
第2節 1号住居跡出土遺物	17
第3節 2号住居跡	23
第4節 2号住居跡出土遺物	23
第5節 3号住居跡	28
第6節 3号住居跡出土遺物	29
第7節 4号住居跡	33
第8節 4号住居跡出土遺物	33
第5章 平安時代	
第1節 遺構	39
第2節 遺物	39
第6章 中世から近世	
第1節 墓	43
第2節 掘り込み	43
第3節 溝状遺構	47
第7章 その他の遺構	
第1節 青年学校跡地	50
第2節 その他の遺構	50
第8章 その他の遺物	
第1節 遺構外出土の遺物	55
第2節 平松原遺跡出土の馬歯および牛歯	76

---



第9章 考 察 .....	81
第10章 ま と め .....	83

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡地図 .....	6
第2図 基準土層図 .....	7
第3図 グリッド設定図 .....	8
第4図 土層断面図 (1) .....	9
第5図 土層断面図 (2) .....	10
第6図 土層断面図 (3) .....	11
第7図 住居跡位置図 .....	13
第8図 1号住居跡 (1) .....	14
第9図 1号住居跡 (2) .....	15
第10図 1号住居跡 (3) .....	16
第11図 1号住居跡出土遺物 (1) .....	18
第12図 1号住居跡出土遺物 (2) .....	19
第13図 1号住居跡出土遺物 (3) .....	20
第14図 1号住居跡出土遺物 (4) .....	21
第15図 1号住居跡出土遺物 (5) .....	22
第16図 2号住居跡 (1) .....	24
第17図 2号住居跡 (2) .....	25
第18図 2号住居跡 (3) .....	26
第19図 2号住居跡出土遺物 (1) .....	27
第20図 2号住居跡出土遺物 (2) .....	28
第21図 3号住居跡 (1) .....	29
第22図 3号住居跡 (2) .....	30
第23図 3号住居跡 (3) .....	31
第24図 3号住居跡出土遺物 (1) .....	32
第25図 3号住居跡出土遺物 (2) .....	33
第26図 4号住居跡 (1) .....	34
第27図 4号住居跡 (2) .....	35
第28図 4号住居跡 (3) .....	36
第29図 4号住居跡出土遺物 (1) .....	37
第30図 4号住居跡出土遺物 (2) .....	38

第31図	溝位置図	40
第32図	溝実測図	41
第33図	溝内出土遺物	42
第34図	墓実測図及び出土遺物	43
第35図	掘り込み実測図	44
第36図	掘り込み内出土遺物 (1)	45
第37図	掘り込み内出土遺物 (2)	46
第38図	溝状遺構 実測図	47
第39図	溝状遺構 位置図	48
第40図	溝状遺構 実測図	49
第41図	近・現代掘り込み位置図	51
第42図	ピット位置図 (1) 深さ0cm~9cm	52
第43図	ピット位置図 (2) 深さ10cm~19cm	53
第44図	ピット位置図 (3) 深さ20cm以上	54
第45図	遺物出土状況	56
第46図	出土遺物 (1)	57
第47図	出土遺物 (2)	58
第48図	出土遺物 (3)	59
第49図	出土遺物 (4)	60
第50図	出土遺物 (5)	61
第51図	出土遺物 (6)	62
第52図	出土遺物 (7)	63
第53図	出土遺物 (8)	64
第54図	出土遺物 (9)	65
第55図	出土遺物 (10)	66
第56図	出土遺物 (11)	67
第57図	出土遺物 (12)	68
第58図	平松原遺跡のタイムスケール	83

## 表 目 次

表1	周辺遺跡地名表	5
表2	遺物観察表 (1)	69
表3	遺物観察表 (2)	70
表4	遺物観察表 (3)	71
表5	遺物観察表 (4)	72
表6	遺物観察表 (5)	73
表7	遺物観察表 (6)	74
表8	遺物観察表 (7)	75
表9	出土馬歯の計測値	80

## 図 版 目 次

図版1	1号住居跡	84
図版2	住居跡	85
図版3	溝及び馬頭観音	86
図版4	墓及び掘り込み	87
図版5	馬歯および牛歯	89
図版6	出土遺物 (1)	90
図版7	出土遺物 (2)	91
図版8	出土遺物 (3)	92
図版9	出土遺物 (4)	93

# 第 1 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は埋蔵文化財行政の円滑かつ効果的な推進を図るとともに、文化財に対する理解と認識を一層深め、郷土愛を培う拠点として鹿児島県立埋蔵文化財センターを建設することとした。

このため、県教育委員会では建設予定地の分布調査を実施し、平成元年9月12日～9月25日にかけて確認調査を実施した。その結果、古墳時代の遺物が確認され、埋蔵文化財包蔵地であると判断された。その結果をもとに、建設工事着手前に遺跡の破壊される部分について、記録保存のための緊急発掘調査を行うこととなり平成2年6月5日～7月31日の2ヶ月にわたり発掘調査を実施した。

## 第 2 節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	濱里 忠宣 (平成元年度)
		教 育 長	大田 務 (平成2年度)
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	吉井 浩一
調査企画担当者	〃	課 長 補 佐	奥園 義則 (平成元年度)
	〃	課 長 補 佐	濱松 巖 (平成2年度)
	〃	主 幹	立園多賀生
	〃	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査担当者	〃	文化財研究員	吉永 正史 (平成元年度)
	〃	主 事	東 和幸 ( 〃 )
	〃	文化財研究員	大野 重昭 (平成2年度)
	〃	主 事	東 和幸 ( 〃 )
調査事務担当者	〃	企画助成係長	京田 秀允 (平成元年度)
	〃	主 幹 兼企画助成係長	濱崎 琢也 (平成2年度)
	〃	主 査	平山 章
	〃	主 事	末永 郁代

なお、調査にあたっては、鹿児島県文化財保護審議会委員 河口貞徳氏、鹿児島大学農学部助教授 西中川駿氏の指導・助言を得るとともに、始良町教育委員会及び歴史民俗資料館の館長 楠田靖夫氏、下鶴弘氏の協力を得た。

## 第 3 節 調査の経過

発掘調査は平成2年6月5日から同年7月31日まで行った。調査は、排土量の関係から北東側半分をすませた後、南西側半分をするように計画し、遺跡全体に10m方眼のグリットを設定

し、北西から南東へA・B・C・D・Eの符号を、北東から南西へ1・2……9の番号を付した。

発掘調査の手順としては、確認調査によって遺物包含層の状況が把握されていたので、重機による表土剥ぎを実施した後、D区よりA区に向かって掘り下げていった。以下、経過は日誌抄により略述する。

- 6月5日(火) 発掘地点の設定。発掘区域の範囲にロープを張る。プレハブ設置場所の整地。
- 6月6日(水) 重機(ユンボ)による表土剥ぎ。一部包含層が切られている。周囲に土嚢を積む。
- 6月7日(木) 重機による表土剥ぎ。排土量が多いので北半分を先に掘る。プレハブ設置。
- 6月8日(金) 重機による表土剥ぎ。北半分終了。雨天。
- 6月11日(月) 北西地区のⅢ層の掘り下げ。ベルトコンベアー設置。
- 6月12日(火) 北西地区のⅢ層の掘り下げ。獣骨の歯2体出土。午後雨。
- 6月13日(水) グリッド設定、D-4区のⅢ層の掘り下げ、平板測量。
- 6月14日(木) D-3, D-4区の掘り下げ、洪武通宝出土。雨の為4時で中止。
- 6月15日(金) C-2・3区の掘り下げ。遺物取り上げ。土製のさる出土。
- 6月18日(月) B-2・3・4区掘り下げ。4層上面まで掘り下げてピット8基確認。西側断面の削り込み。遺物取り上げC-3～4区。
- 6月19日(火) B-1・2・3区の掘り下げ、Ⅳ層上面まで。A-3・4区の掘り下げ、Ⅲa層、Ⅲb層まで。
- 6月20日(水) A区の掘り下げ、Ⅲa層のみ。成川、備前、青磁が出土。平板実測。
- 6月21日(木) A区の掘り下げ、A-2区Ⅲb～Ⅲcの掘り下げ。A-1・2区の遺構検出、乾燥が著しく水を撒きながら検出。
- 6月22日(金) A区の掘り下げ、平板実測。
- 6月25日(月) A区、B区の掘り下げ。
- 6月26日(火) A区、B区の掘り下げ、遺構検出。遺物取り上げ。
- 6月27日(水) A区のピット検出。A-4区まで平板実測。写真撮影。
- 6月28日(木) A-3・4区のピット掘り下げ、半カットして下面検出。A-1・2のピット平板実測。A-3・4のピット深さ測り。
- 6月29日(金) B区ピット検出、B-2区写真撮影、平板実測、A-1・2区のピット平板実測、B-3区のピット検出。午後雨のため土器洗い。
- 6月30日(土) 大雨のため中止。西側壁面実測。
- 7月2日(月) A区ピットの半分の発掘、B区ピットの平板実測。D区の掘り下げ。
- 7月3日(火) B区のピットのレベル測り、3号獣骨の取り上げ。写真撮影。
- 7月4日(水) 南側排土の北側への移し替え。D-1～4区の精査。D-3～4区平板実測。
- 7月5日(木) 南側排土の北側への移し替え。D-1～4区平板実測。住居跡の掘進み。

- 7月6日(金) 南側の重機による表土剥ぎ。住居跡から遺物出土。D-3区獣骨出土。
- 7月7日(土) 住居跡の実測、遺物取り上げ。南側の掘下げ。
- 7月9日(月) 重機による表土剥ぎ。南側の掘り下げ。南側半分のグリッド設定。
- 7月10日(火) 8区、9区の遺構検出。
- 7月11日(水) 8区、9区の遺構検出。E-8区の平板測量。5区の掘り下げ、遺物はまばら。
- 7月12日(木) C-5区、D-6区に住居跡検出。5・6区の掘り下げ。
- 7月13日(金) 5・6区の遺構検出。1号住居の床面検出。7～8区の平板実測。
- 7月16日(月) 溝掘り下げ。D-4区掘り下げ。平面実測、平板実測。馬の歯出土。
- 7月17日(火) D-2区掘り下げ。4号住居の発掘。6～7区の平板実測。溝掘り下げ。
- 7月18日(水) 4号住居跡遺物出土。ピット掘り下げ。溝掘り下げ。
- 7月19日(木) 住居跡の写真撮影。溝の掘り下げ、実測。
- 7月20日(金) 中央掘り込みの掘り下げ。E-6区の掘り下げ。4号住居遺物取り上げ。
- 7月21日(土) 中央掘り込みの掘り下げ。ピットの半さい。2号、3号住居の遺物取り上げ。
- 7月23日(月) 中央掘り込みの掘り下げ。近世の遺構実測。壁面の清掃。
- 7月24日(火) 中央掘り込みの掘り下げ。平板実測。壁断面実測。
- 7月25日(水) 中央掘り込み部分の遺物上げ。写真撮影。
- 7月26日(木) 中央掘り込みの発掘、平面図。3号・4号住居跡の掘り込み、鉄鏝出土。
- 7月27日(金) 中央掘り込み、全掘、遺構の全掘、住居跡全掘、実測。断面実測。写真撮影。
- 7月30日(月) 道具洗い、土器洗い。写真撮影。
- 7月31日(火) 道具、遺物等を整理して収蔵庫へ運ぶ。

## 第 2 章 遺跡の位置及び環境

### 1 地理的環境

始良町は鹿児島県のほぼ中央部、薩摩半島の基部に位置している。南北に細長く、一部南東部が鹿児島湾に面している。遠く北方には霧島連山を望み、南には現在も噴煙活動が続ける桜島を直視できる。

地形的には、三方を山に囲まれ、北が高く、南が低い。山が多く、台地は始良カルデラの噴出物であるシラス台地である。河川は別府川が北西から南東へ、思川が西部から南東へと、両河川とも鹿児島湾へ注いでいる。この2つの川の浸食や堆積によって南東部に沖積低地が形成されている。

この沖積地の高所に平松原遺跡（鹿児島県始良郡始良町字平松原）がある。

遺跡はこの思川の右岸に広がる沖積地の中央付近に位置し、標高約13mを測る。遺跡の南西側はゆるやかな起伏が続き、やがて海岸へとゆるやかに傾斜していく。南側は端部に水田がわずかにみられ、南東から北西へ走る山地の山麓へと連なっている。遺跡近くの、この山麓と山上には中世の平松城跡と岩劔城跡がある。北東側は緩やかな傾斜をもって思川まで沖積地が広がり、現在宅地化が進み、住宅地としての利用が進んでいる。

### 2 歴史的環境

始良町の遺跡の数は、鹿児島県市町村別遺跡地名表によれば縄文から古墳までの遺跡30ヶ所中世の城跡16ヶ所が知られている。以下、平松原遺跡の周辺の遺跡について概要を述べる。

#### 稲荷遺跡(7)

この遺跡は橋かけかえの際、両岸の耕地及び河道中より轟式・曾畑式土器片、市来式土器片、乳棒状の磨製石斧等が採集されている。

#### 堅野遺跡(9)

昭和26年、宅地改造の時、弥生前期と後期の土器片と完形の丸底壺2点が出土したと始良町誌にある。

#### 南宮島遺跡(5)

昭和51年、始良町教育委員会が発掘調査した。水田に囲まれた標高11mの畑地で、春日式土器、貝殻条痕文の粗製土器、岩崎上層式の土器片等や石匙、石斧などの石器等が出土したと報告されている。

#### 小瀬戸遺跡(1)

九州縦貫自動車道鹿児島線内の遺跡である。昭和46年県教育委員会によって発掘調査され、建物跡、井戸等が検出され、遺物は土師器、内黒土師器、須恵器、青磁、白磁、緑釉陶器等が出土した。土師器には「仲」「大伴」「原」「雄」「判」等の墨書、刻書土器もあり、緑釉陶器の底部に「伴家」と針書きされていると報告されている。

### 萩原遺跡(8)

平松原遺跡と同じ沖積地内の遺跡で町教育委員会が昭和51年～52年にかけて、3次にわたる発掘調査を実施した。縄文土器片が少し、弥生式土器（入来式・山之口式系統・免田式）が少し、古墳時代の甕、壺、高坏や奈良・平安時代の遺物が多数出土した。また、墨書土器、線刻土器等も出土したと報告されている。

### 保養院遺跡(11)

平松原遺跡の西方で、海岸に向かった緩やかな傾斜地の県立保養院内にある。県立保養院改築に伴い、平成元年度～2年度にかけて県教育委員会により発掘調査が行われた。古墳時代が主体である。報告書は未刊行である。

### 白金原遺跡(12)

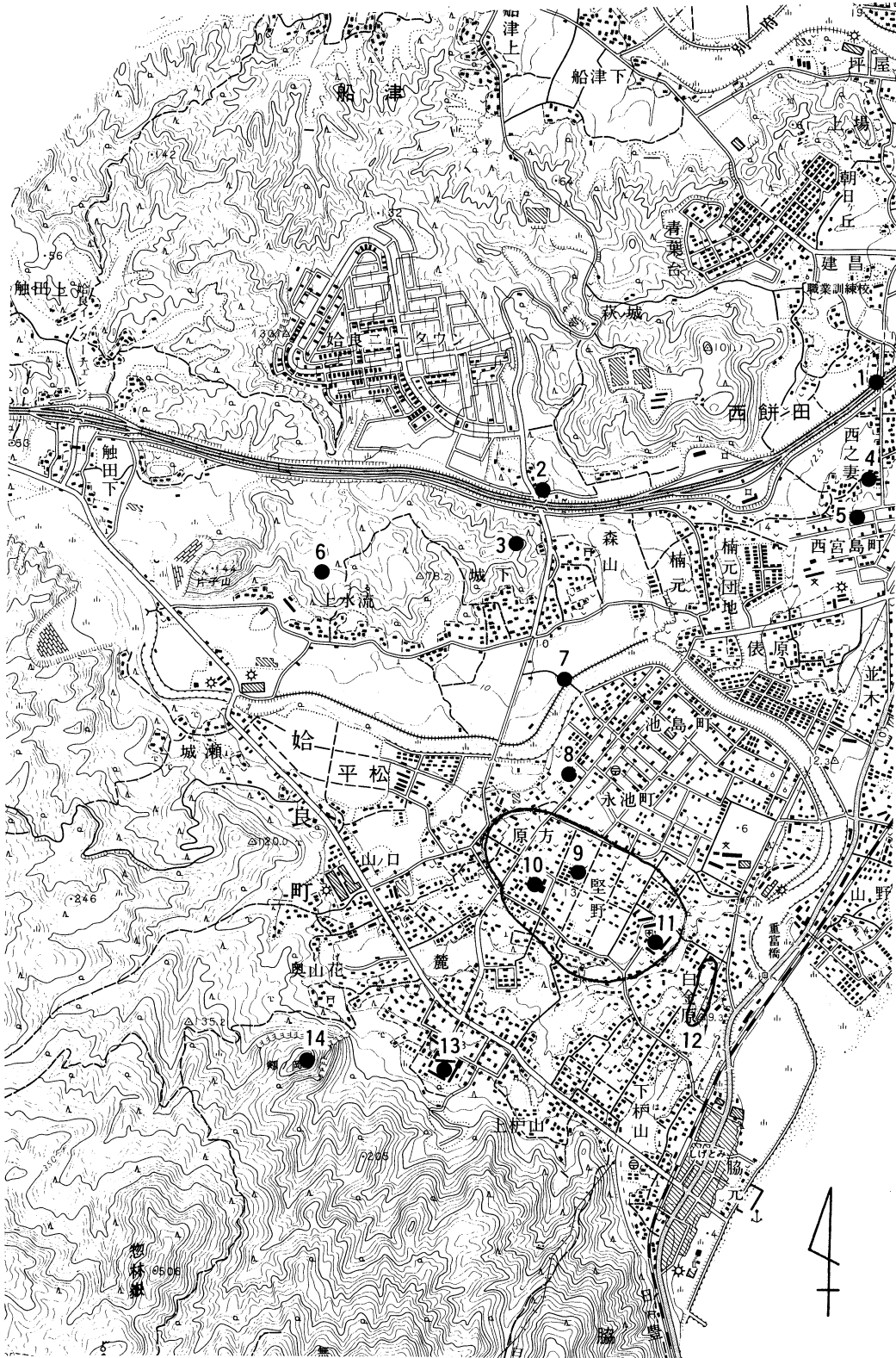
保養院遺跡の近くにあり、国道10号始良バイパス建設に伴い平成2年に県教育委員会により発掘調査が行われた。報告書は未刊行である。

表1 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代	備考	文献
1	小瀬戸	西餅田小瀬戸	縄～歴	土師, 須恵, 緑釉陶器等	⑥
2	森山	平松2724	縄 弥	西平式, 成川式土器	②④
3	諏訪城跡	平松宇都	室 町	掘切り, 馬乗馬場郭跡	①
4	西ノ妻	西餅田848	縄	吉田式土器片	④
5	南宮島	南宮島字上田山野	縄～歴	春日式, 南福寺式, 成川式	⑤
6	古屋敷	平松上水流古屋敷	縄	縄文, 弥生, 土師, 須恵	④
7	稲荷	平松原方稲荷橋	縄	轟式, 曾畑式, 市来式土器	④
8	萩原	平松4590	縄～歴	縄文, 弥生, 古墳, 奈良	③
9	堅野	平松堅野	弥	弥生式土器片	②
10	平松原	平松字平松原6252	古～歴	成川式土器, 土師, 須恵等	
11	保養院	平松6067	～歴	成川式土器, 土師, 須恵等	
12	白金原	平松			
13	平松城跡	平松上星原	室 町	古井戸, 石垣, 抜穴	①
14	岩劔城跡	平松山花	室 町	陣跡, 掘切, 郭跡, 外郭跡	①

- ① 「三国名勝図会」天保14年(1843) 刊行された薩摩藩の地誌
- ② 「始良町郷土誌」昭和43, 始良町郷土誌編纂委員会
- ③ 「萩原遺跡」始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1978.3 始良町教育委員会
- ④ 「九州縦貫道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」1969. 鹿児島県教育委員会
- ⑤ 「南宮島遺跡」始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 1977.3 始良町教育委員会
- ⑥ 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」Ⅷ 総集編 1982.3 鹿児島県教育委員会
- ⑦ 「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿児島県埋蔵文化財報告書(36) 1985.3 鹿児島県教育委員会





第1図 周辺遺跡地図

## 第 3 章 発掘調査

### 第 1 節 調査の概要

建設地の北側隅を A-1 区とし、東側へ B・C・D……、南側へ 1・2・3……とする 1 辺 10m×10m のグリッドを設定した。発掘調査は包含層に直接影響を与える部分と建物側縁から外側へ幅約 1.5m の範囲までを対象とした。また、平安時代の溝が検出された時点で、溝の方向を探るため、B-7 区に確認トレンチを設けた。総発掘面積は 2,436 m<sup>2</sup> である。確認調査で近・現代の地層であることが明らかにされた I 層は重機を使って剥ぎ採り、II 層以下を手掘りにより発掘した。

北側半分は基盤層である IV 層までが厚く、包含層の残りが良好であった。これに対し南側半分は IV 層までが薄く、遺物の出土量も少なかった。遺物は縄文時代から近世までを含め総数で土器 5,490 点、石 134 点、鉄 1 点が出土した。また、古墳時代の住居跡 4 基・平安時代の溝・中世以降の墓及び掘り込み・江戸時代のものと考えられる遺構も検出されており、当時の生活の一端を窺い知ることができる。さらに、1943 年に建てられた青年学校の基礎石も発掘された。この他、6 頭分の獣骨が出土した。

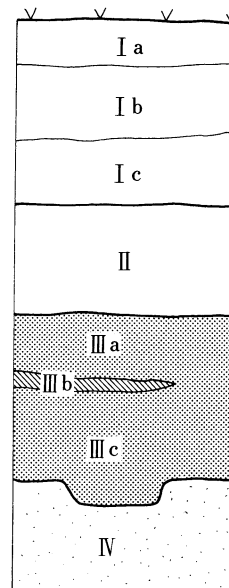
### 第 2 節 土 層

基本的に表土から基盤まで I~IV 層に分けられ、さらに細分できる層もある。I 層は近・現代の地層であり、3 層に細分できる。I a 層は現在表土になっているものであり、グラウンド整備をした時の客土である。I b 層・I c 層は全面にみられるものではなく、色の違いにより便宜上区別した。青年学校の基礎石はこの層から掘り込まれている。I 層は平均的に 25cm の厚さである。

II 層は灰褐色をした比較的軟らかい層である。南側では、基盤層である砂層までが薄いため、ほとんど残っていない。洪武通寶を出土した墓や掘り込み 1・2 の埋土はこの層との関係が窺える。中世から近世にかけての遺物を包含している。

III 層の黒色土が平松原遺跡の中心となる遺物包含層である。堅くしまった層であり、北西側の厚い堆積部分ではまん中に茶褐色をしたバンドがみられ、これを III b 層とした。III a 層と III c 層にはほとんど差がみられないが、強いて言えば III c 層の方が砂質に近くなる。縄文時代から古代までの遺物を包含する。

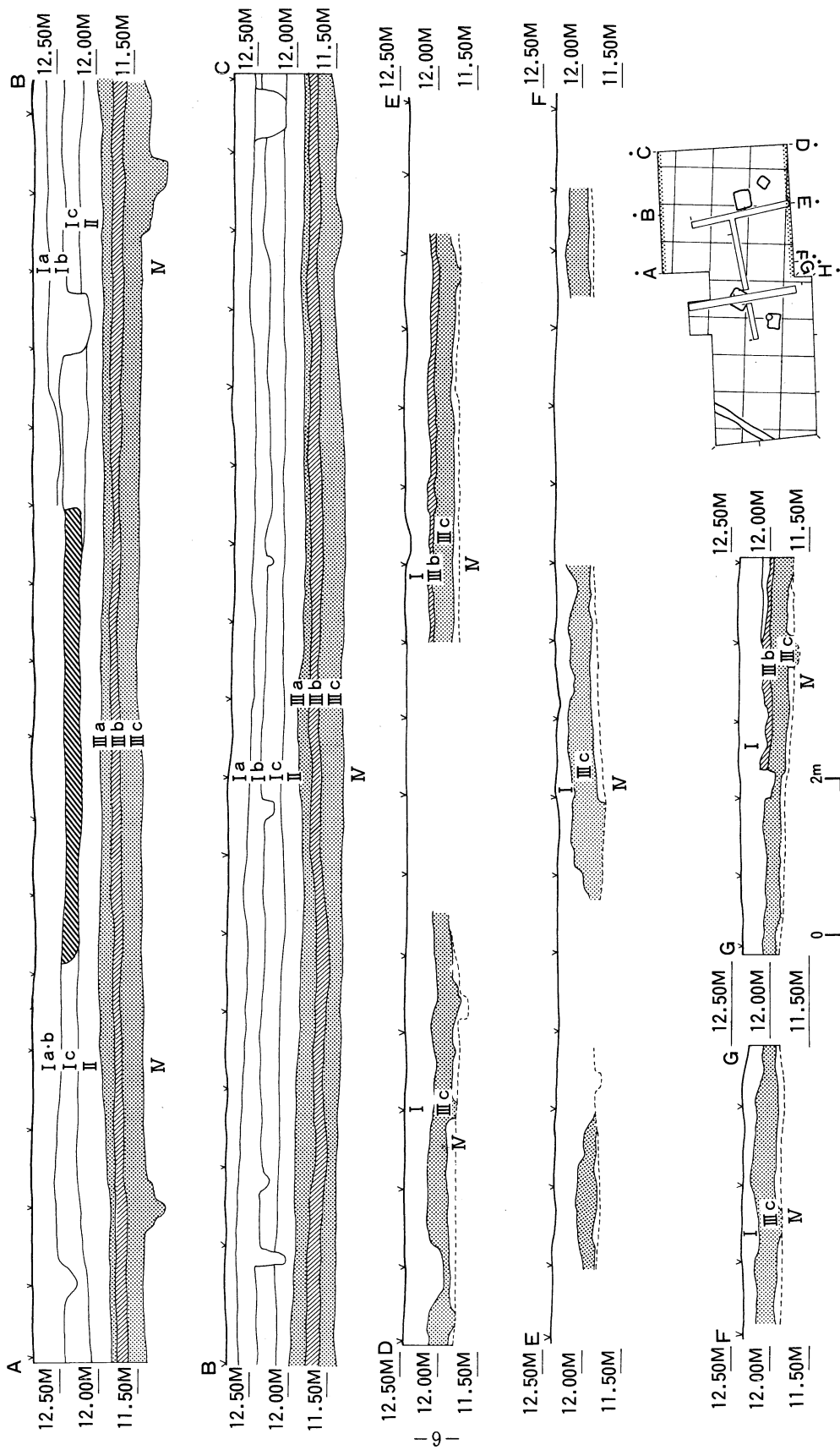
IV 層は白色をした砂層である。最低でも 2m 以上の厚さがあり、この遺跡での基盤層と考えた。遺物は出土しない。



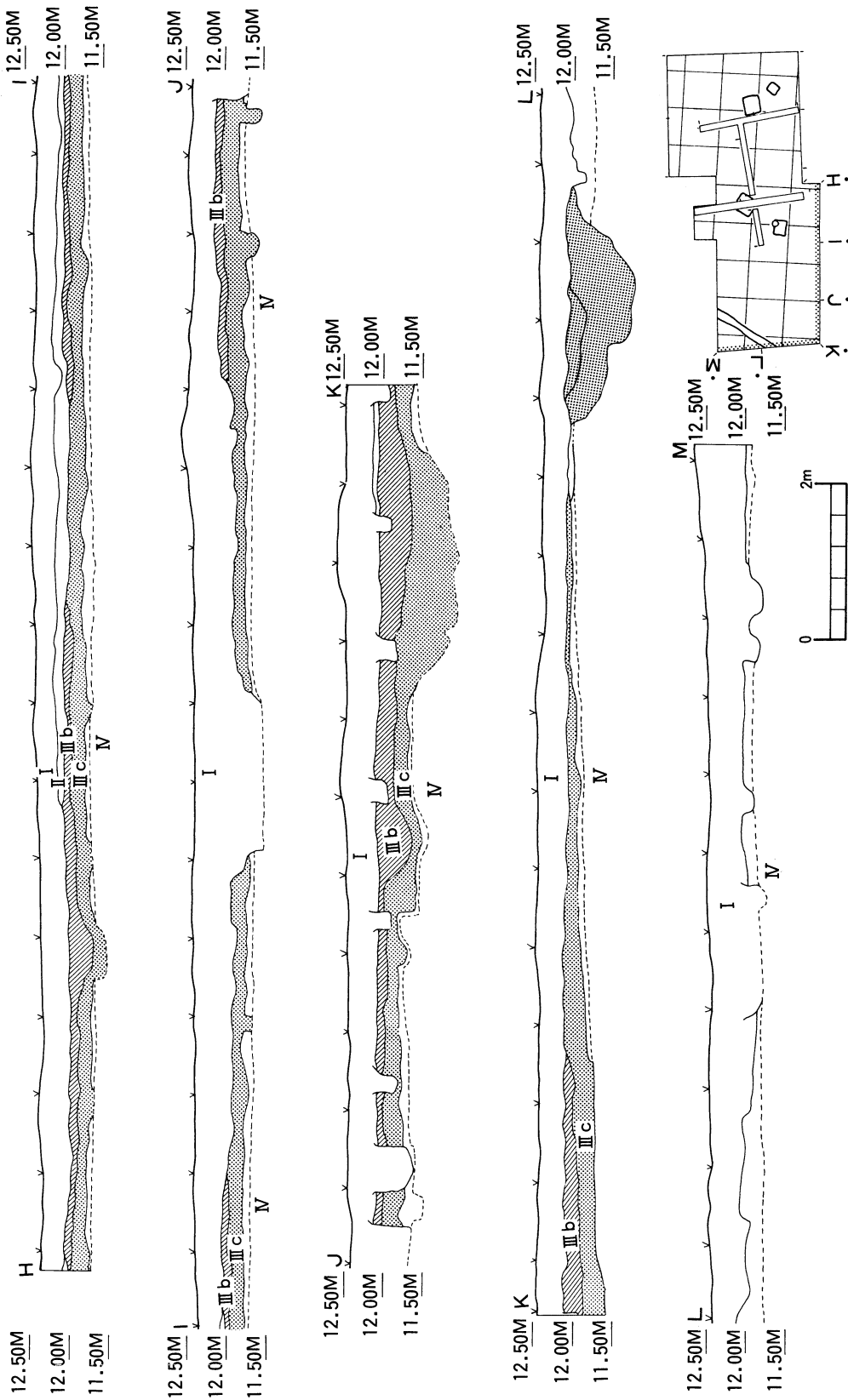
第 2 図 基準土層図



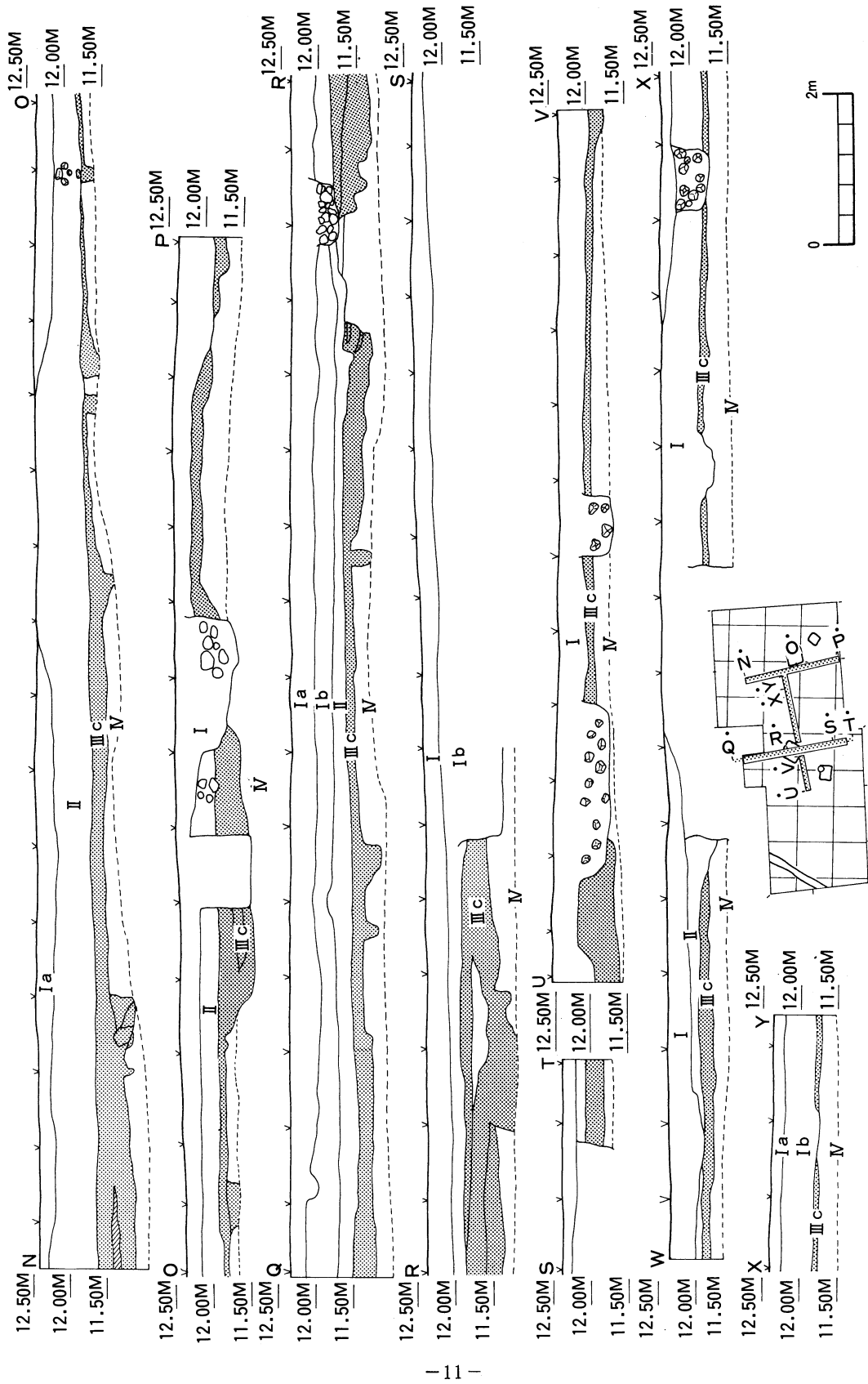
第3図 グリッド設定図



第4图 土层断面图(1)



第5图 土层断面图(2)



第6图 土层断面图(3)

## 第 4 章 古墳時代

平松原遺跡で、最も遺物の出土量が多かったのが、古墳時代に該当するものである。調査区の中央より北側に分布の中心がみられ、住居跡が4基検出された。また、C-6区にある室町時代の掘り込みがあるが、この掘り込み内の北側壁面よりに集中して古墳時代の土器が出土したので、この地点にも古墳時代の住居跡があった可能性が考えられる。

4基の住居跡に切り合い関係はみられない。1号住居跡と2号住居跡が20㎡を越える大型住居跡であるのに対し、3号住居跡と4号住居跡は15㎡以下の小型の住居跡である。また、1号住居と3号住居跡の向きが同じであり、2号住居跡と4号住居跡の向きも同じである。

### 第1節 1号住居跡

**位置：**C-2区から検出され、4基の住居跡では最も北側に位置する。床面の標高は11.35mである。

**検出：**Ⅲ層上面の精査を行った時点で、輪郭を確認した。中央部分と西側壁部分は1943年に建てられた青年学校の基礎石が掘り込まれていたが、床面までは及んでいなかった。また、東壁部分は近世の溝によって一部切られている。

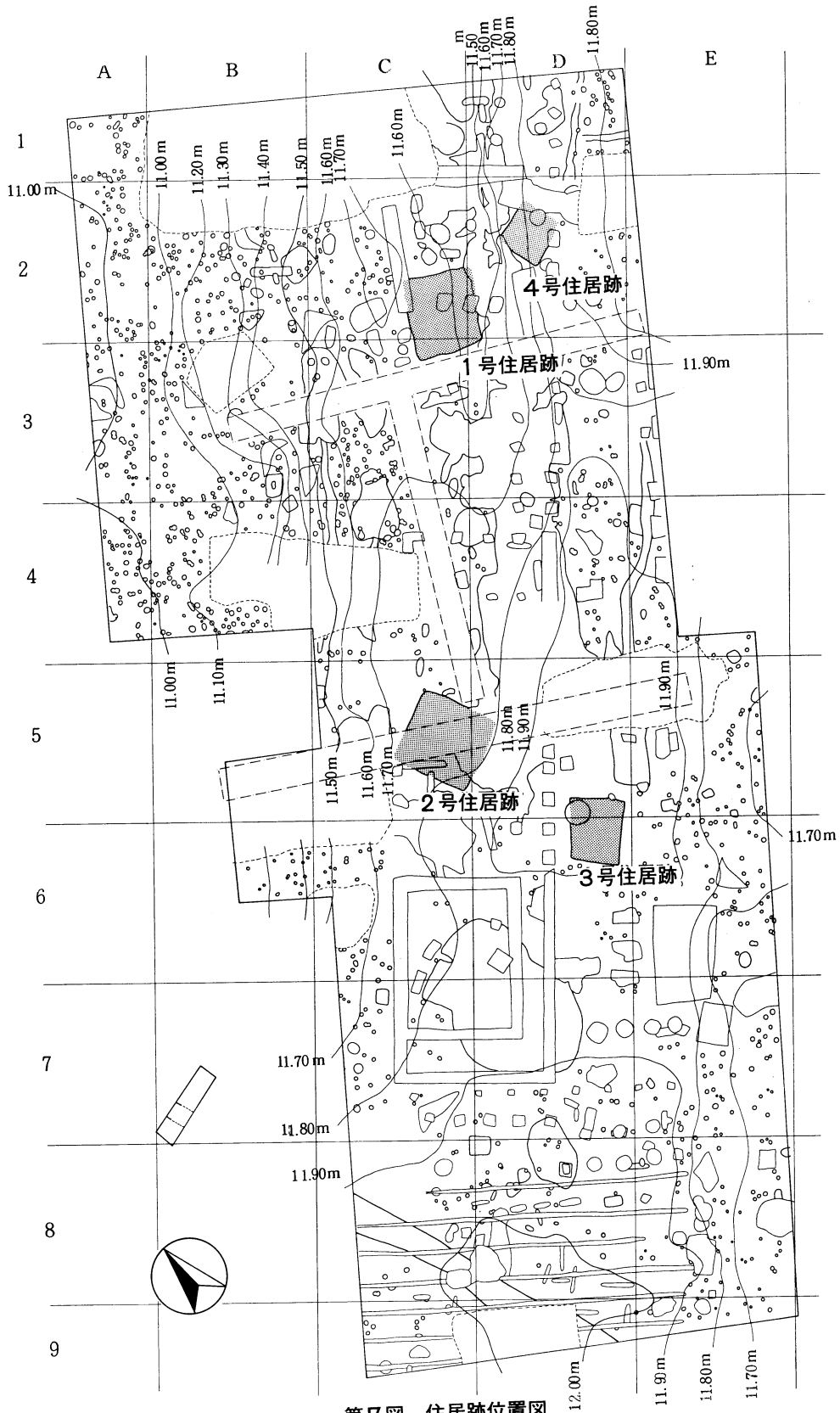
**平面形：**4m 93cm×4m 17cmの長方形をなし、面積は20.3㎡である。長軸の方向は、北東である。

**住居内：**壁はほぼ垂直に掘り込まれる。北側壁沿いから西側壁沿いにかけて、「L」字状に段が巡っている。幅は、西側が約40cmであり、北側が約50cm幅である。検出面から段上面までの深さは32cmであり、段上面から掘り込み面までは、さらに10cmを測る。

住居内中央部には、赤色に焼けた部分がみられ、その周りに堅くしまった部分がある。焼土は、40cm×50cmのほぼ楕円をした平面形であり、中心部分はクレーター状に凹んでいる。厚さは、約12cmを測る。堅くしまった部分は2m 40cm×1m 40cmを測り、厚さは5cm程度である。柱穴その他のピット類は検出されなかった。

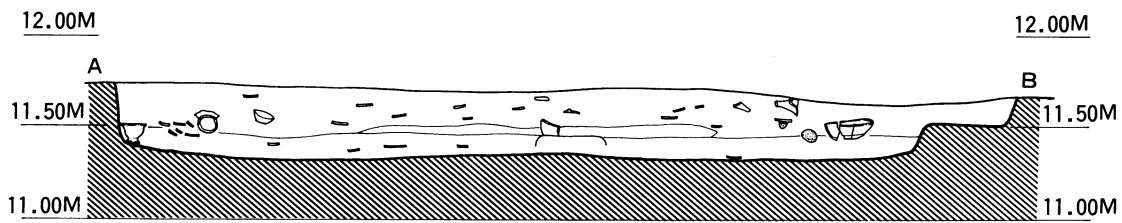
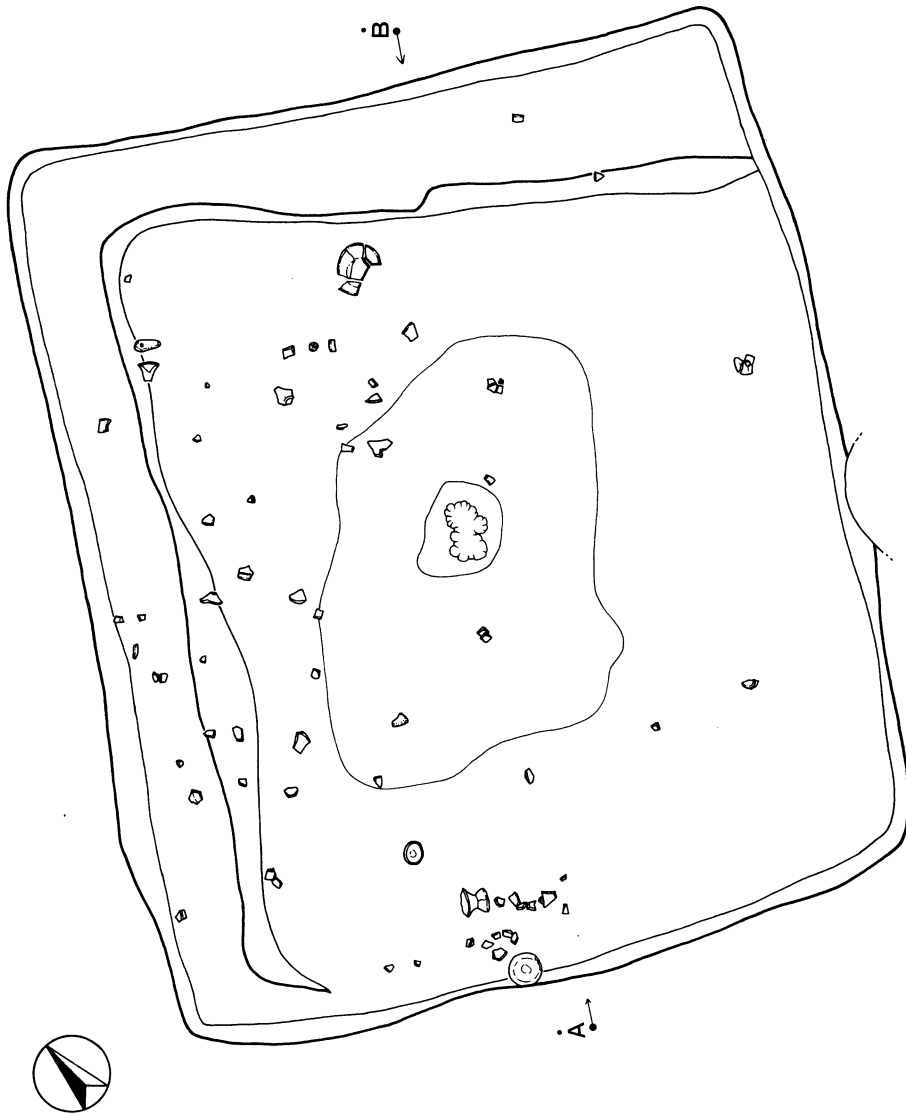
**埋土：**大きく2層に分けられる。上層は黒茶褐色を呈する砂質の土層であり、黄色の軽石を含んでいる。しまりがあり、下の方がより堅くなる。下の層は基盤層である砂層との混土層であり、比較的軟らかい。中央部分にある堅くしまりのある層は、黒褐色の砂質を呈し、上下の層のちょうど中間にあり、焼土上面を覆っている。焼土は掘り込み面より浮いた場所に位置している。

**遺物出土状況：**埋土の残りがよくない東側半分からの遺物の出土は少なかった。器種による出土地点の違いはみられず、23の鉢形土器のみが南壁に接して直立した状態で出土した。大半が埋土上層から出土したが、下層からの出土も数点みられた。総数557片の土器と2点の石が出土した。

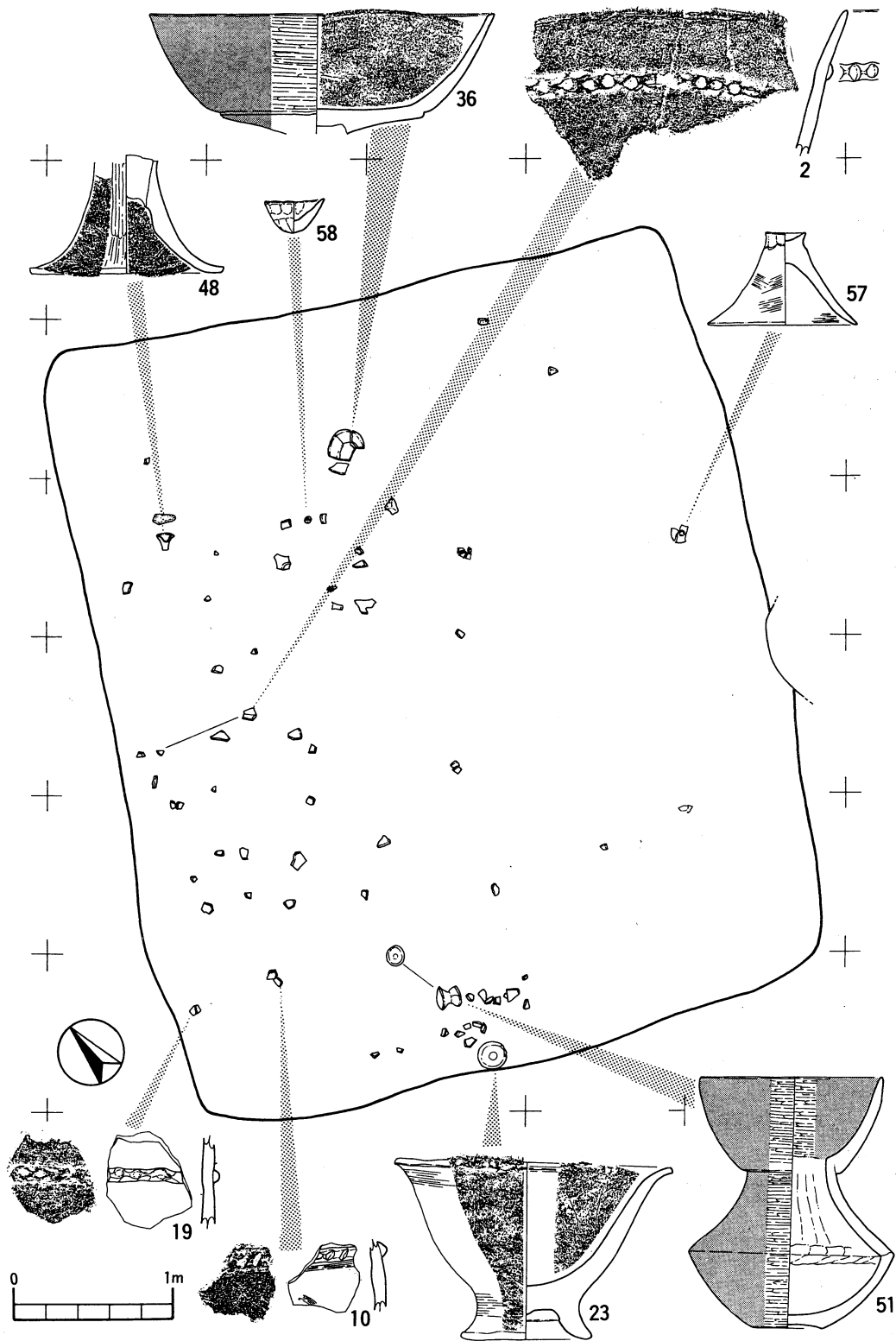


第7図 住居跡位置図

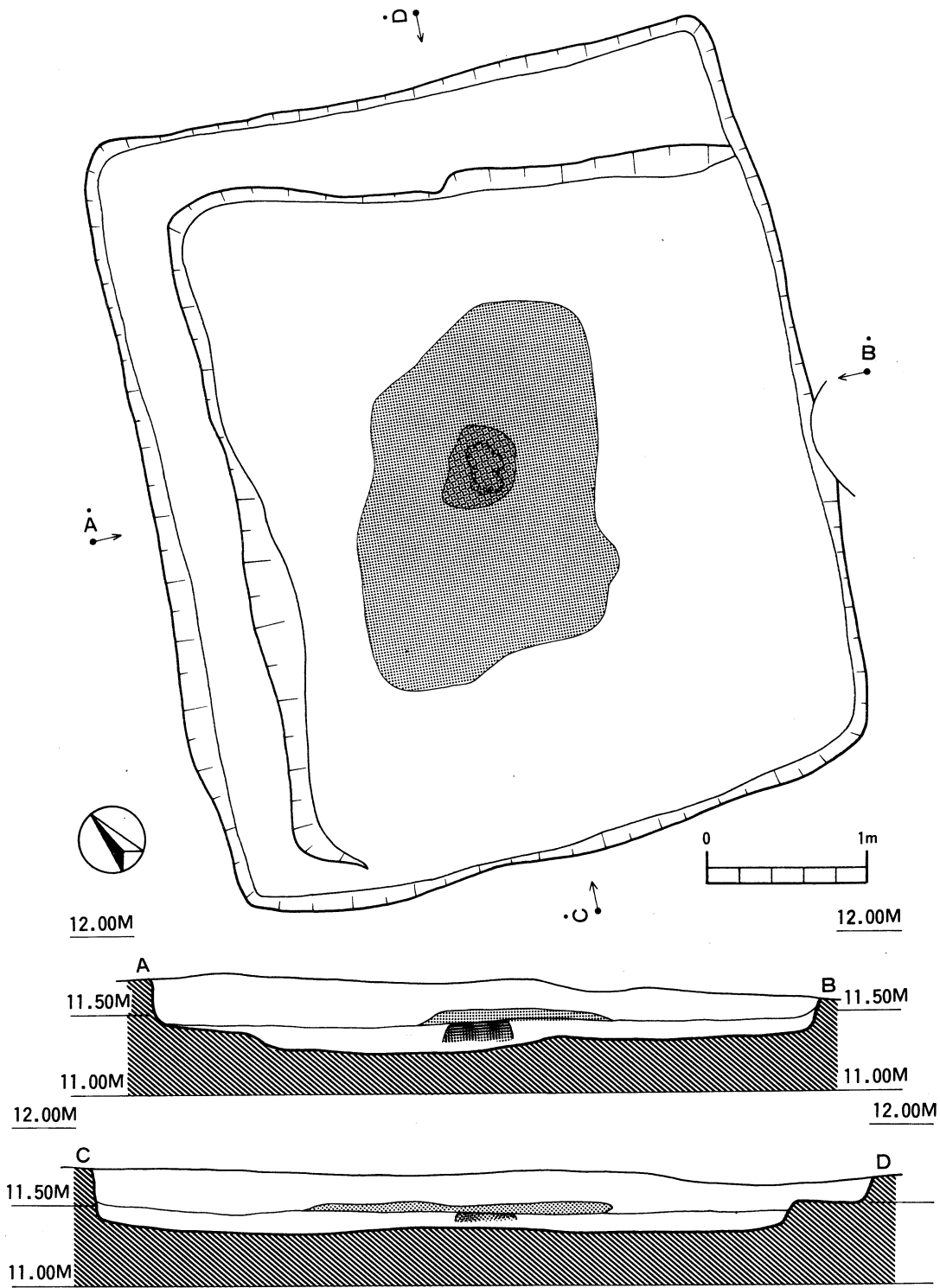




第8图 1号住居跡(1)



第9图 1号住居迹(2)



第10図 1号住居跡(3)

## 第2節 1号住居跡出土遺物

**甕形土器(1~22)**：1号住居跡内出土土器の38.1%を占める。突帯が巡る頸部から口縁部にかけては、屈曲するものはなく直口するものばかりである。口唇部は丸みを帯びるか尖るものが主であり、平に面取りするものは少ない。突帯の刻みを入れる方法は4種類みられる。板またはヘラによるものが31.6%、布巻棒によるものが15.8%、指おさえによるものが31.6%、指つまみによるものが21%である。

**鉢形土器(23)**：1号住居跡内出土土器の1.9%を占める。器高よりも口縁径が大きく、脚台も低い器形である。口縁部は大きく外反し、脚台内面にわずかな突起がみられる。

**脚部(24~29)**：1号住居跡内出土土器の10.5%を占める。脚台内面がわかる土器が2個体分あるが、両方とも内面に突起をもっている。

**壺形土器(30~34)**：1号住居跡内出土土器の8.8%を占める。口縁部と底部は壺形土器の範疇にはいるかどうか疑問が残る。34は幅広突帯と呼ばれているが、その中でも幅の狭い方に属する。

**高坏(36~50)**：1号住居跡内出土土器の26%を占める。坏部屈曲部に凹線風の段をもつことが特徴である。脚部との接合面から屈曲部に至るには、37のように丸みを帯びるものと、36のように反るものがある。

**埴形土器(51~55)**：1号住居跡内出土土器の7.1%を占める。底部・頸部・口縁部を別々に作り、それぞれを化粧土でつなぎ合わせている。底面は球形をした上げ底である。底部は丸みをもちながら屈曲部に至り、頸部は反る。口縁部は再び内湾する特徴的な器形である。口縁部内面と外側の全面に丹を施している。

**蓋形土器(57)**：1号住居跡内出土土器の1.9%を占める。口径が9.4cmとかなり小型の蓋形土器である。

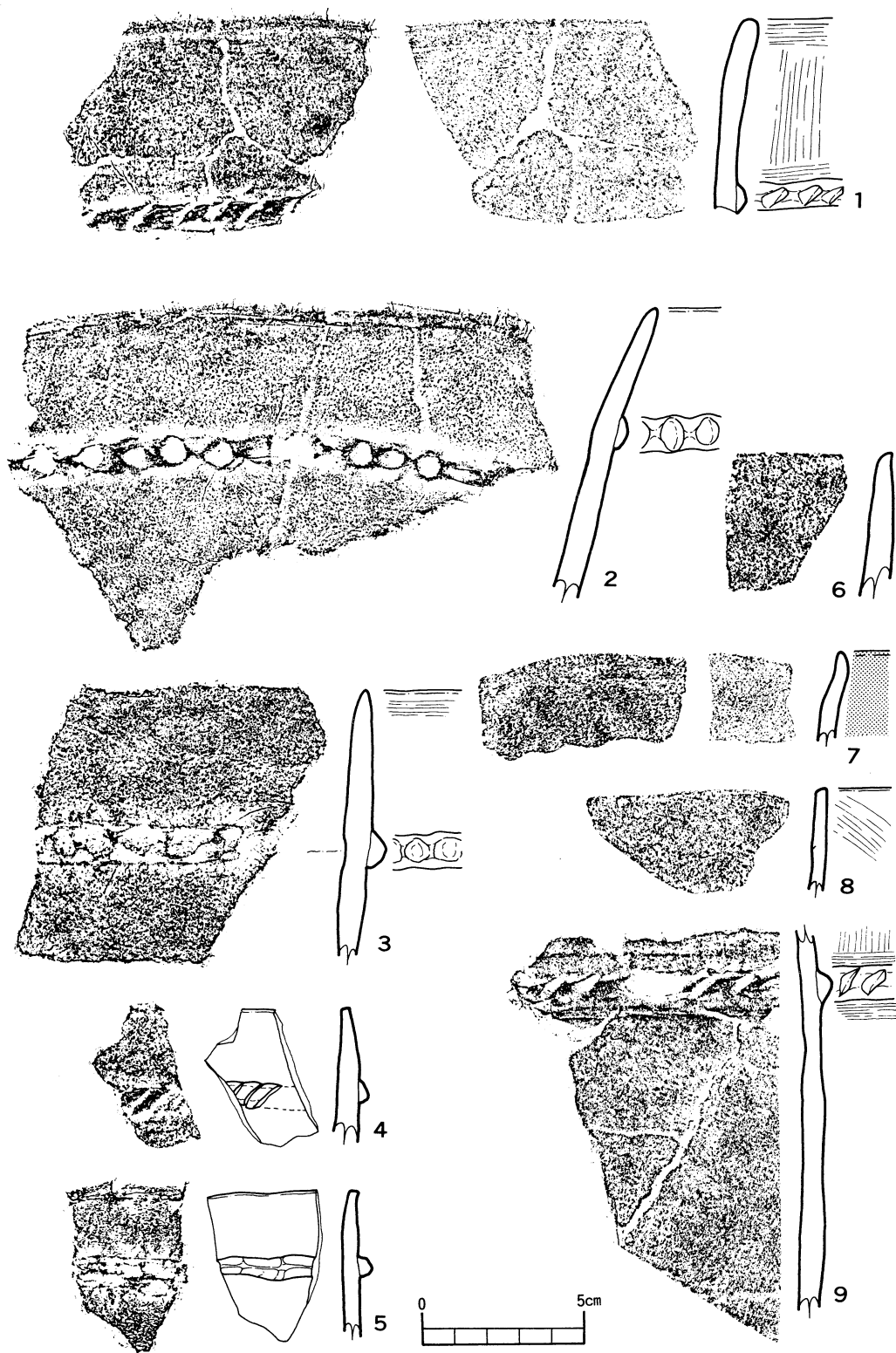
**手捏土器(58)**：1号住居跡内出土土器の1.9%を占める。底面が丸底をなし、猪口に似た土器である。

**その他の土器(35・56)**：1号住居跡内出土土器の3.8%を占める。

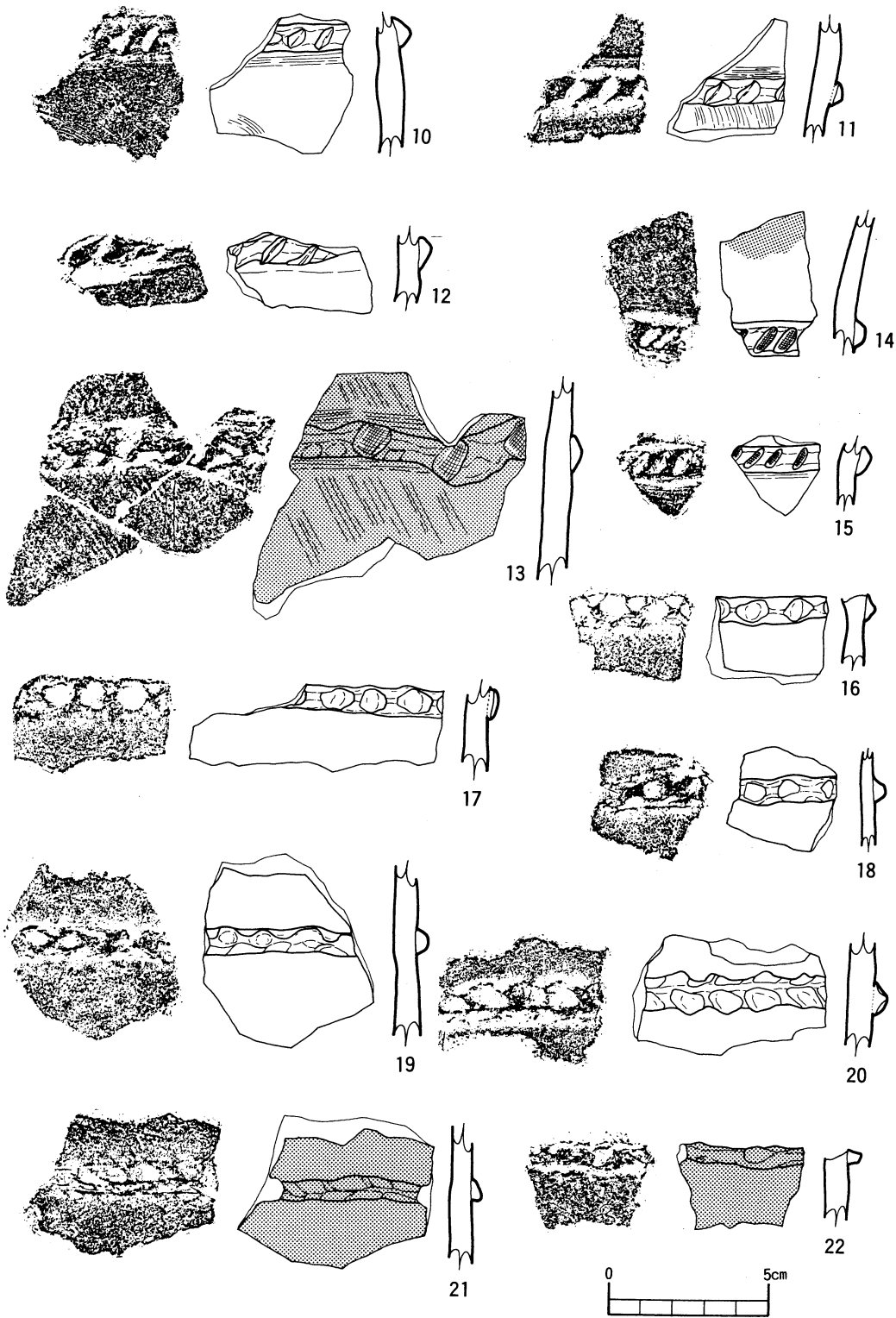
**礫(図版5)**：一つは長さ17.7cm、幅8.6cm、厚さ5.6cm、重さ1,280gの自然礫である。もう一つは長さ9.8cm、幅4.3cm、厚さ3.8cm、重さ220gの自然礫である。両者とも加工痕や使用痕はみられない。

**弥生土器(59)**：壺形土器頸部に巡らされる2条の突帯がみられる。胎土には金雲母を多く含み弥生時代中期の特徴を備えている。

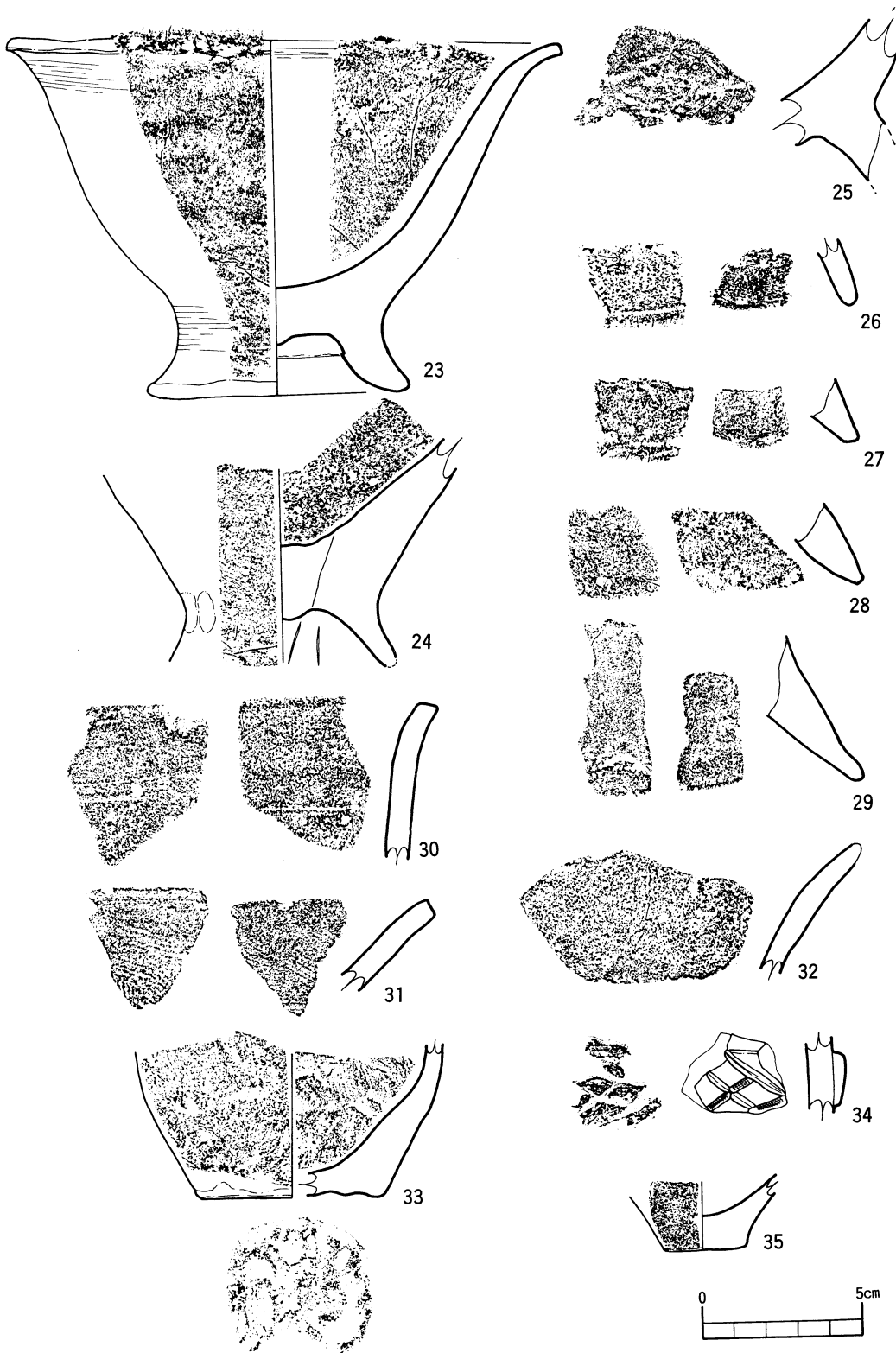
**縄文土器(60・61)**：2点ともやや薄手の土器であり、条痕を施している。61の口縁部はわずかに山形に膨らみをもち、波状口縁をなすと考えられる。



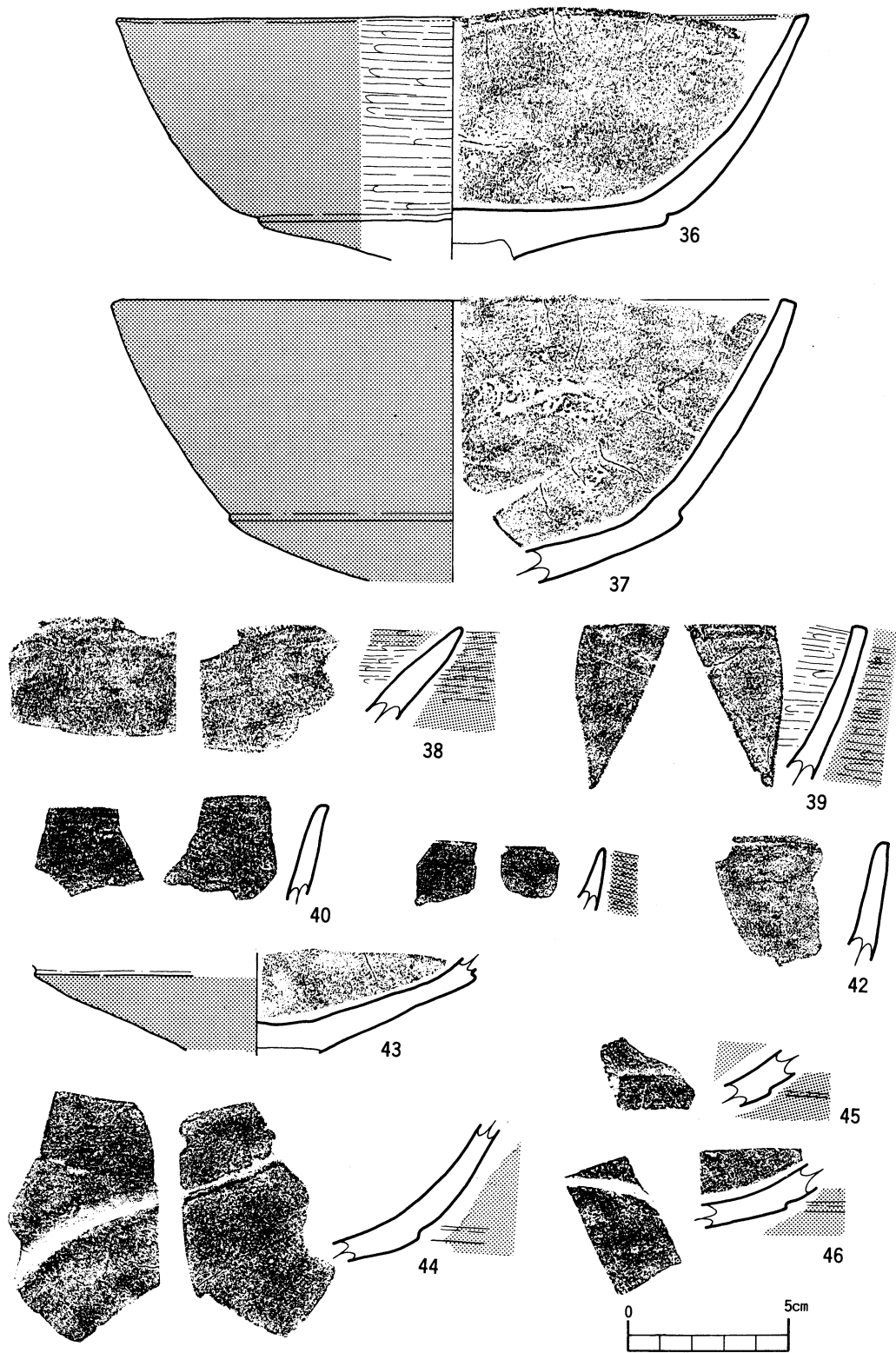
第11图 1号住居跡出土遺物(1)



第12图 1号住居跡出土遺物(2)

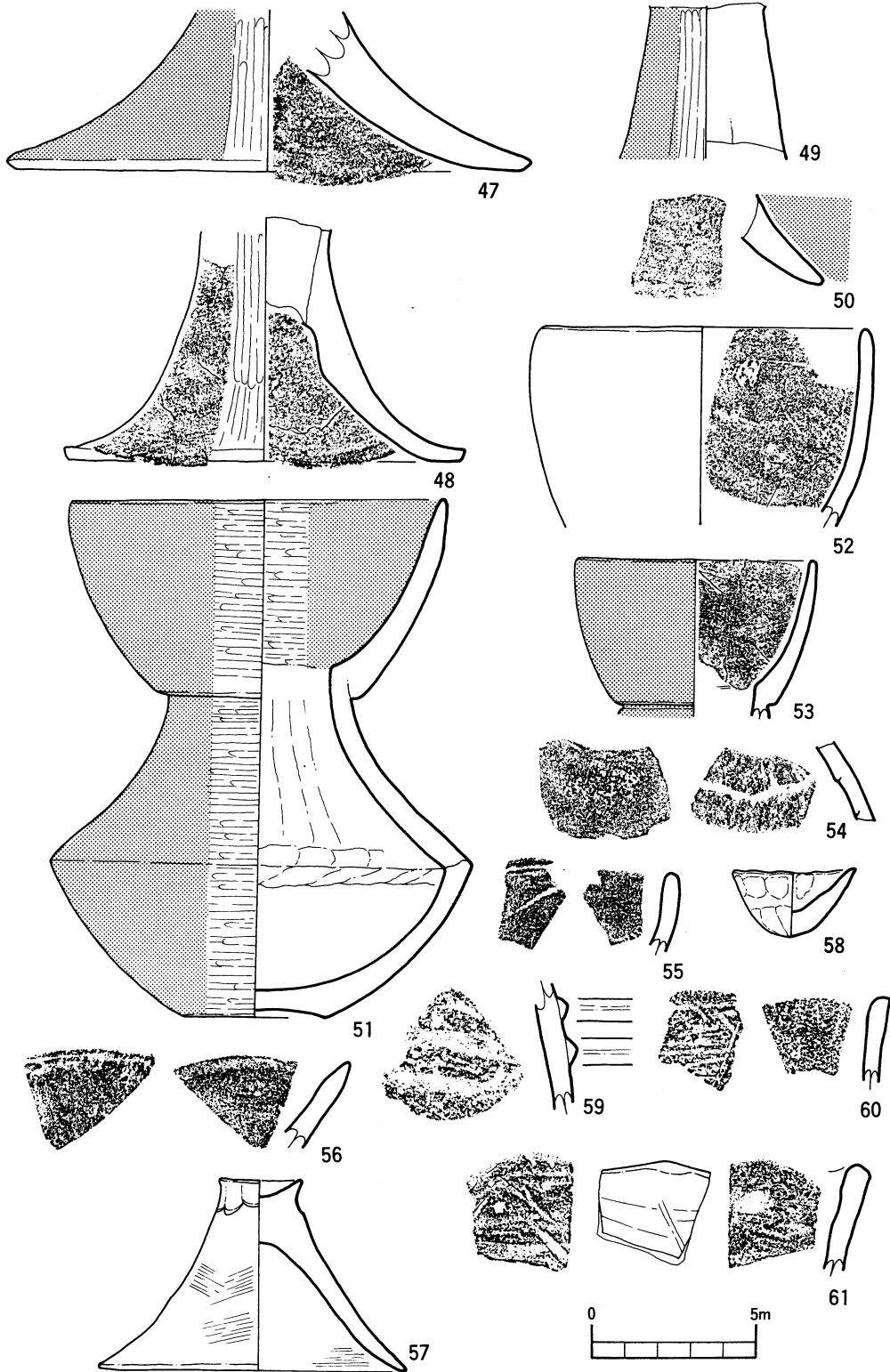


第13图 1号住居跡出土遺物(3)



第14图 1号住居跡出土遺物(4)





第15图 1号住居跡出土遺物(5)

### 第3節 2号住居跡

**位置：**C-5区から検出され、1号住居跡の南南西26mの地点に位置する。床面の標高は11.40mである。

**検出：**Ⅲ層上面の精査を行った時点で、輪郭を確認した。南西壁部分は近代の掘り込みが2本重なっている。また、南東壁部分は近世の溝によって一部切られているが、床面までは及んでいなかった。平成元年度の確認調査で中央部分にトレンチが開けられた。

**平面形：**5m35cm×4m82cmの長方形をなし、面積は24.3㎡である。長軸の方向は、ほぼ北西である。

**住居内：**壁はほぼ垂直に掘り込まれ、検出面からの深さは44cmを測る。3つの浅い掘り込みを確認したが、いずれも深さ5cm以下である。南西壁面には奥行き18cmの壁内掘り込みが検出された。平面形は80cm×68cmの楕円形であり、床面よりもさらに20cm掘り込まれている。

**埋土：**上から下まで変化はなく、暗黄褐色を呈する砂質の土層である。しまりがあり、堅い。

**遺物出土状況：**他の住居跡に比べて遺物の出土は少なく、器種による出土地点の違いもみられなかった。73の鉄鏃は南西壁沿いのほぼ中位から出土した。75の甕形土器と76の高坏は確認調査時に出土したものであるが、出土状況から2号住居跡内に存在していたと考えられる。総数129片の土器と1点の鉄器・1点の黒耀石が出土した。

### 第4節 2号住居跡出土遺物

**甕形土器(62~66・75・131)：**2号住居跡内出土土器の50%を占める。突帯が巡る頸部から口縁部にかけては、屈曲するものはなく直口するものばかりである。口唇部はわずかに平な面取りをするものがみられる。突帯の刻みを入れる方法は3種類みられる。ヘラによるものが28.6%、指おさえによるものが14.3%、指つまみによるものが57.1%である。

**脚部(68)：**2号住居跡内出土土器の7.1%を占める。内面に突起をもつかどうか判断できるものはない。

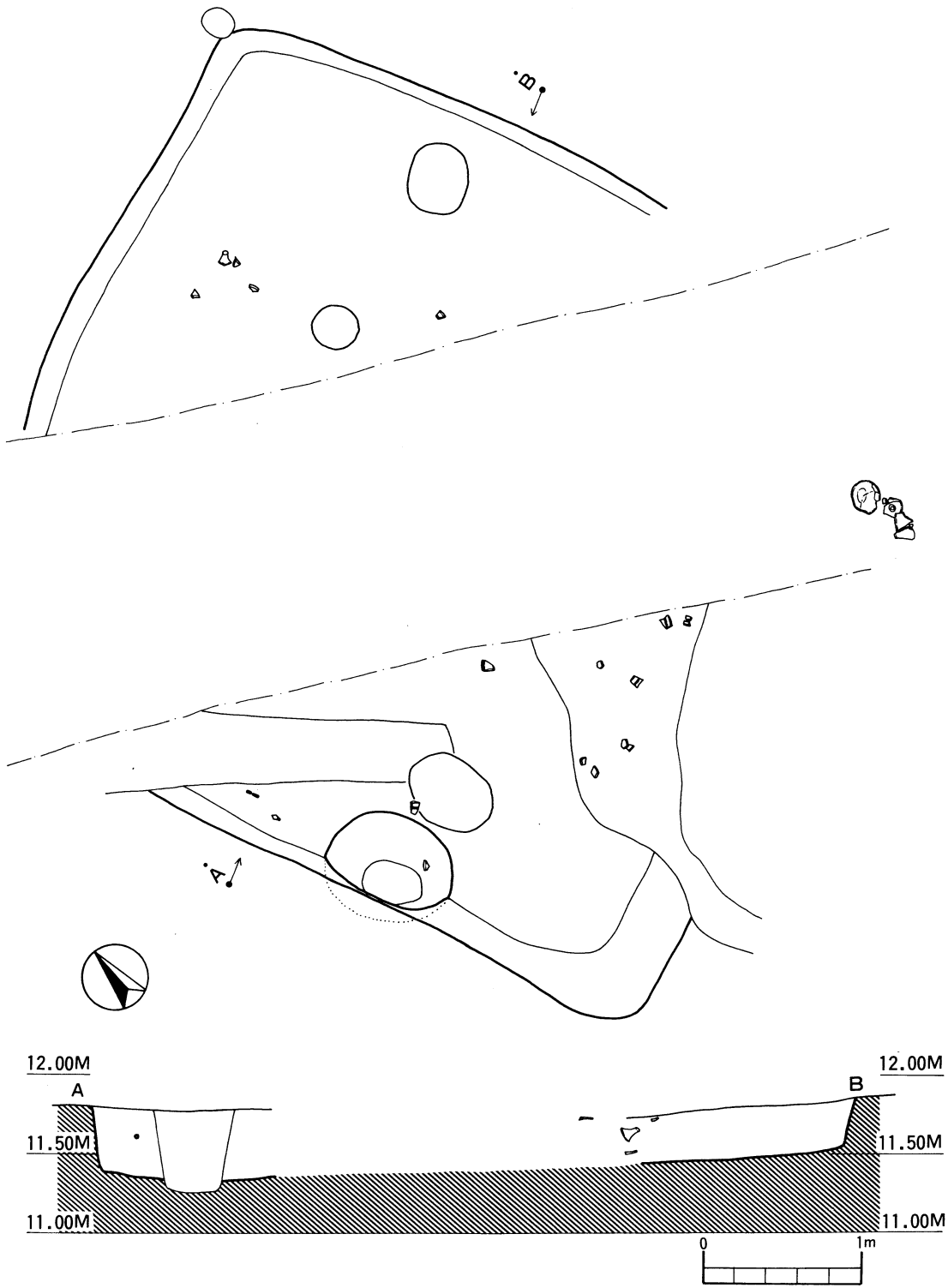
**高坏(67・69~71・76)：**2号住居跡内出土土器の35.8%を占める。脚部との接合面から屈曲部には反りながら至る。坏部と脚部の高さは一致している。脚部は屈曲をもたない末広りの器形である。

**埴形土器(72)：**2号住居跡内出土土器の7.1%を占める。

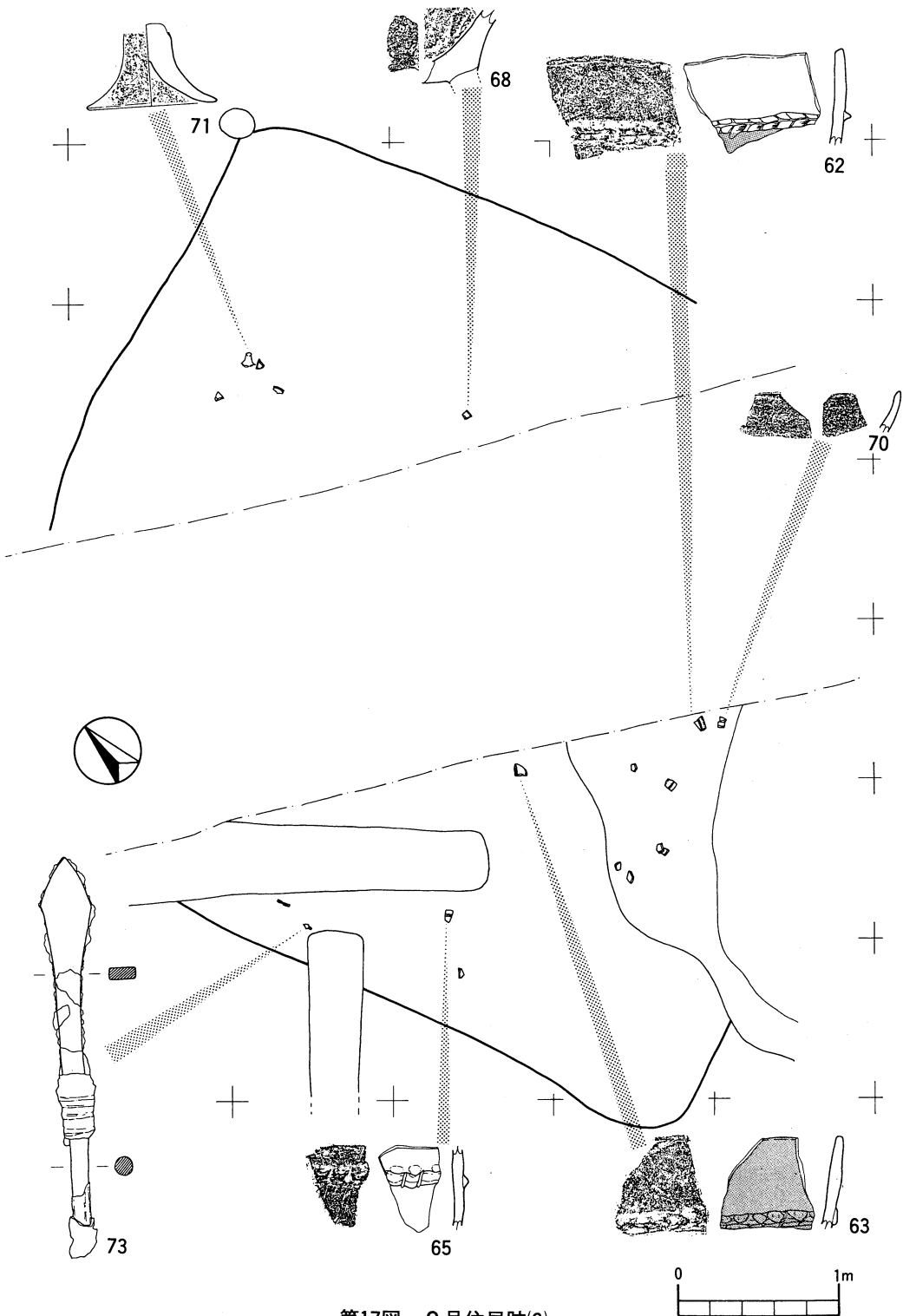
**鉄鏃(73)：**現存する長さは12.5cm、最大幅1.6cm、身部最大厚0.4cmである。身部は断面長方形であり、柄部は断面円形である。鏃頭は菱形をなし、柄部は桜皮が巻かれている。

**縄文土器(74)：**表面に貝殻腹縁による相交孤文が描かれている。

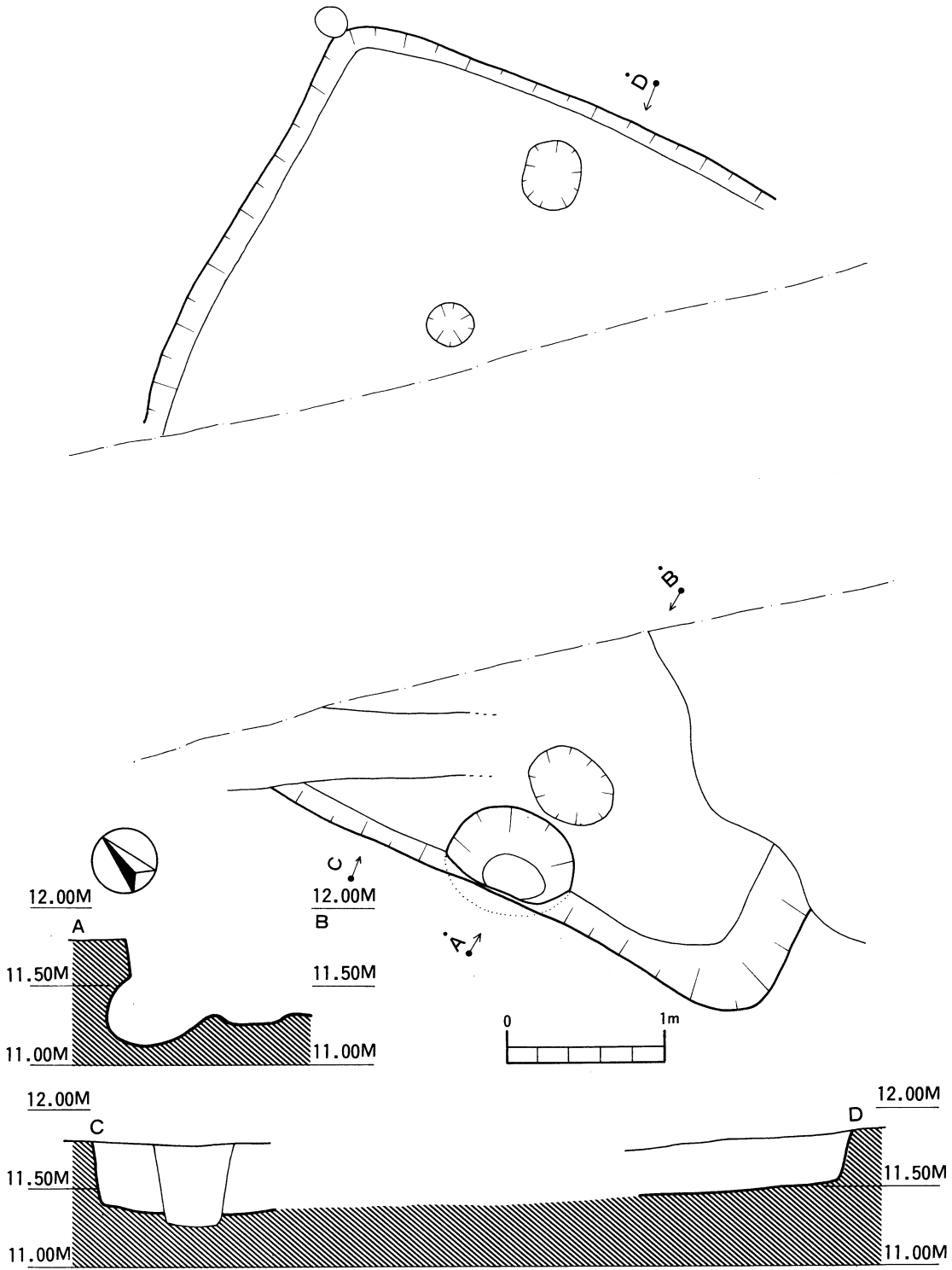
**黒耀石：**表皮を残す半欠の黒耀石が1点出土した。加工痕はみられない。



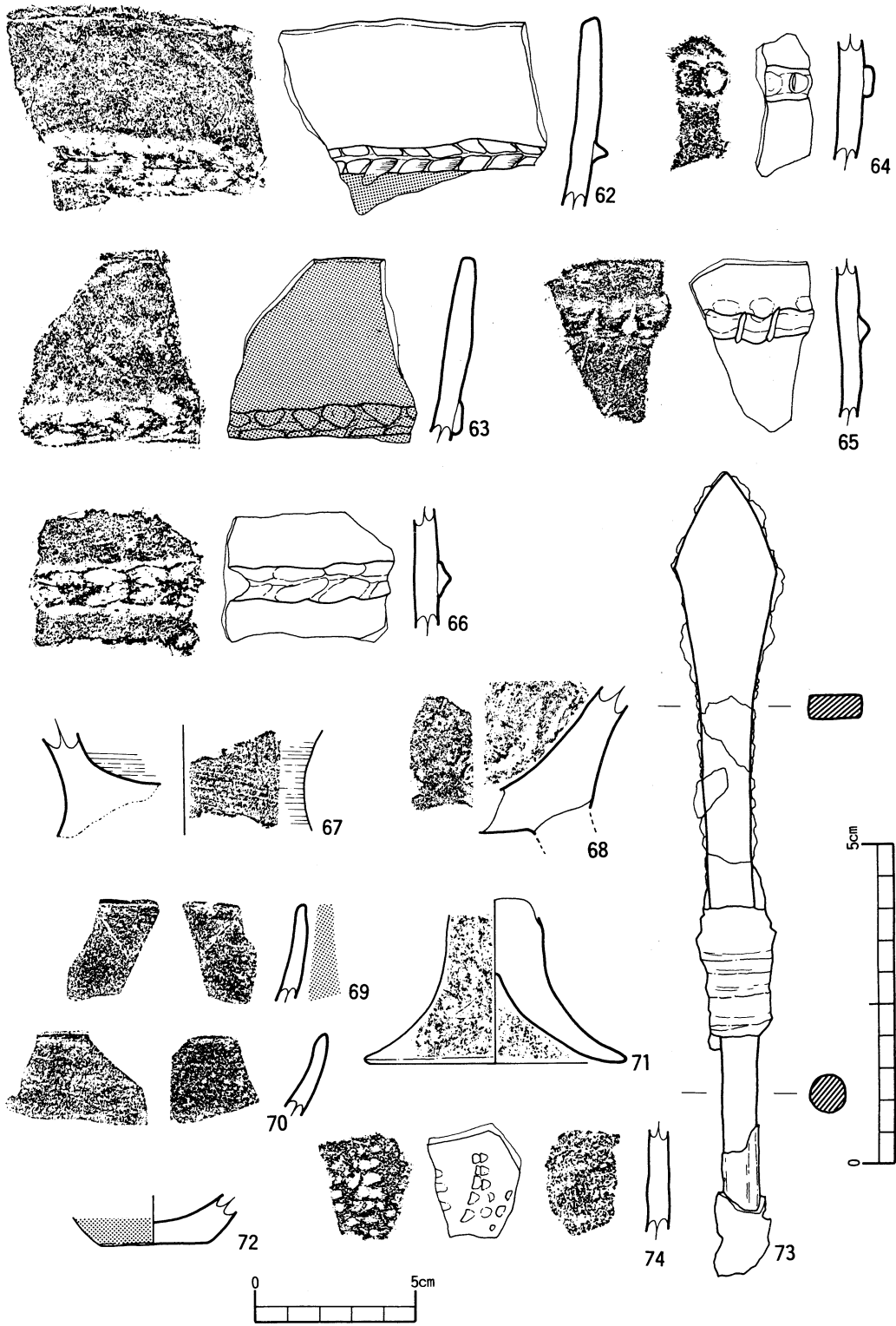
第16图 2号住居跡(1)



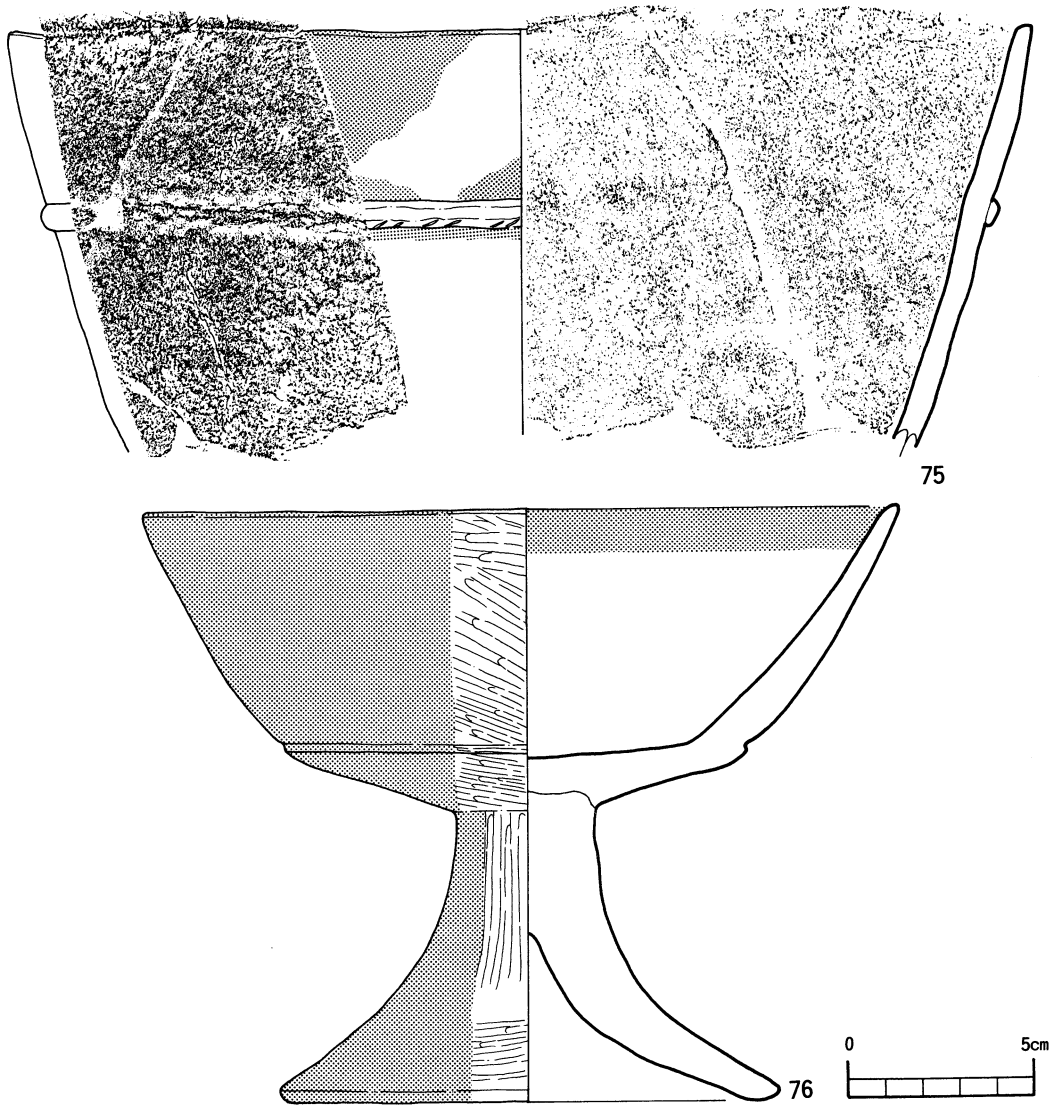
第17图 2号住居跡(2)



第18图 2号住居跡(3)



第19图 2号住居跡出土遺物(1)



第20図 2号住居跡出土遺物(2)

### 第5節 3号住居跡

**位置：**D-6区から検出され、1号住居跡の南西34m、2号住居跡の南南東10mの地点に位置する。床面の標高は11.78mである。

**検出：**Ⅲ層上面の精査を行った時点で、輪郭を確認した。この地点は発掘範囲内でもっとも高い場所であり、近代の削平が床面近くまで深く及んでいた。北壁部分は、洪武通寶を出土した墓穴と重複している。

**平面形：**3 m 82cm×3 m 10cmの長方形をなし、面積は12.2㎡である。長軸は、北東を向いている。

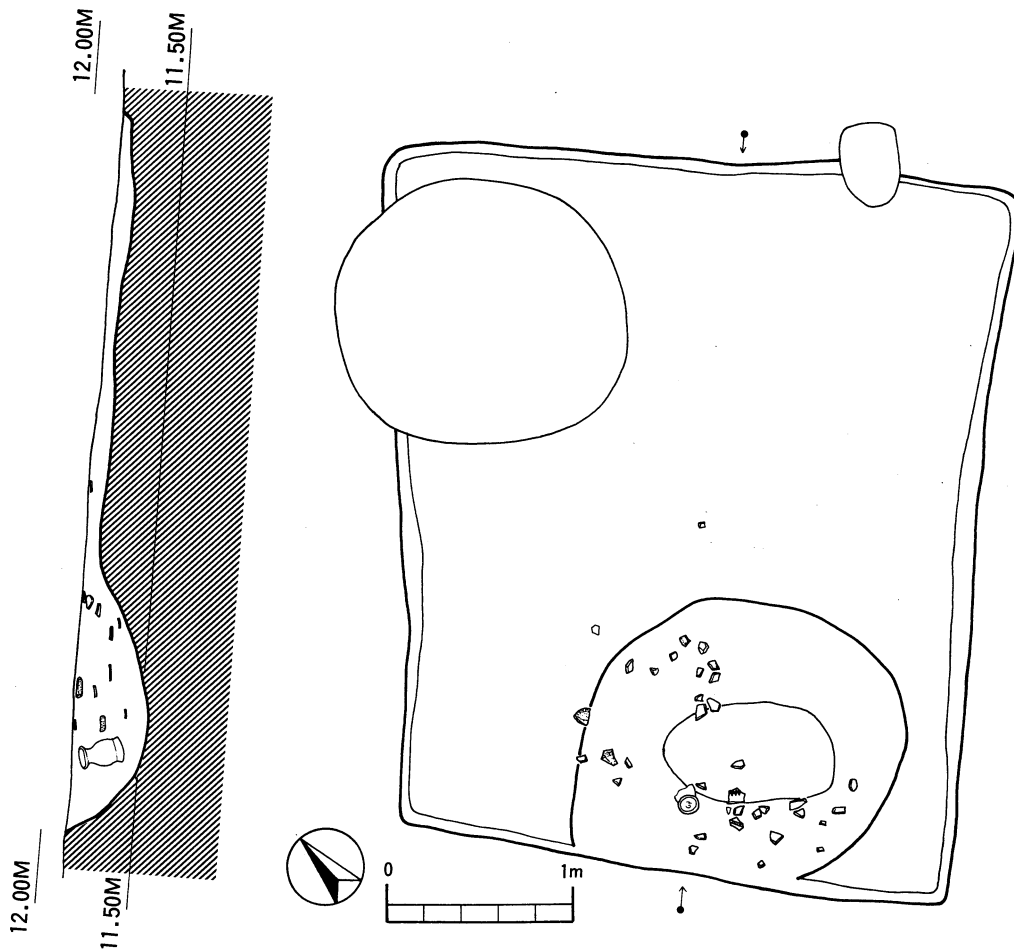
**住居内：**壁はやや傾斜をもって掘り込まれる。検出面から床面までは10cmを測る。南西壁沿いのほぼ中央には1 m 70cm×1 m 50cmのほぼ円形をした大きな掘り込みが検出された。床面からの深さは、30cmを測る。柱穴その他のピット類は検出されなかった。

**埋土：**上から下まで変化はなく、暗黄褐色を呈する砂質の土層である。しまりがあり、堅い。

**遺物出土状況：**近世の削平が床面近くまで及んでいたため、遺物の出土は少なく、器種による出土地点の違いはみられなかった。円形掘り込み内の遺物の残りは良く、81の甕形土器は倒立した状態で出土した。総数47片の土器と2点の石が出土した。

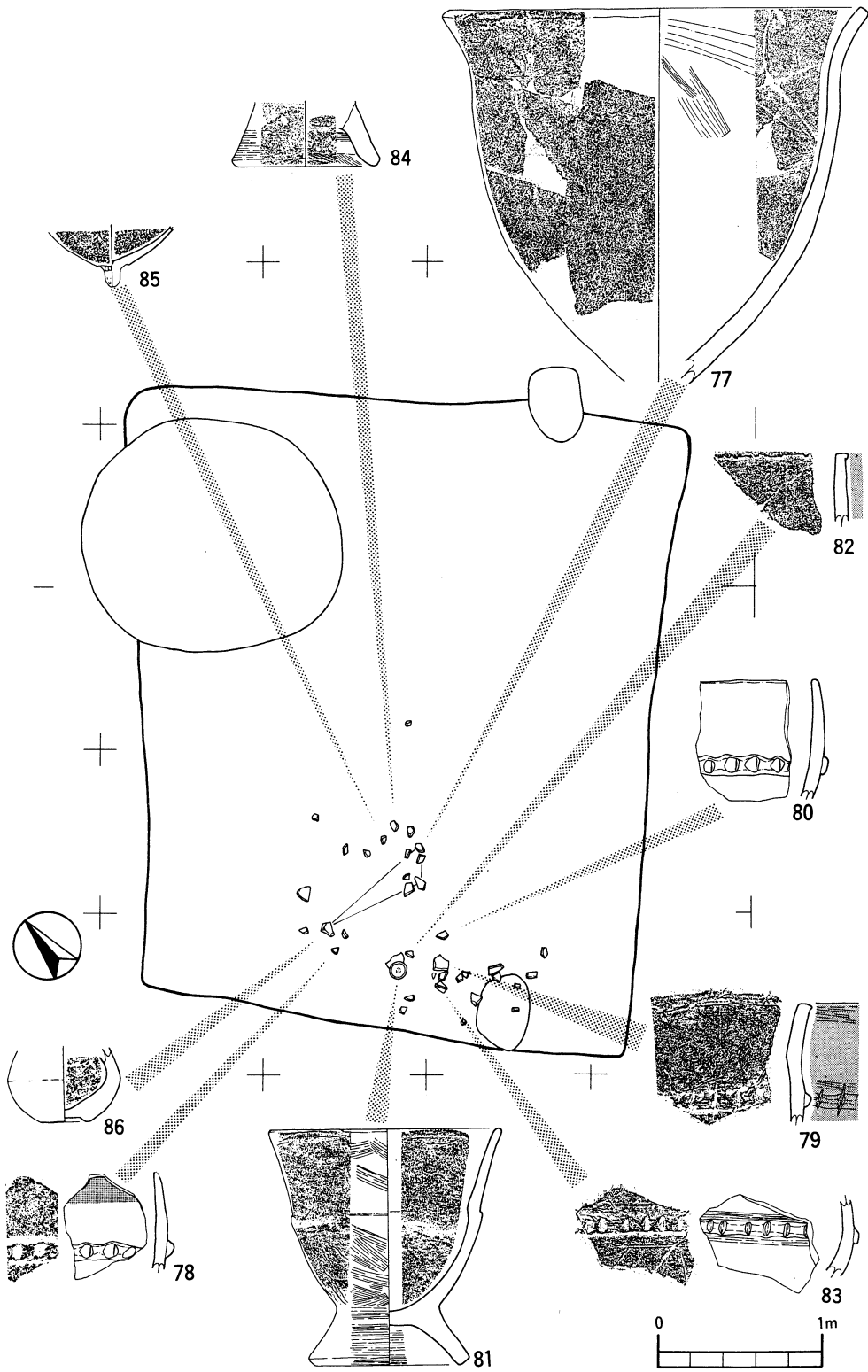
### 第6節 3号住居跡出土遺物

**甕形土器 (77~83)：**3号住居跡内出土土器の70%を占める。突帯をもたないものが33.3%，ヘラまたは棒による突帯が33.3%，指おさえによるものが33.3%である。指つまみによるものはみられない。口縁部の形態にも違いがみられる。突帯をもたない土器は外反する口縁部である。一方、ヘラ刻みを施す突帯をもつ口縁部はわずかに外反している。また、指押えによる刻み突



第21図 3号住居跡(1)





第22图 3号住居跡(2)

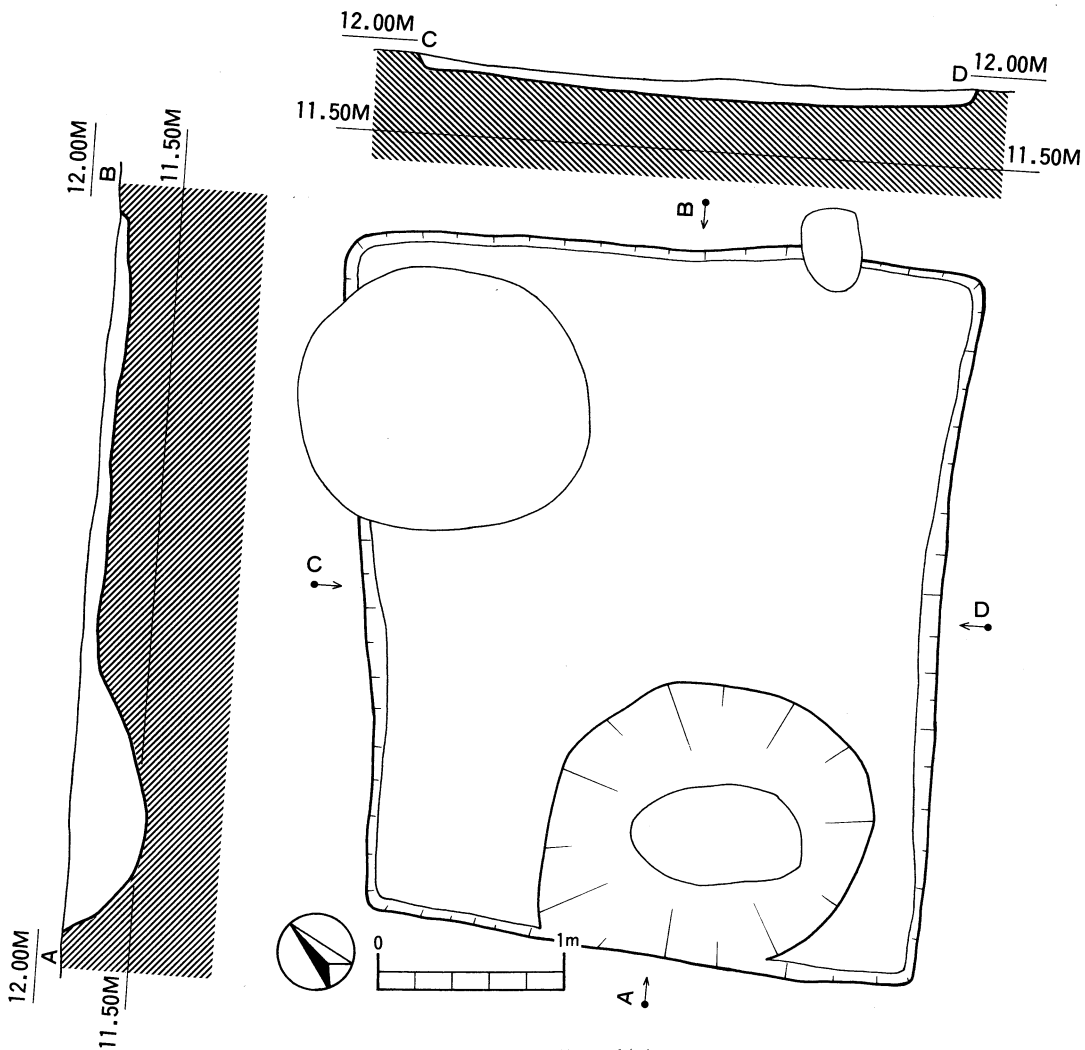
帯をもつ土器は、やや内湾した口縁である。81は脚部がしっかりしている割には胴部以上が小さな作りである。口縁部と胴部の境には段があり、口縁部は外反する。脚部内面に突起はみられない。

**脚部(84)：**3号住居跡内出土土器の10%を占める。

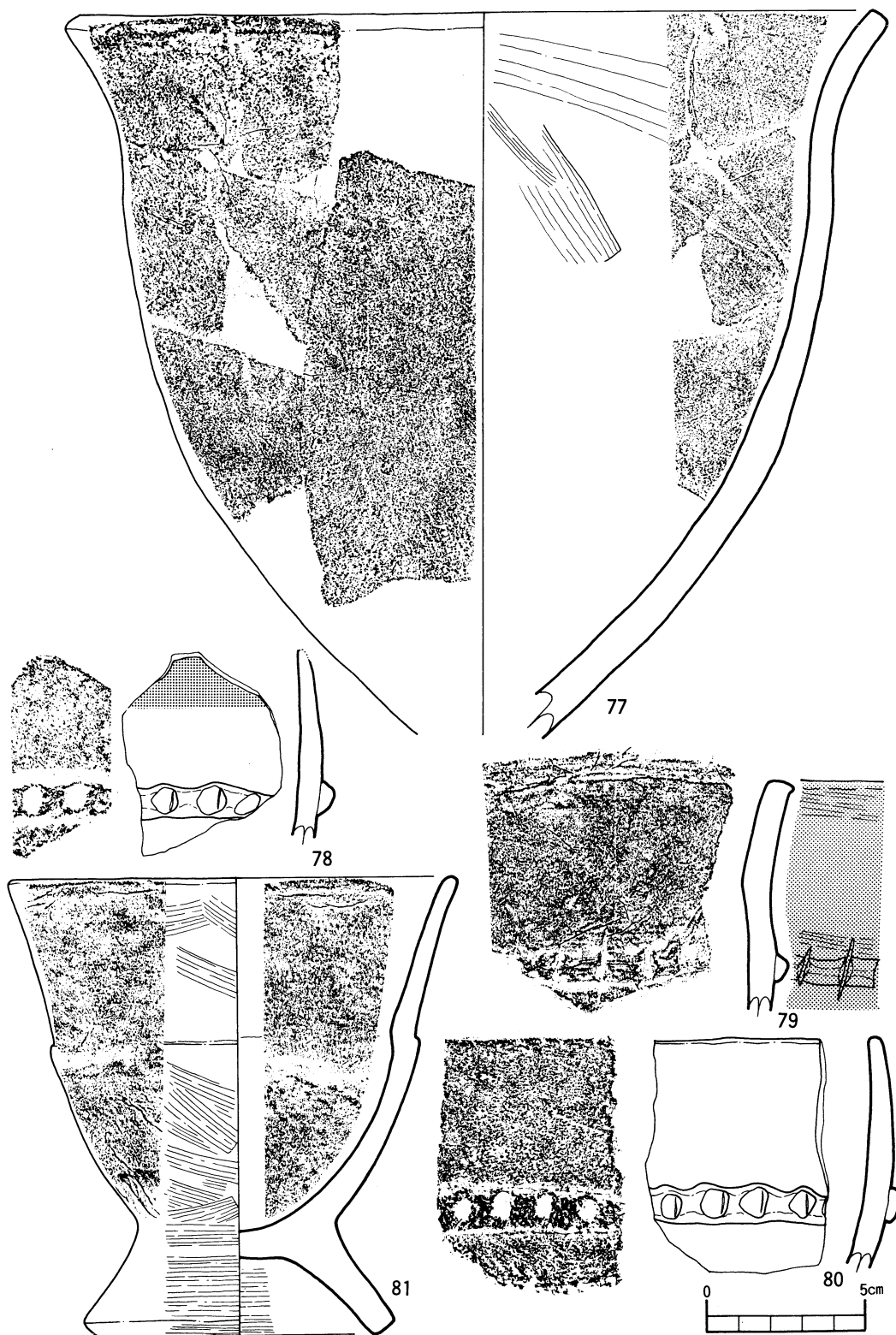
**高坏(85)：**3号住居跡内出土土器の10%を占める。非常に薄手の作りである。脚部との接合部分は突起状になり差込み式だったことが窺える。

**埴形土器(86)：**3号住居跡内出土土器の10%を占める。

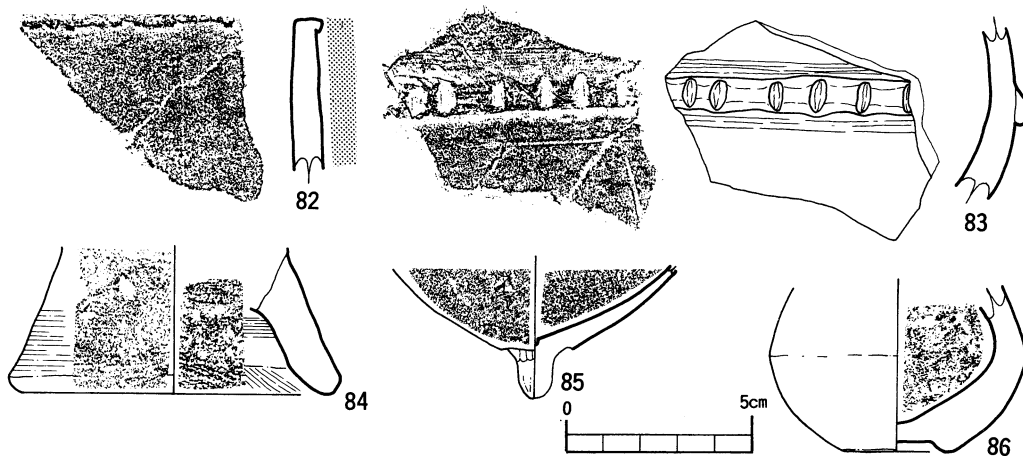
**礫(図版6)：**一つは長さ9.9cm, 幅8.7cm, 厚さ2.5cm, 重さ250g の自然面を残した礫である。もう一つは長さ10.8cm, 幅8.6cm, 厚さ2cm, 重さ240g の自然面を残した礫である。両者とも石質は同じである。



第23図 3号住居跡(3)



第24图 3号住居跡出土遺物(1)



第25図 3号住居跡出土遺物(2)

#### 第7節 4号住居跡

**位置：**D-2区から検出され、1号住居跡の東8mの地点に位置する。床面の標高は11.56mである。

**検出：**Ⅲ層上面の精査を行った時点で、輪郭を確認した。近代の掘り込みによって削平を受けている。幸いに床面までは及んでいなかった。

**平面形：**2m78cm×2m72cmの方形をなし、面積は7.53㎡である。長軸は北北西を向く。南側壁面の一部は半月形の張り出しをもっている。

**住居内：**壁はほぼ垂直に掘り込まれる。検出面から床面までの深さは24cmである。住居内には4つのピットがみられる。中央のピットは直径30cm、深さ18cmで最もしっかりしている。南壁沿いにある大型のピットは直径50cm、深さ9cmである。西側壁沿いに並ぶ2つのピットは深さ7cmと浅い。

**埋土：**上から下まで変化はなく、暗黄褐色を呈する砂質の土層である。しまりがあり、堅い。

**遺物出土状況：**住居跡の中央部分から遺物の出土が多くみられた。器種による出土地点の違いはみられないが、他の住居跡に比べて甕形土器または鉢形土器の脚部の出土が多かった。総数69片の土器と1点の石が出土した。

#### 第8節 4号住居跡出土遺物

**甕形土器 (87~89)：**4号住居跡内出土土器の14.3%を占める。頸部から口縁部にかけては、屈曲するものではなく直口するものばかりである。口唇部と突帯までの幅は比較的短い。突帯の刻みを入れる方法は2種類みられる。指おさえによるものが66.7%、指つまみによるものが33.3%である。

**脚部 (90~100・196)：**4号住居跡内出土土器の57.1%を占める。内面に突起をもつものが62.5%、もたないものが37.5%である。96の突起はかなり強い意志をもって作りだしている様子

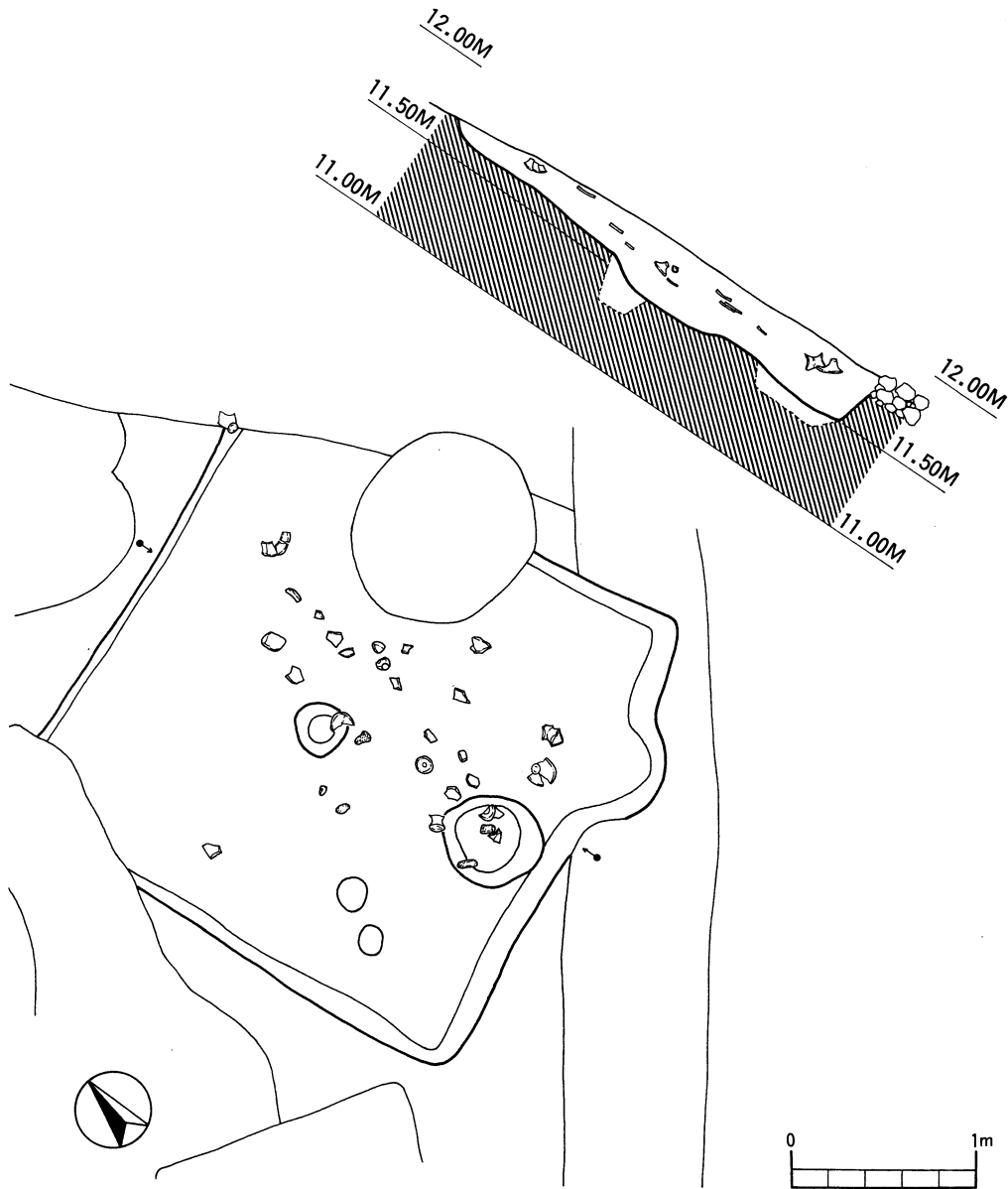
が窺える。

高坏(101~104)：4号住居跡内出土土器の19%を占める。

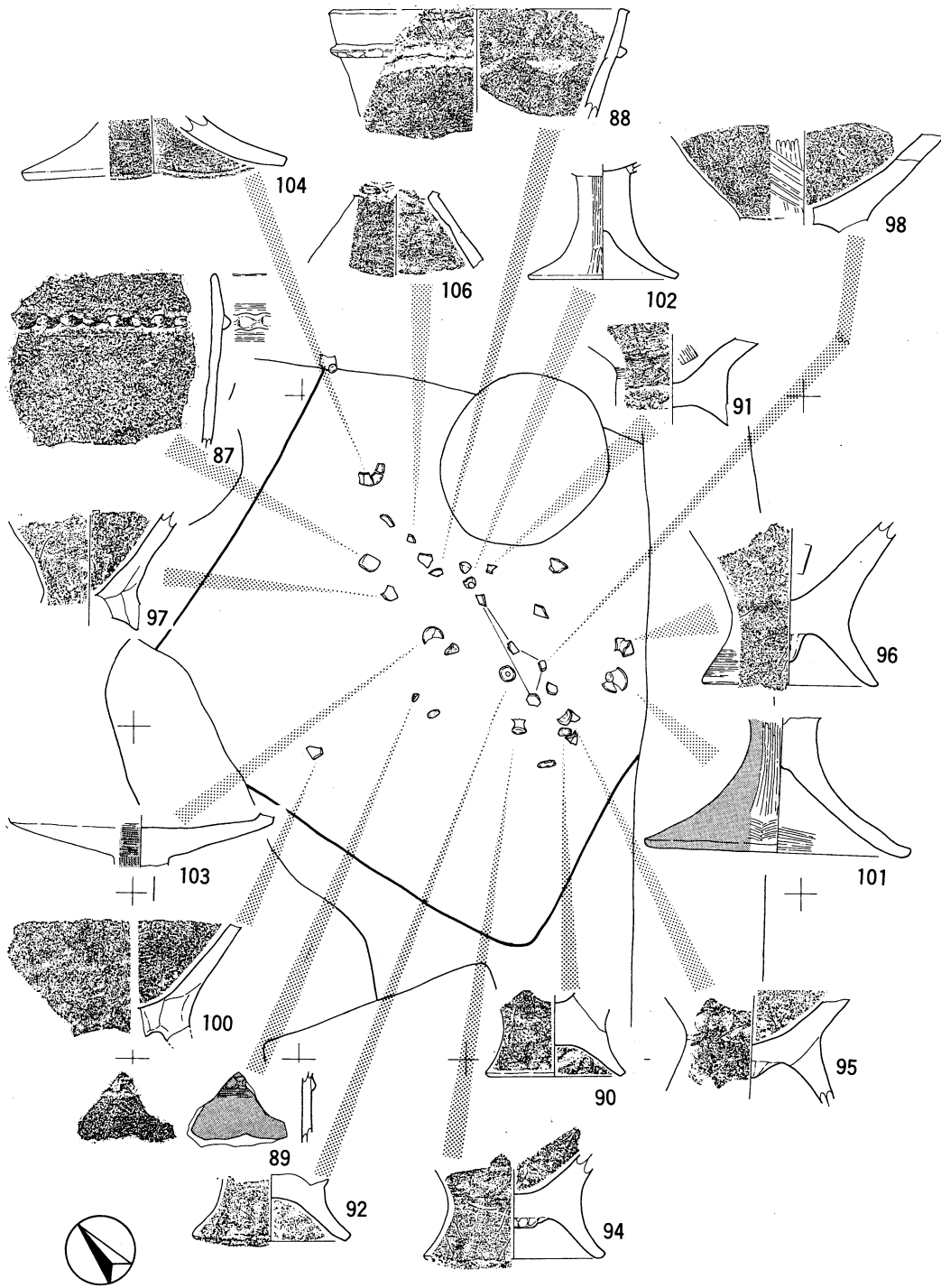
埴形土器(108)：4号住居跡内出土土器の4.8%を占める。

その他の土器(105)：4号住居跡内出土土器の4.8%を占める。

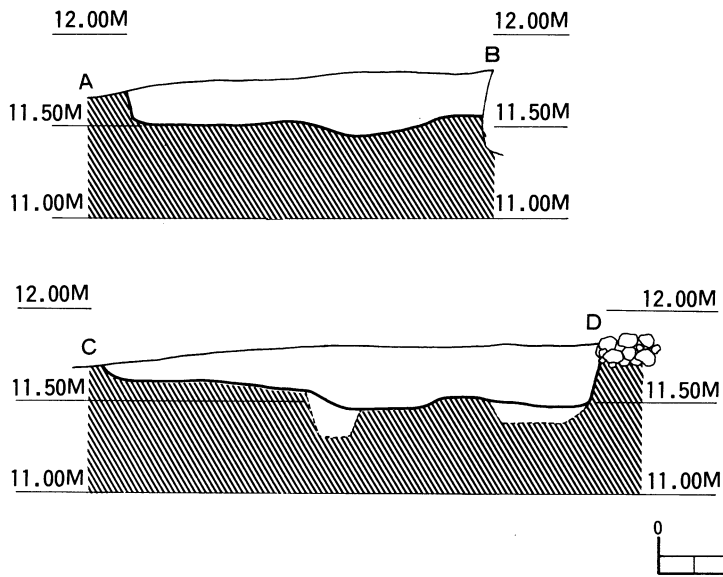
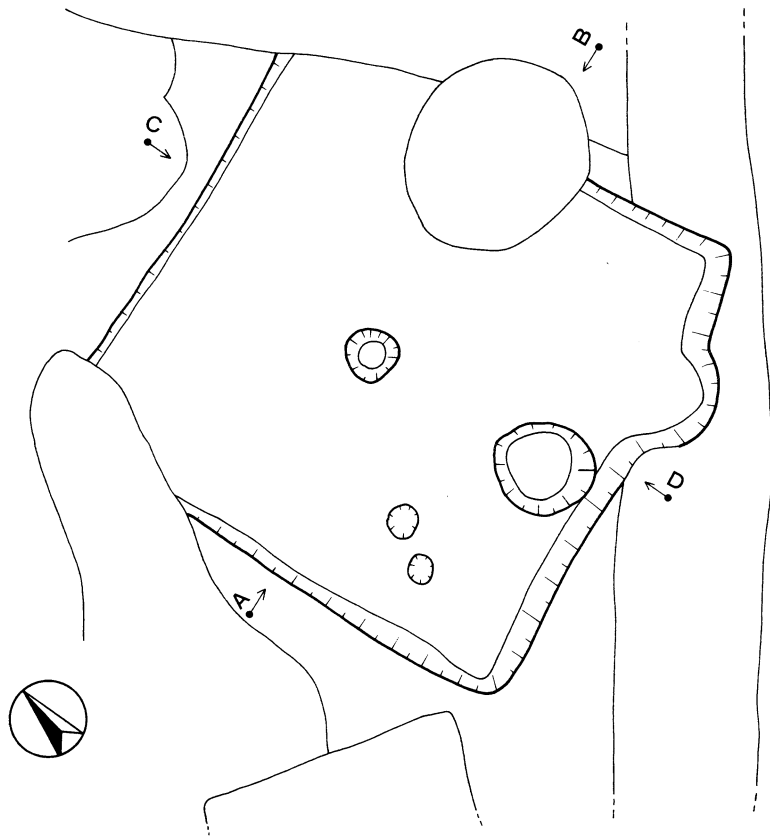
礫(図版6)：長さ8.9cm, 幅4.9cm, 厚さ4cm, 重さ200gの自然礫である。



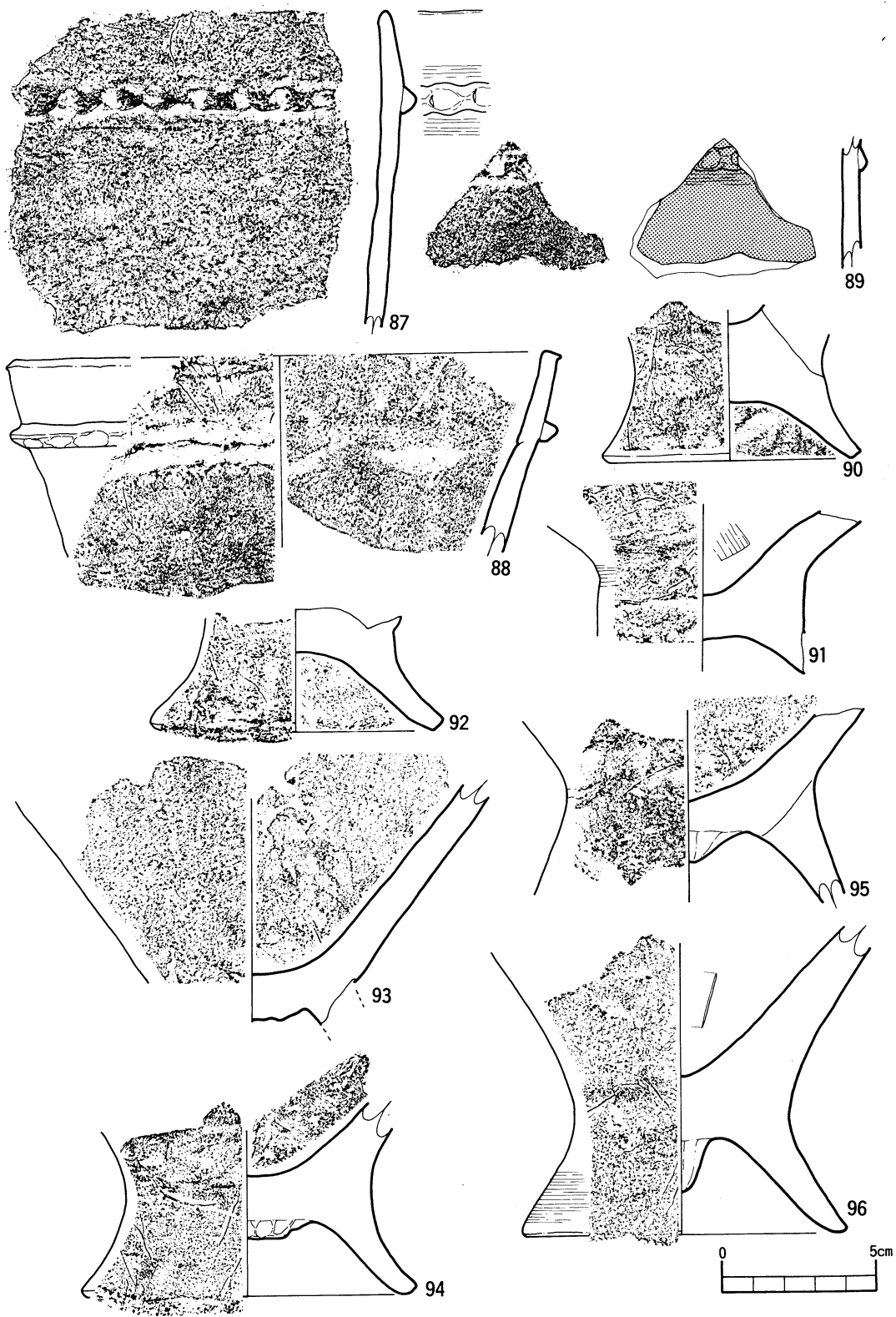
第26図 4号住居跡(1)



第27图 4号住居跡(2)

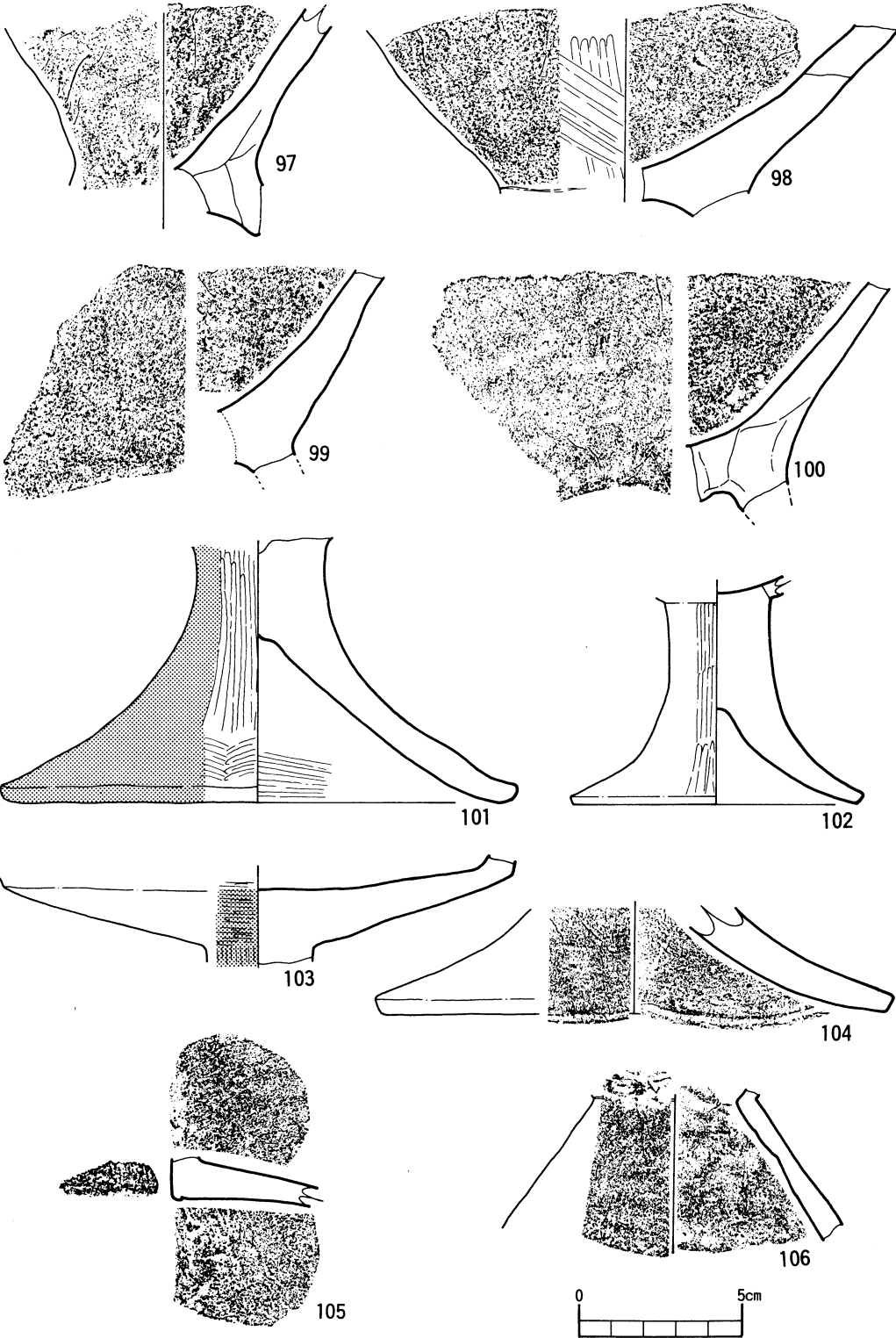


第28图 4号住居跡(3)



第29图 4号住居跡出土遺物(1)





第30图 4号住居跡出土遺物(2)

## 第 5 章 平安時代

### 第 1 節 遺 構 (第31図・32図)

遺跡の南西部、C・D-9～8区の表土を剥ぐと、すぐに第IV層の灰黄褐色砂層が見られる。

この南西側は第II層がなく、わずかにIII層が残りIV層の砂層へと続いている。この砂層の面で調査区域の地形を概観してみると、南西部のD-8～9区が標高12mを測り、南西部から南東側へかけてわずかに傾斜している。また、B～A区に向かっても傾斜し、A-2～3区では標高11mを測る。

このような地形の中でD-9区からC-8区にかけて溝遺構を検出した。溝遺構は、ほぼ南北に走っている。溝の掘り込みの結果、断面は「V」字形に近い形であった。落ち込んでいた土層は下から灰茶褐色、黄混黒褐色等で遺跡の第III層の土である。

さらに、北側のB-7区に確認トレンチをいれた結果、トレンチ内は半分以上攪乱されていたが、北側の壁面に溝の断面を確認した。断面の形は「U」字形をしていた。III c層の上面から掘り込まれていた。南側は住宅があり確認できなかった。溝の長さは発掘部分が19m、確認トレンチまで約30mある。まだ続くものと思われる。

溝の最大幅は1.76m、最小幅1.38mを測る。深さは1番深いところで1.1m、浅いところで1mある。溝の底の標高が南側で11.26m、北側に向かって平均10.96mの高さで続き、B-7区の確認トレンチで10.89mを測り、溝が南側から北側へ向かってだんだん低くなっている。

### 第 2 節 遺 物 (第33図)

出土遺物は土師器と土器片で6点出土した。107は溝の底より、108～111は溝の中ごろ、112は溝の上面で出土した。以下器種ごとに記す。

#### 坏

107は墨書土器である。器高は4.2cm、口径は12.7cm、底径は8cmである。底部から段を作らずにまっすぐ立ち上がり、端部で丸くおさまる。内外面ともなで調整が施され、底部はへら切りである。色調は黄褐色である。胎土は精製粘土である。

また、外面の胴部には、左右対称の位置に「中」文字が2ヶ所に墨書されている。

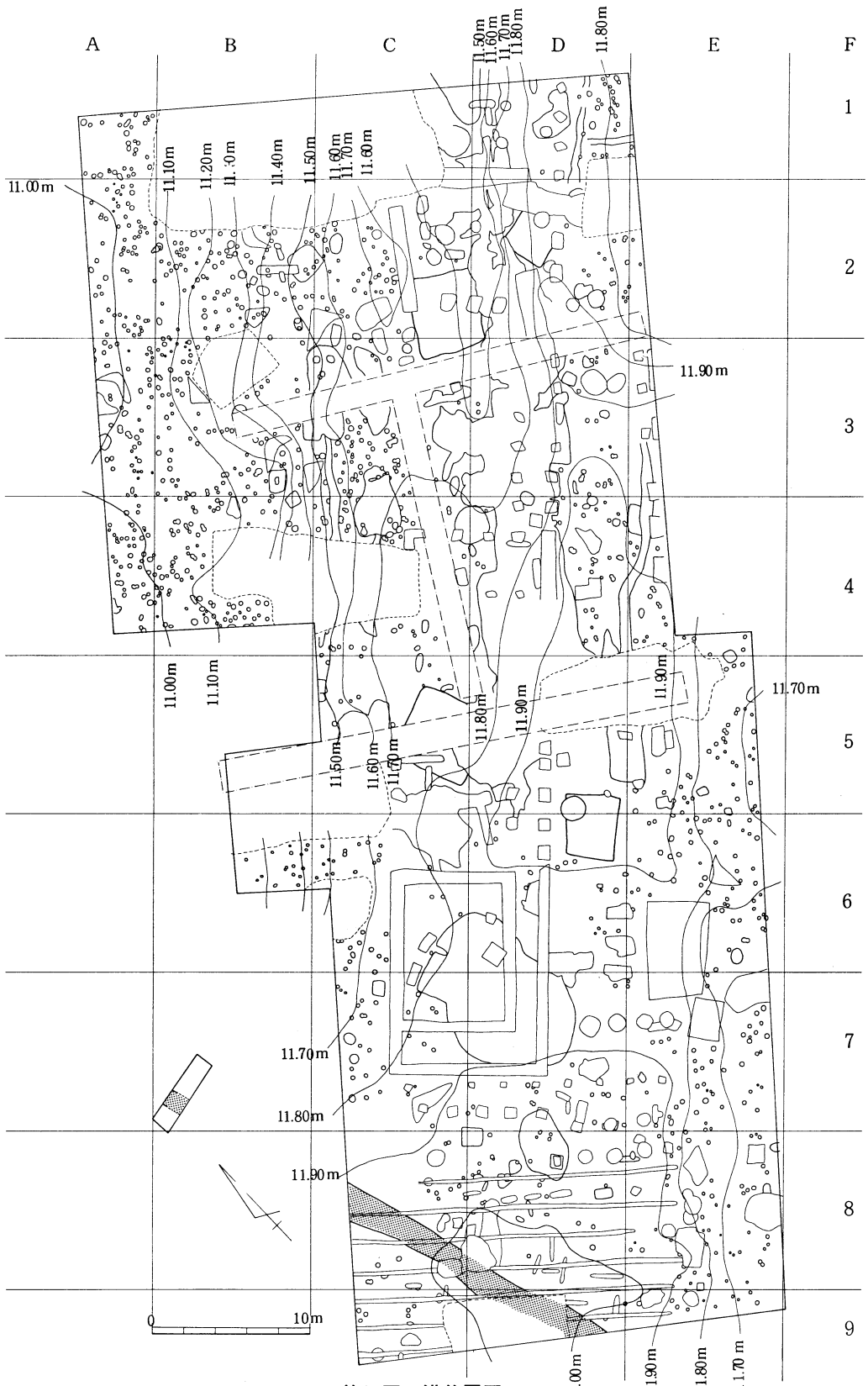
108は器高は3.7cm、口径12.6cm、底径8.1cmである。底部からまっすぐ立ち上がり、端部で丸くおさまる。内外面ともなで調整が施されている。底部はへら切りである。色調は暗黄褐色である。

109は口縁部で、大きく外へ開くように立ち上がり、端部で丸くおさまる。色調は黄褐色でなで調整が施されている。

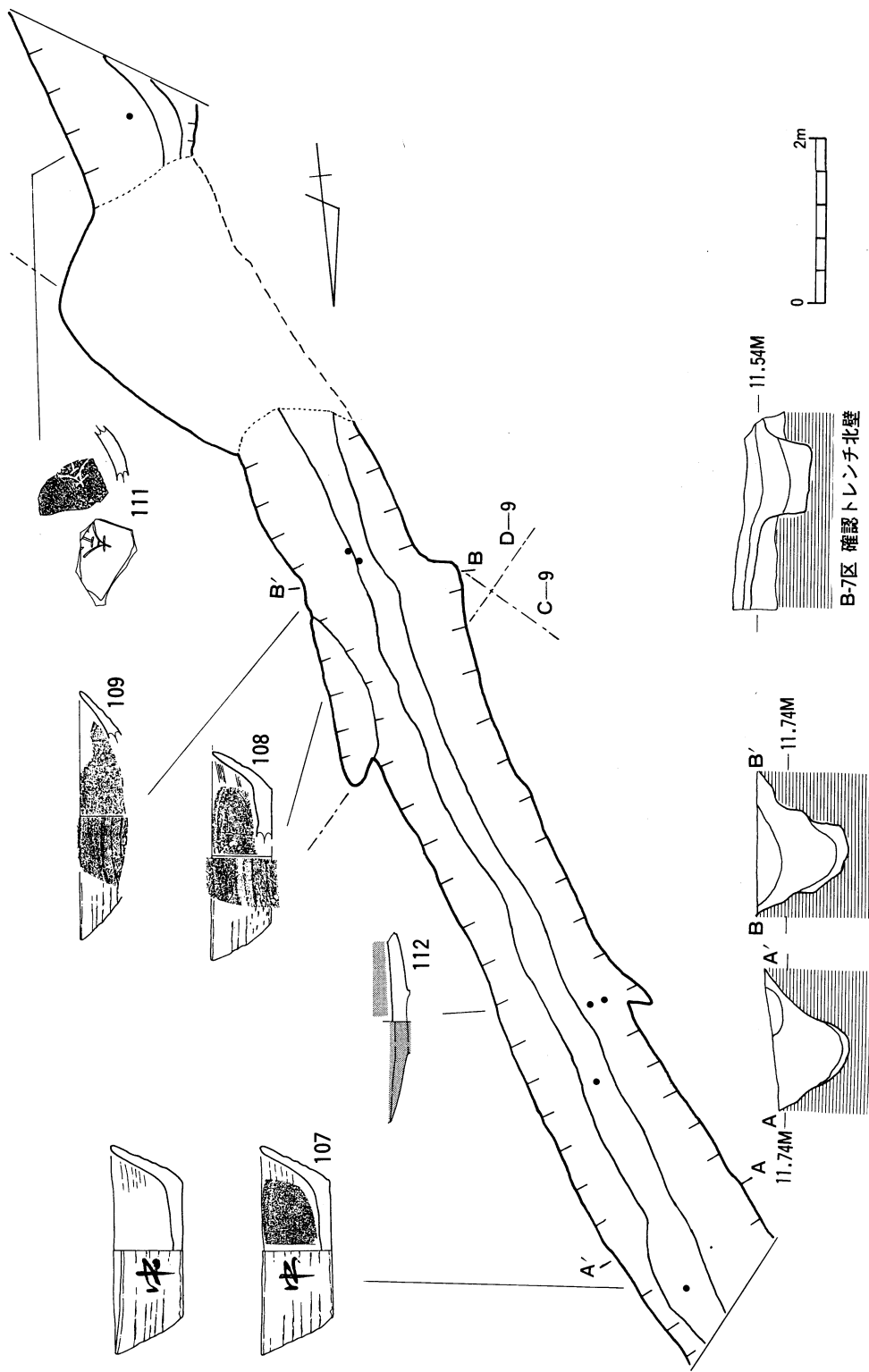
#### 盤

111は盤の底部である。器の内外面はていねいなへら磨きが施されている。色調は黄橙色である。胎土は精製粘土である。

また、内部には、へら状の器具で「奈」と刻書されている。これは、焼成前に施されたもの



第31图 沟位置图

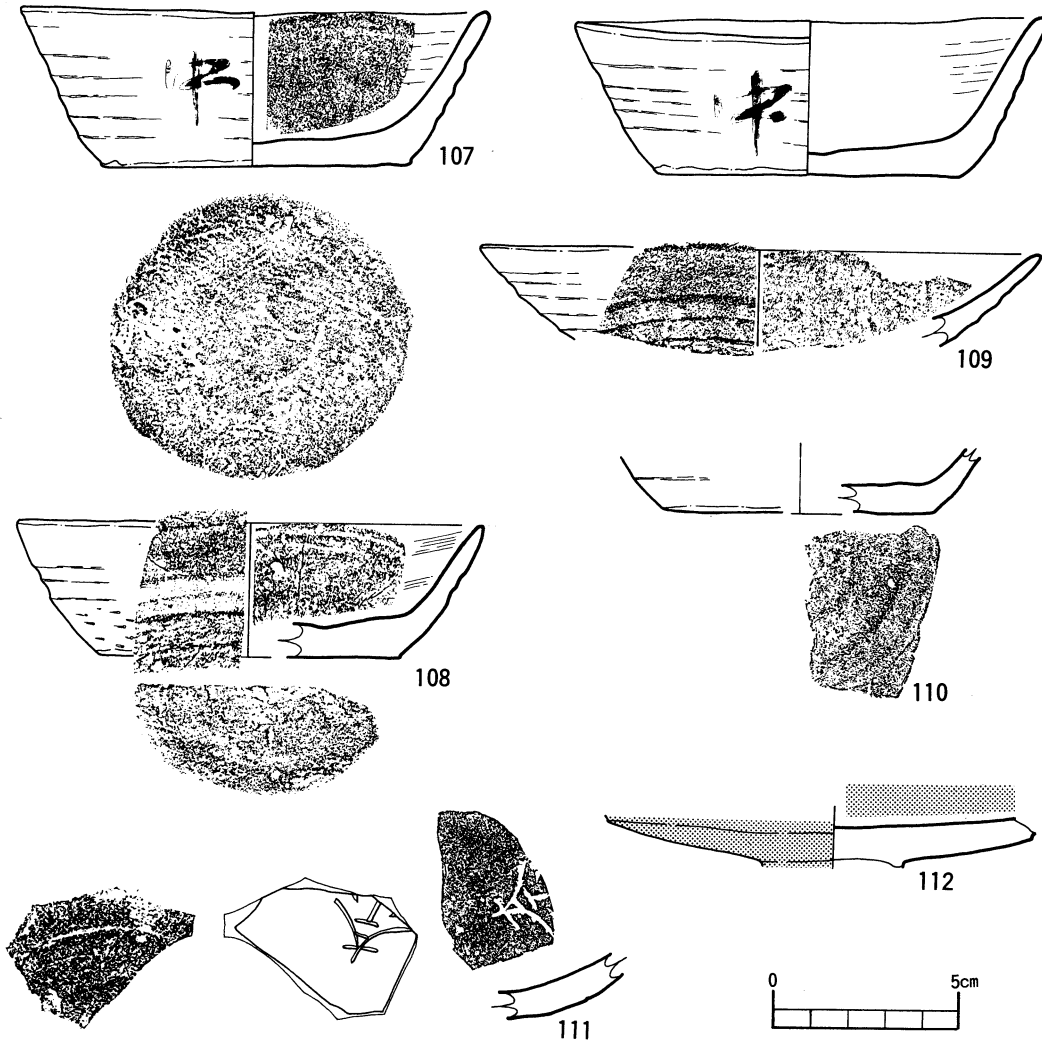


第32図 溝実測図

である。

高 坏

112は坏底部である。内外面ともいねいに磨かれ、赤彩が施されている。

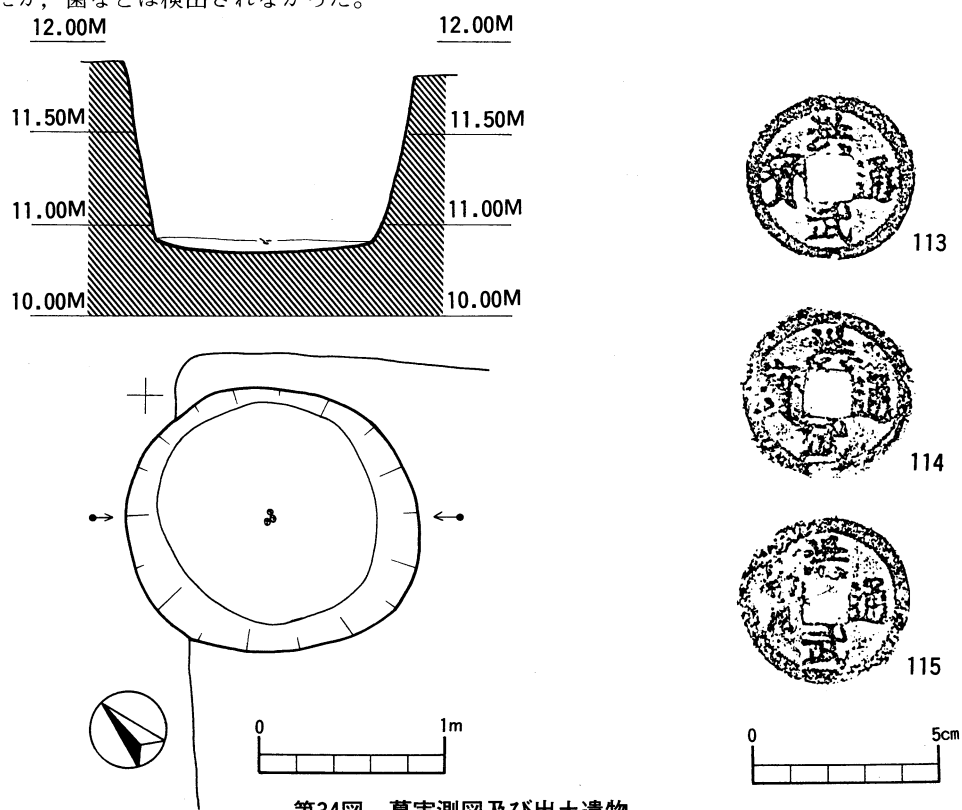


第33図 溝内出土遺物

## 第 6 章 中世から近世

### 第1節 墓

3号住居跡の一部を切った状態で検出された。検出面は1m58cm×1m42cm、床面は直径1m20cmの円形をなし、面積は1.84㎡である。検出面からの深さは1m4cmであり、床面の標高は10m84cmを測る。埋土は上から下まで黒色砂質土層である。墓穴中央に床面から6cm浮いた状態で背面が無文の洪武通寶がまとまって出土した。埋土はすべてフルイにかけて注意深く捜したが、歯などは検出されなかった。



第34図 墓実測図及び出土遺物

### 第2節 掘り込み

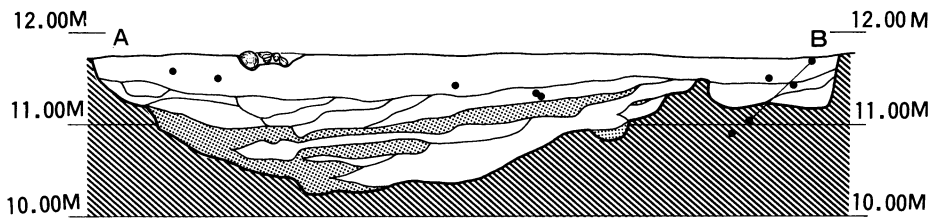
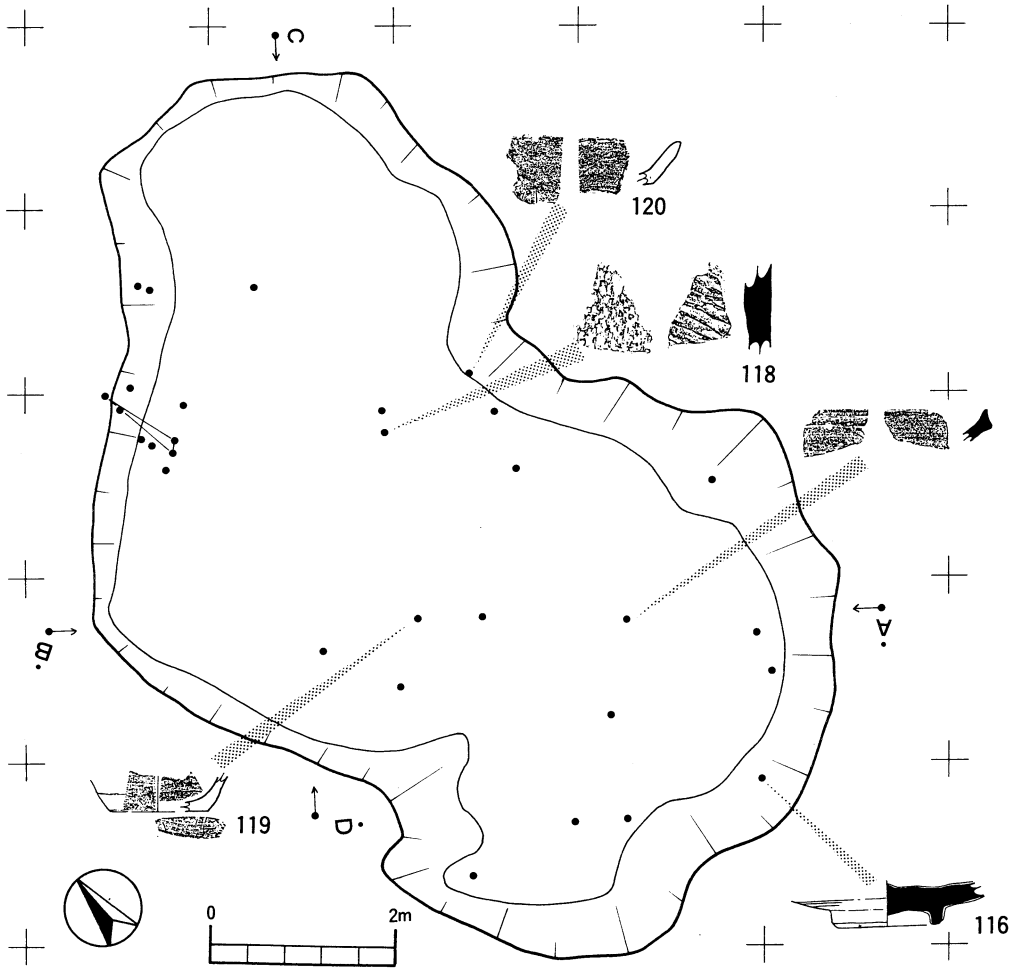
8m6cm×9m60cmの不定形の掘り込みであり、面積は50㎡である。検出面からの深さは1m48cmを測り、最深面の標高は10m24cmである。埋土は砂質土層と砂層が複雑に堆積している。遺構の大きさに比べて遺物の出土量は少なかった。全部で27点出土し、6点が古墳時代の土器(121~125・127)である。

青磁(116)：碗の底部である。

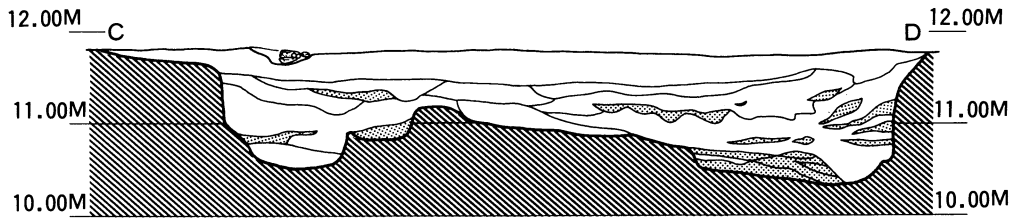
須恵器(117・118)：2点出土したが器形はわからない。

土師器(119・120)：坏が2点出土し、底面は回転糸切りによるものである。

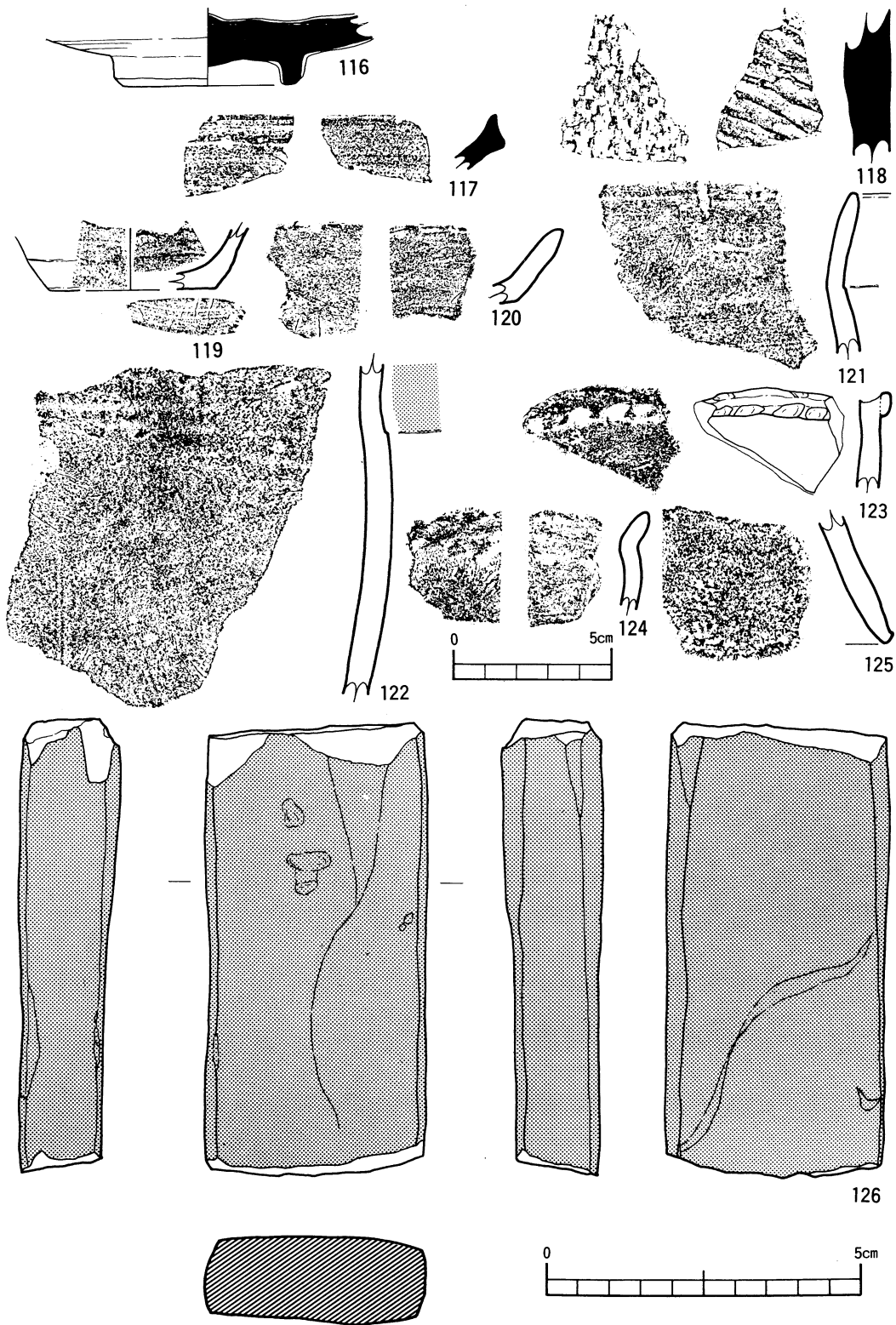
砥石(126)：4面が使用されている。



・スクリーン・トーン部分は砂層

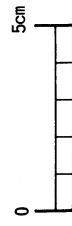
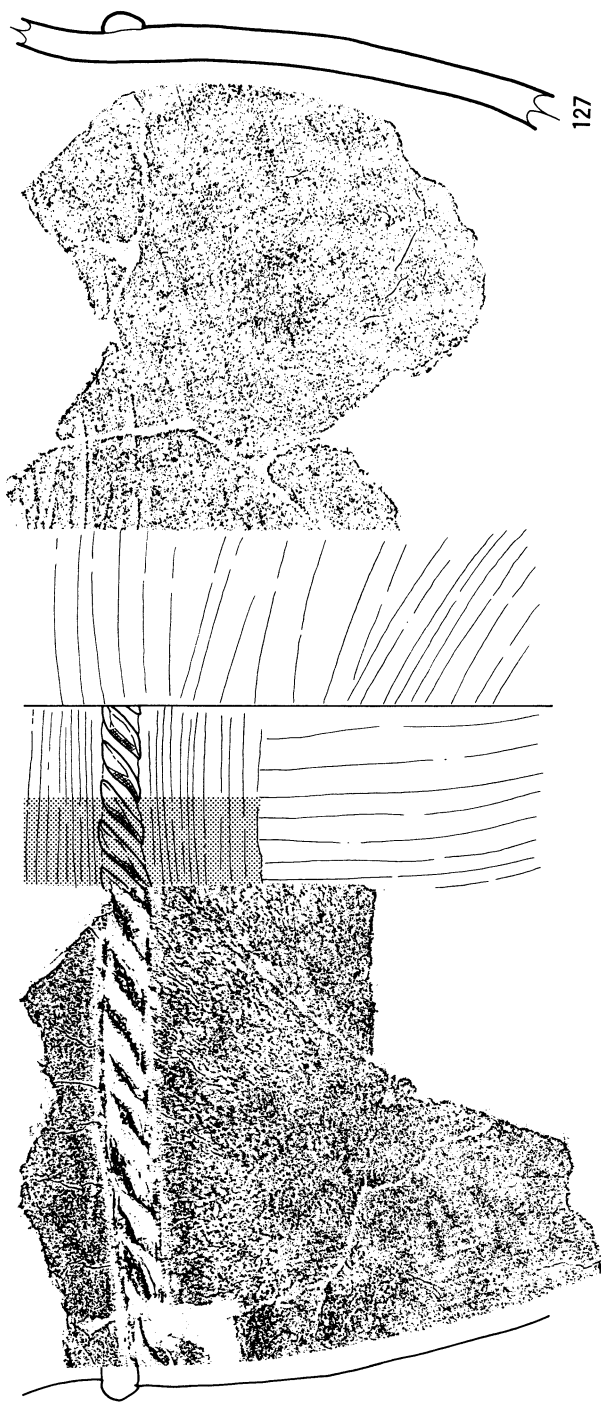


第35図 掘り込み実測図



第36図 掘り込み内出土遺物(1)





第37図 掘り込み内出土遺物(2)

### 第3節 溝状遺構 (第38図・39図・40図)

調査区域の北東側、C・D-1～5区のIV層上面に溝状の遺構を検出した。溝状遺構はD-5区からD-1区へ、ほぼ南西から北東へと延びている。幅は一定しないが、最大幅で6m、狭いところで70cmある。深さは60cmで、D-5から少しずつ深くなっていく。長さは約45mある。溝の中の埋土はII層の土が多く見られる。

また、第38図の3では、古墳時代の住居跡を切り込んでいるが確認トレンチの所が攪乱部分にあたり、北西部の溝状遺構へ続くか明らかにできなかった。

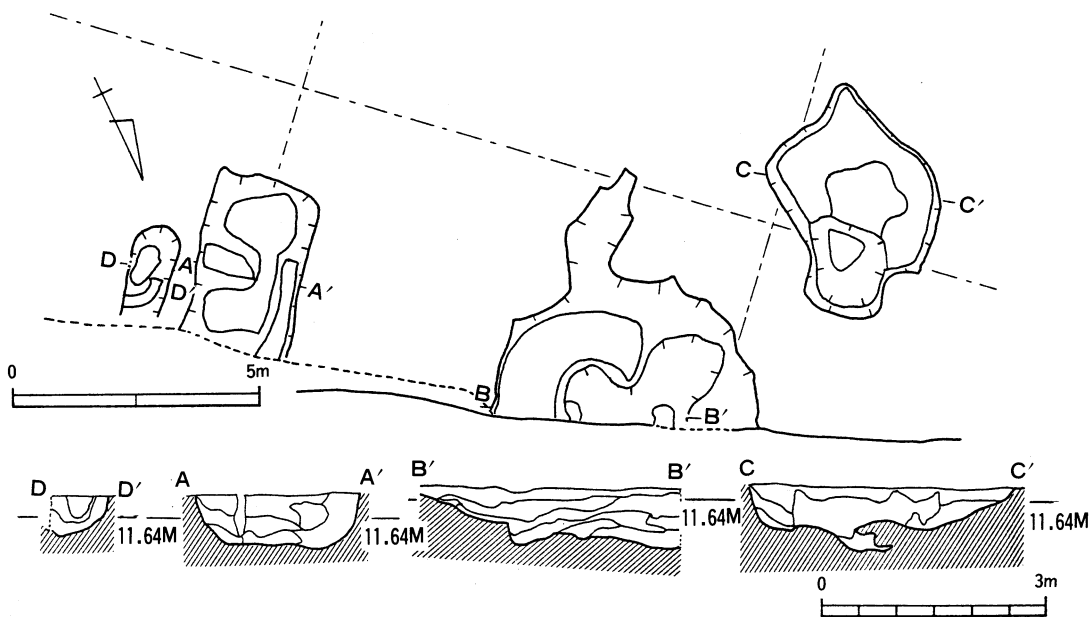
溝の中の遺物は、D-4、D-3区の上層より各々銅銭が1枚ずつ出土した。また、成川式の土器片が6点、小片のため図示するに至らなかった。その他、溝内の底の方から、獣骨の上顎歯、歯などが5ヶ所から出土した。遺跡全体では6ヶ所から出土した。

#### 銅 銭

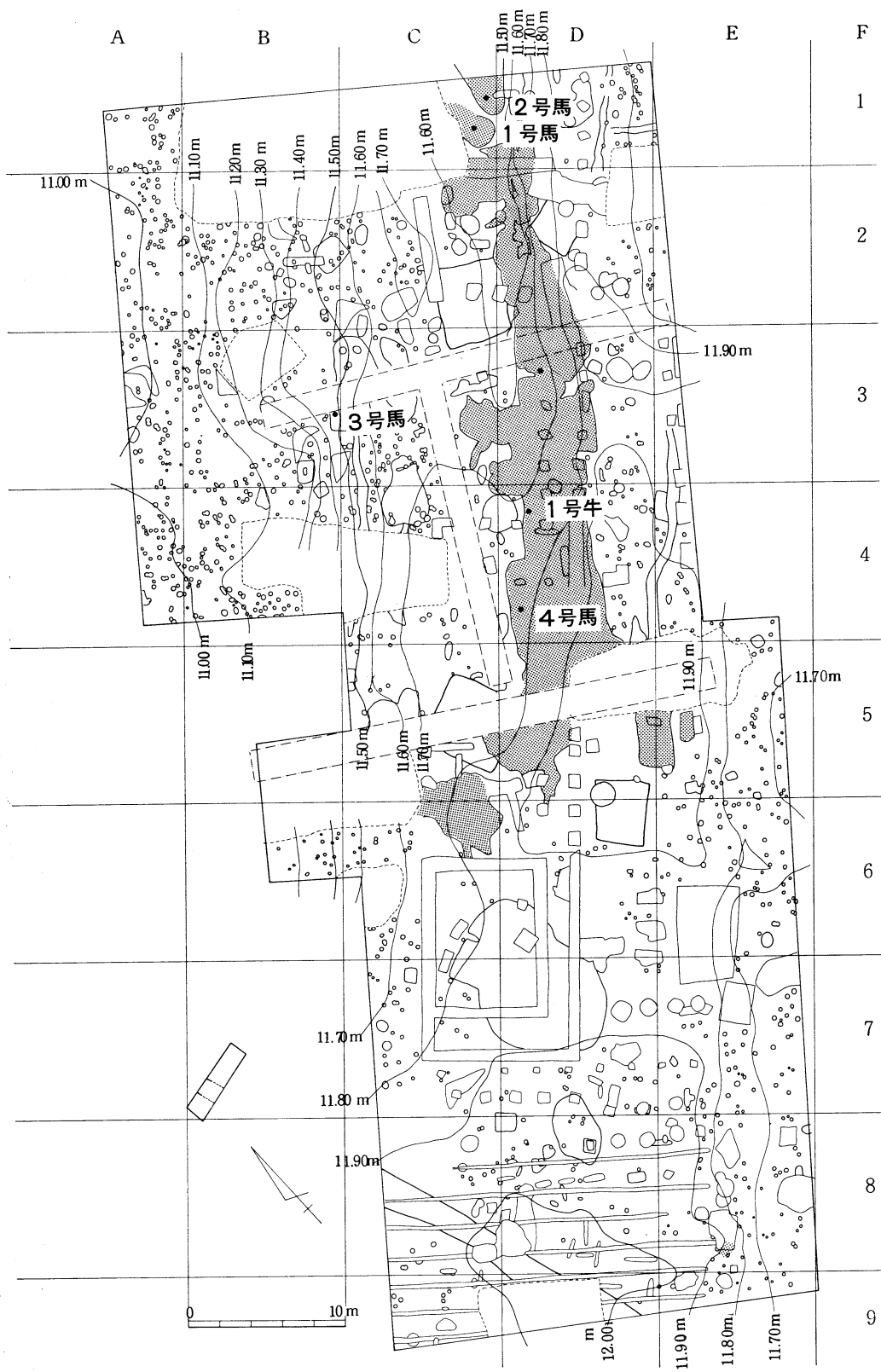
第56図328は「洪武通寶」で明銭であり、初鑄造は1368年である。329は「寛永通寶」で、江戸時代のものである。

#### 獣骨の歯

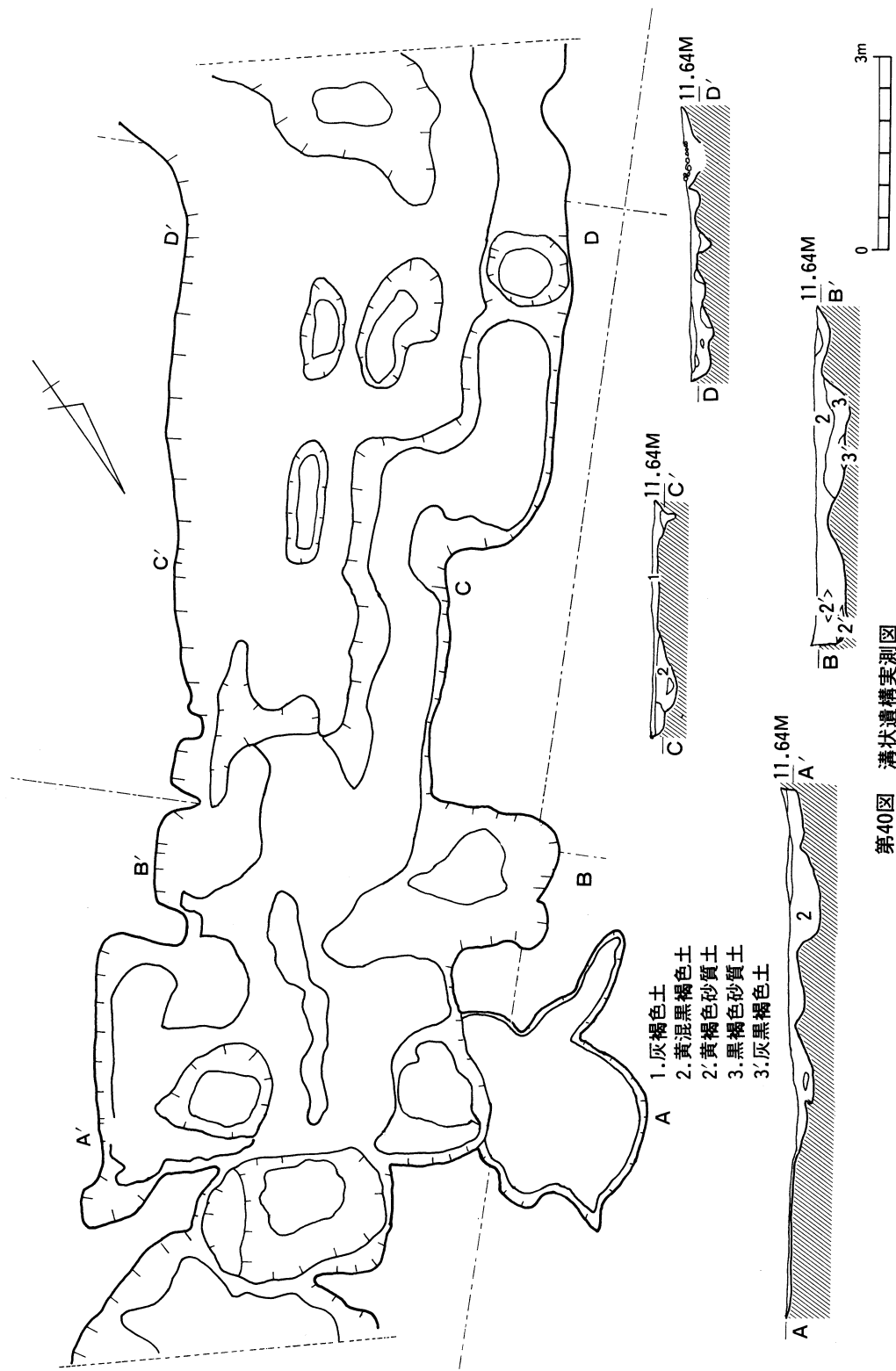
埋土はII層の土であるが、掘り込み面は確認できなかった。1号、2号はIV層の砂層まで深く掘り込んでいた。



第38図 溝状遺構実測図



第39图 溝状遺構位置図



第40图 沟状遺構実測図

## 第 7 章 その他の遺構

### 第 1 節 青年学校跡 (第 41 図)

C・D-1～7 区の第 I 層の下面に集石遺構を検出した。集石は 70cm×70cm の正方形をしたものや帯状にしたものなどが見られる。集石の下面はつきかためて固くしてある。集石の 1 つ 1 つの石は直径 14～15cm の丸や楕円形の河原石を使用し、すきまなく敷き詰めてある。

集石は全体を長方形に配置して、内部にもう 1 つ長方形を作るように配置してある。集石全体の縦は 10m、横は 63m を測るが北東側にまだ続くものと思われる。内側の小さな長方形は外側で、縦が 7.5m、横が 10m ある。

この集石遺構は学校の校舎の基礎であろう。そうすると、内側の長方形は教室にあたり、南東側にローカがある構造になるであろう。

また、その建物について、始良町誌によると「重富小学校に大正 15 年青年学校が併設されたが、昭和 18 年に新築、移転したとある。」この移転先が平松原遺跡の場所である。そして、昭和 22 年重富中学校と両方で使用、昭和 23 年に青年学校は廃止され、重富中学校が昭和 24 年移転するまで使用した。その後、役場支所としても利用されたそうである。

#### 溝状の跡

遺跡の南西側、C・D・E-8～9 区に 7 状の細い溝状の跡がある。掘り込み面は確認できなかった。幅が 20～30cm、長さが検出した部分で 23.3m、深さが 7～8 cm ある。溝と溝の幅は約 1.3m あり、ほぼ並行している。なんの跡か明らかでない。

### 第 2 節 その他の遺構 (第 42 図・43 図・44 図)

第 IV 層の砂層の表面で、多数のピットを検出した。総数で 903 個ある。人工的なものか自然なものかはっきりしなかった。

遺構検出面よりの深さで類別してみると、0～9 cm が 48 個で遺跡全体にまばらにちらばっている。10～19cm のものは 465 個ある。20～29cm のものは 348 個で北西部の傾斜面に密集している。30cm 以上のものは 42 個ある。



第41図 近・現代掘り込み位置図



第42図 ピット位置図(1) 深さ0~9cm



第43図 ピット位置図(2) 深さ10~19cm





第44図 ピット位置図(3) 深さ20cm以上

## 第 8 章 その他の遺物

### 第 1 節 遺構外出土の遺物

**甕形土器 (121～123・127・128・130～178)**：全体の31%を占める。突帯なしのものが9.1%を占める。突帯の刻みを入れる方法は4種類みられる。板またはヘラによるものが20.5%，布巻棒によるものが2.3%，指おさえによるものが9.1%，指つまみによるものが59%である。

**脚部 (179～217)**：全体の22.4%を占める。

**壺形土器 (218～224・226～243)**：全体の14.4%を占める。

**高坏 (244～255)**：全体の6.9%を占める。

**埴形土器 (256～264)**：全体の5.2%を占める。

**その他の土器 (124・125・129・225・265～295)**：全体の20.1%を占める。

**須恵器 (296～304)**：9点出土したが、器形の分るものはなく、時期を確定するまではいたらなかった。

**るつぼ (306)**：破片が1点出土した。時期は不明である。

**フイゴ羽口 (307・308)**：2点出土した。時期は不明である。

**不明土器 (305・309)**：用途・時期共に不明である。

**土師器 (310～318)**：平安時代のものと中世のものに分けられそうであるが、確定する要素にかけるため図面の提示だけにとどめたい。

**備前焼 (319～321)**：3点の摺鉢が出土した。口縁部の形態からV期の室町時代末期から江戸時代初頭のものと考えられる。

**青磁 (322・323)**：2点が出土した。暗文の蓮弁文は崩れたものであり、16世紀以降のものと考えられる。

**不明陶器 (324・325)**：324は内面のみ暗黄色の釉がかけられる。325は摺鉢で内面の溝は金属の道具で施されている。

**土人形 (326)**：型づくりによる猿を表現したものである。

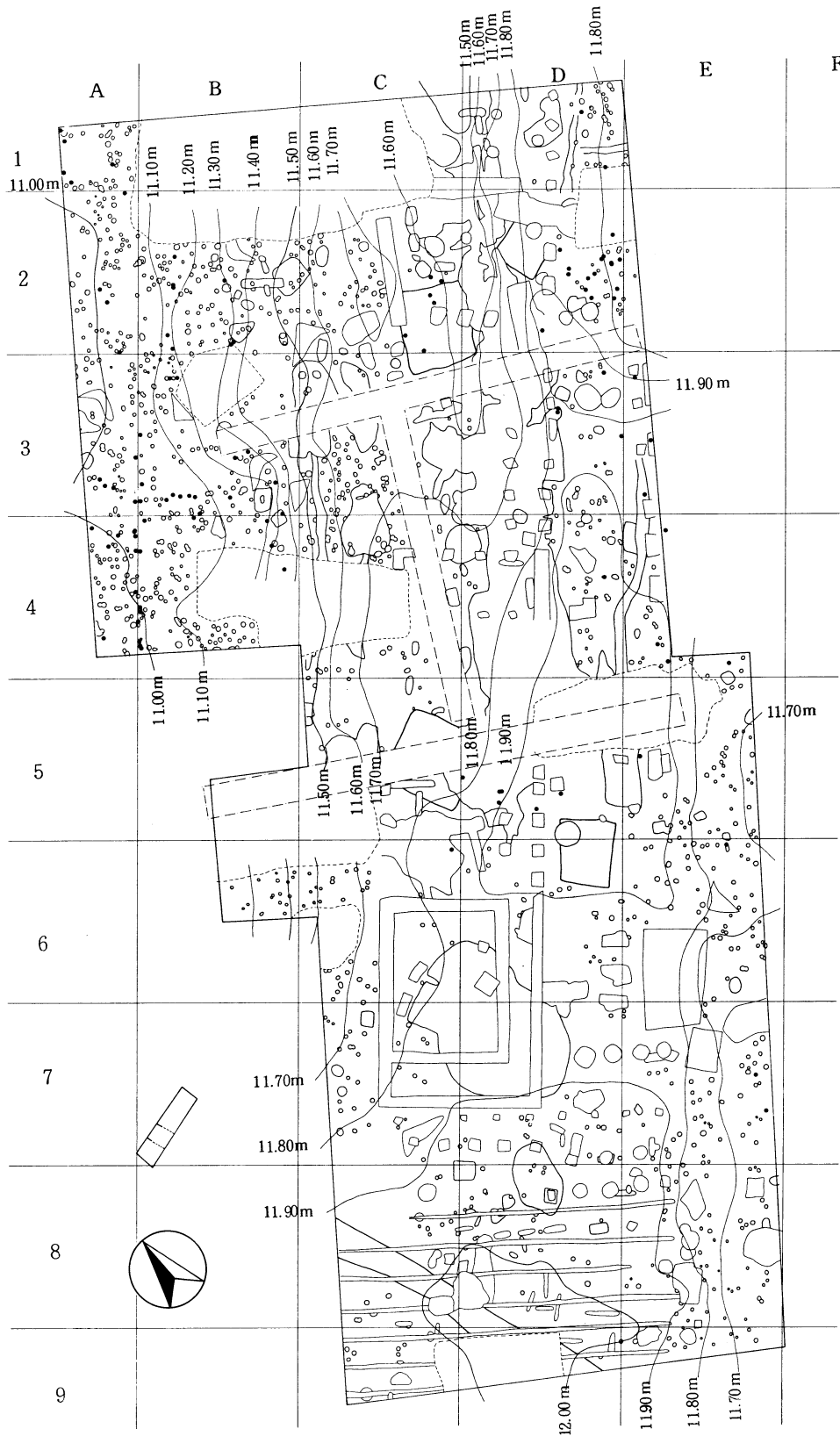
**玩具 (327)**：島津家の紋章である「丸に十の字」を刻んである。

**古銭 (328・329)**：2点ともD-3・4区の掘り込み内から出土した。328は室町時代の洪武通寶である。329は江戸時代の寛永通寶であり、「寶」の字のハネが「ス」になる「ス寶銭」であることから江戸時代でも初期につくられたものである。

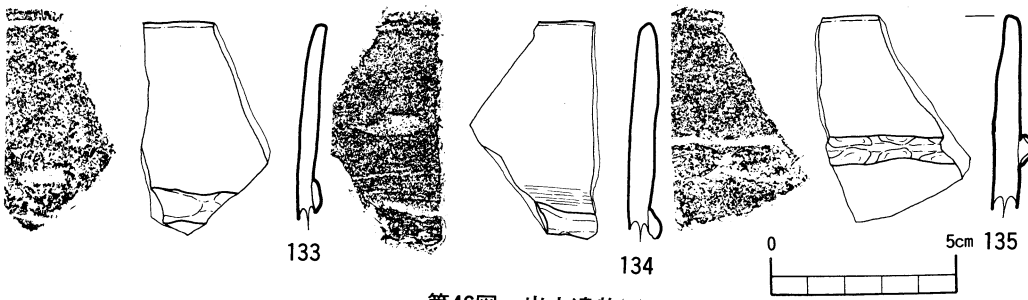
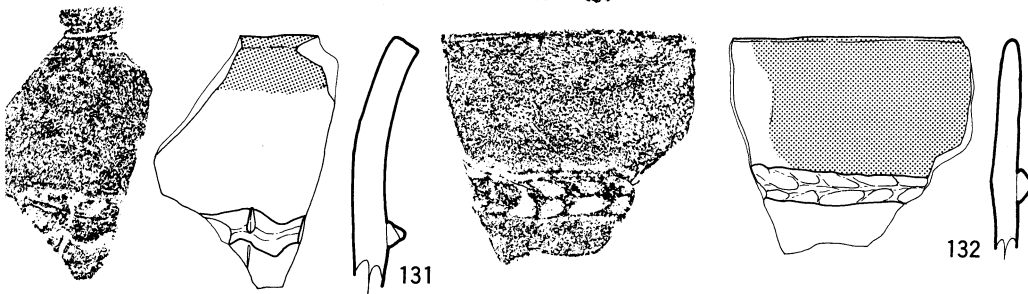
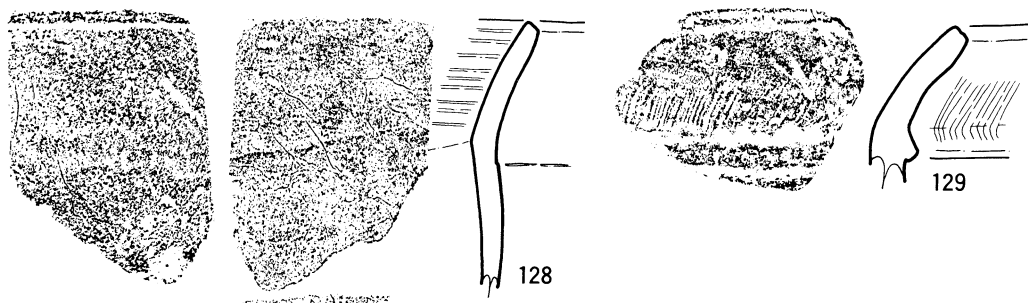
**砥石 (330)**：上下の両面が丁寧に研磨されている。一部分に穿孔がみられるが、貫通はしていない。時期は不明である。

**弥生土器 (331・332)**：331は口縁部が「L」字状になっており、弥生時代中期のものと考えられる。1号住居跡出土土器も含めて合計3点がこの時期に含まれるものである。

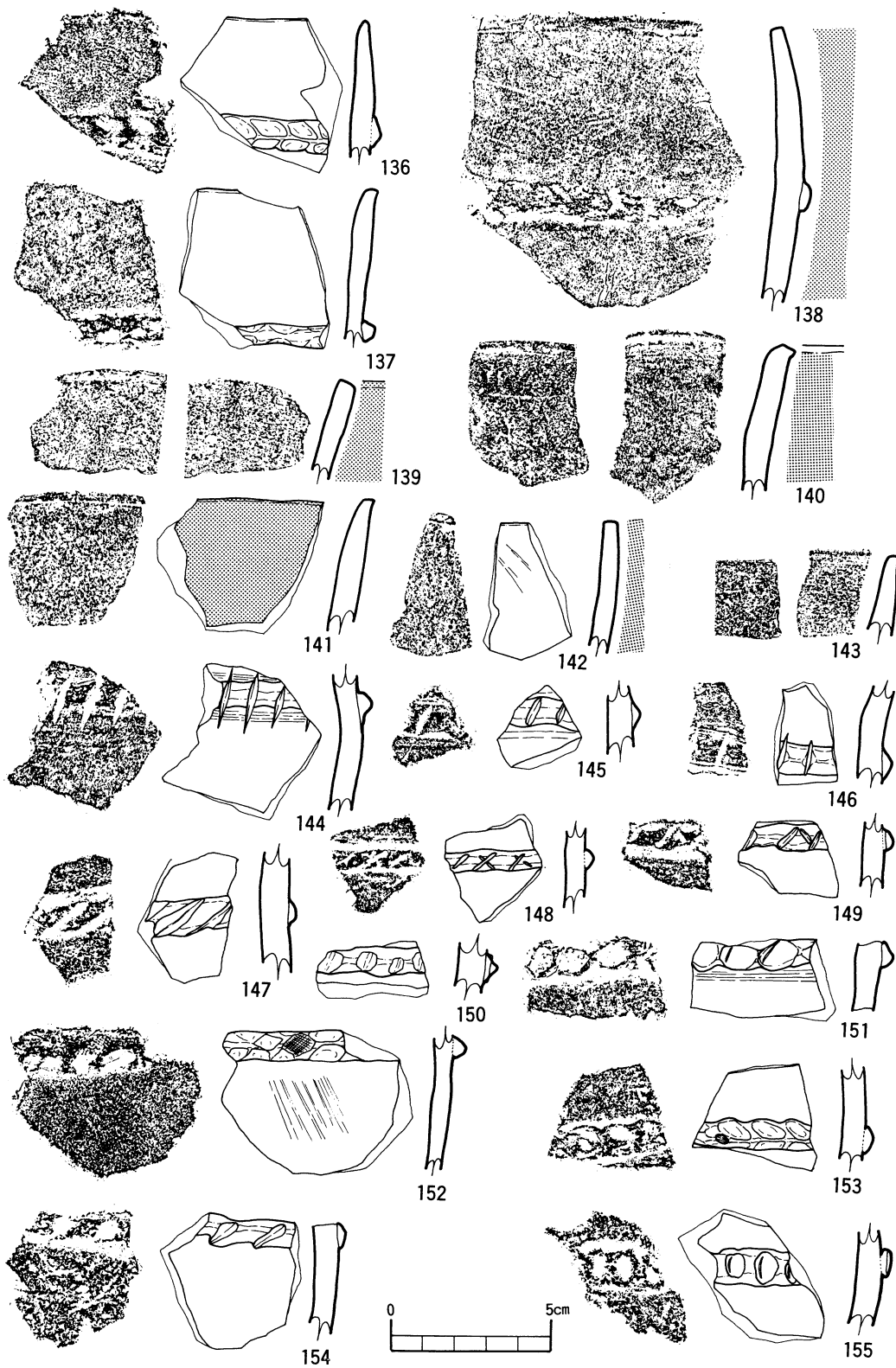
**縄文土器 (333・341)**：1号・2号住居跡出土のものを含めると合計12点が出土した。時期は確定できないので図示のみにとどめたい。



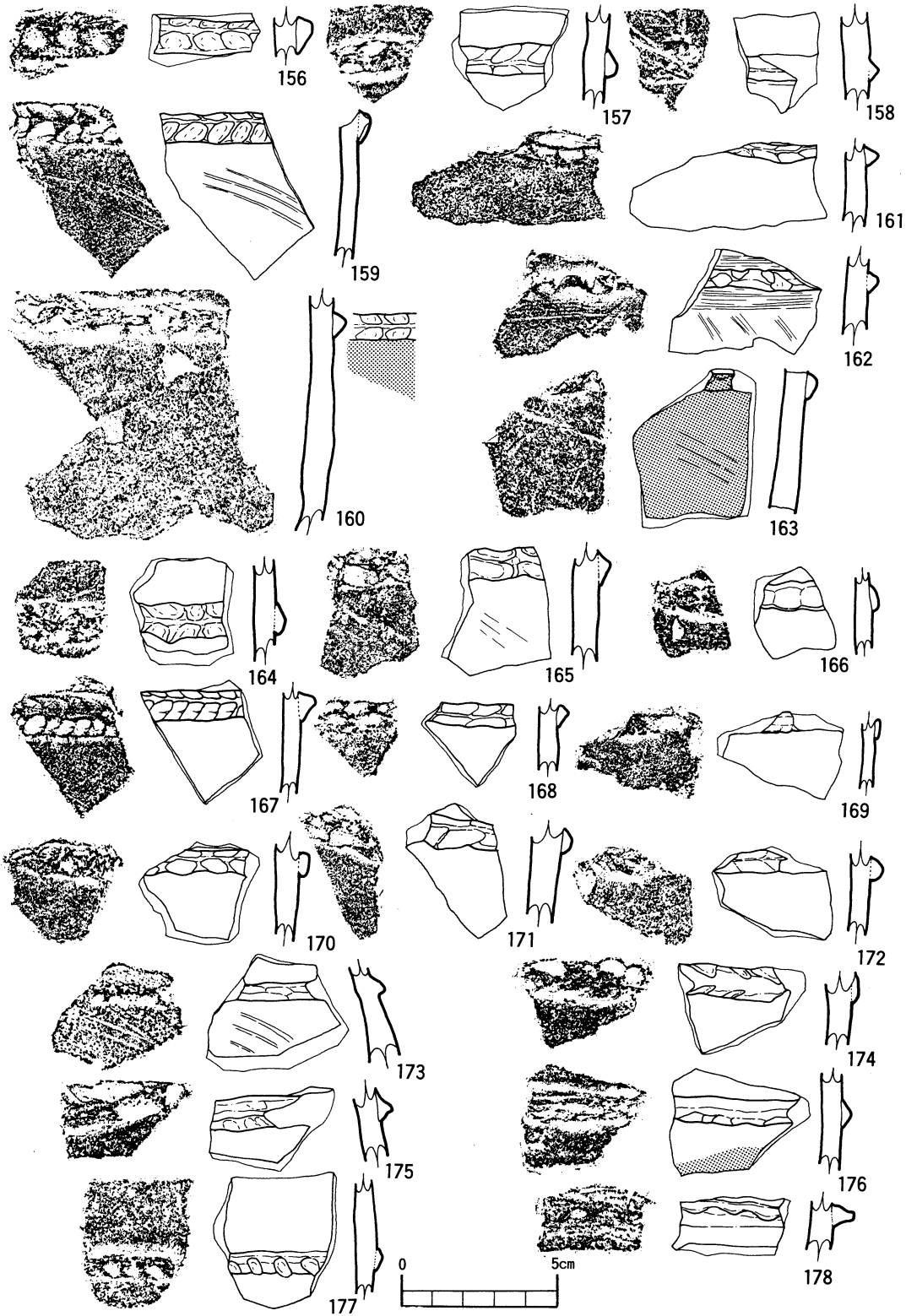
第45図 遺物出土状況



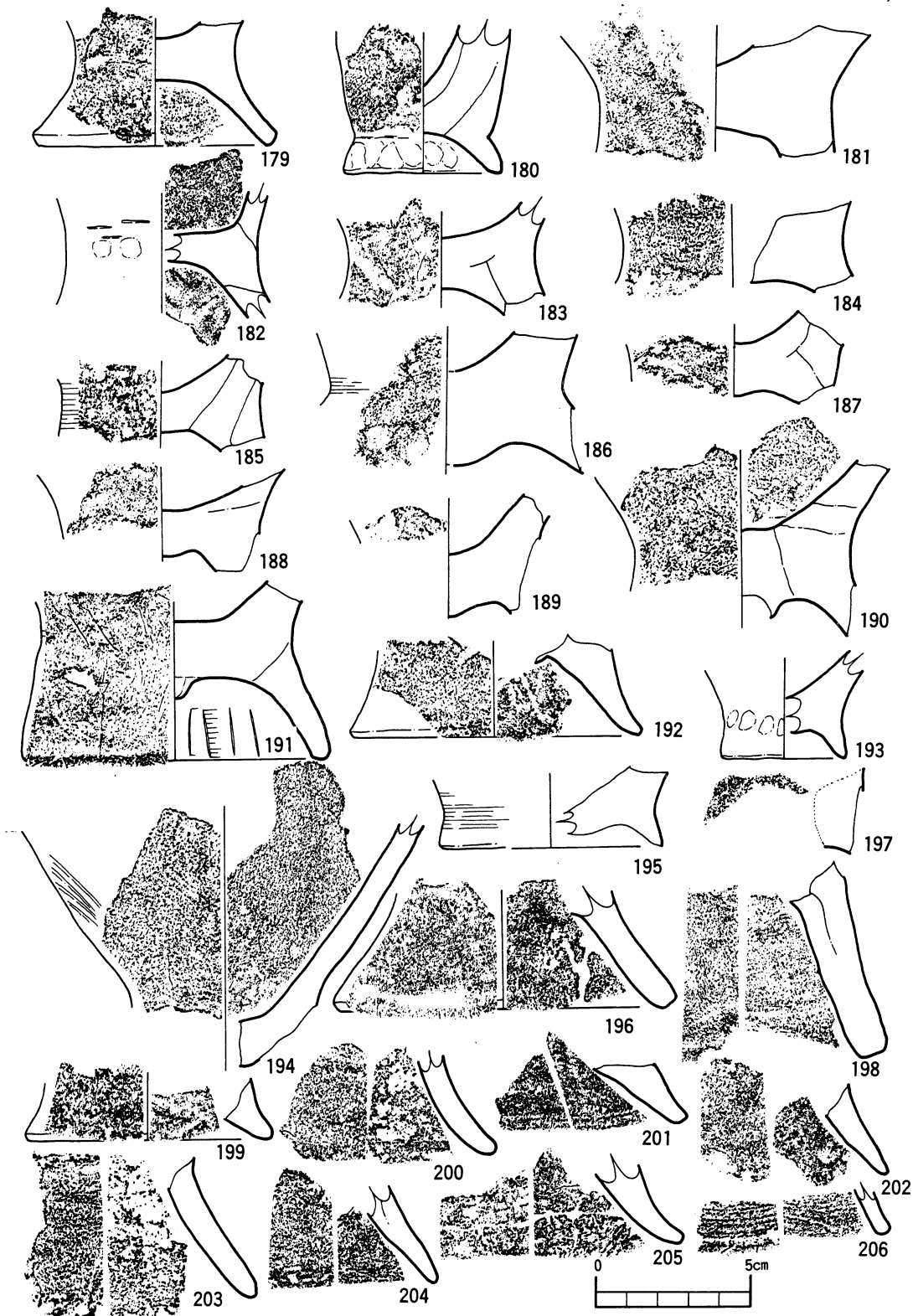
第46図 出土遺物(1)



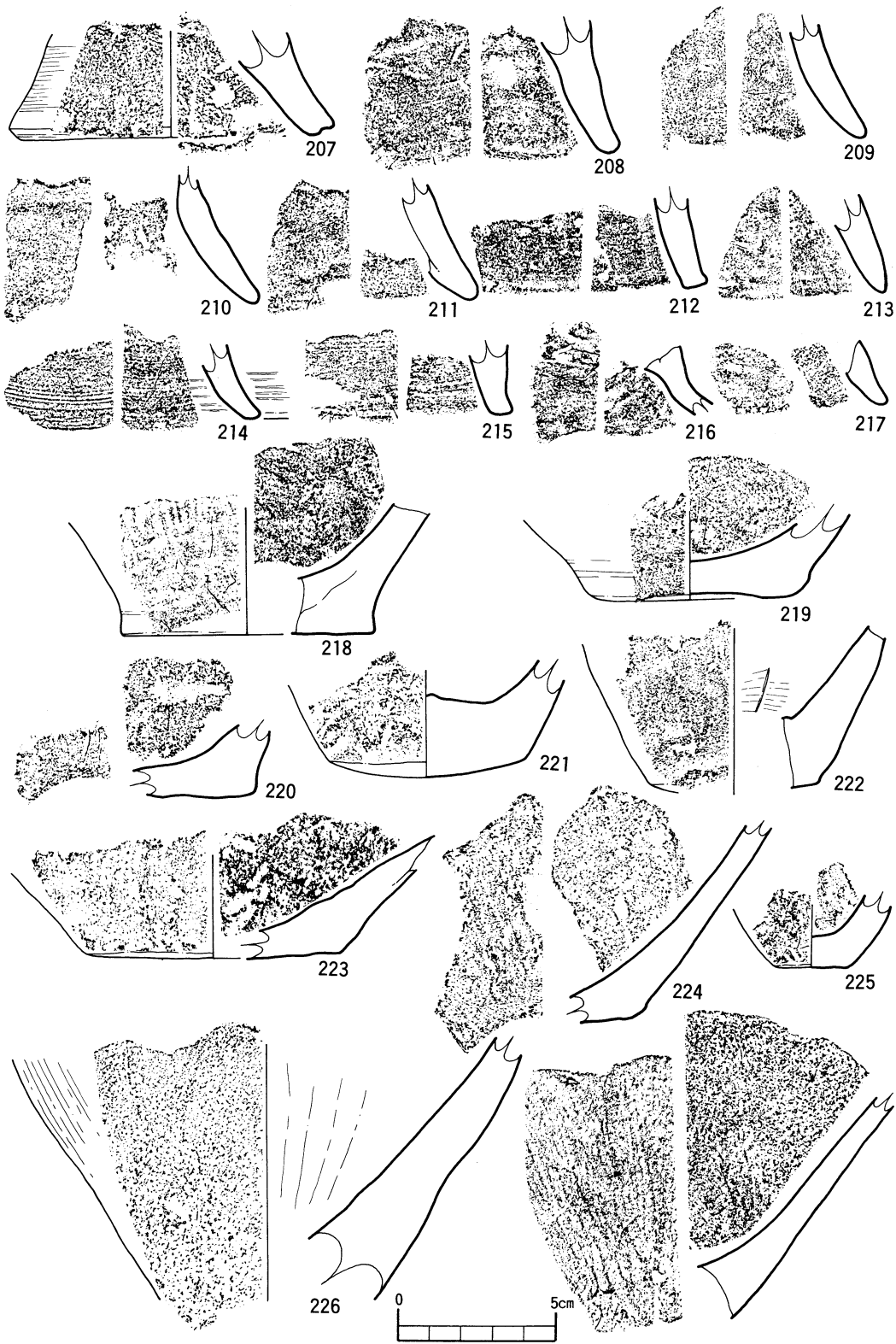
第47图 出土遺物(2)



第48图 出土遺物(3)

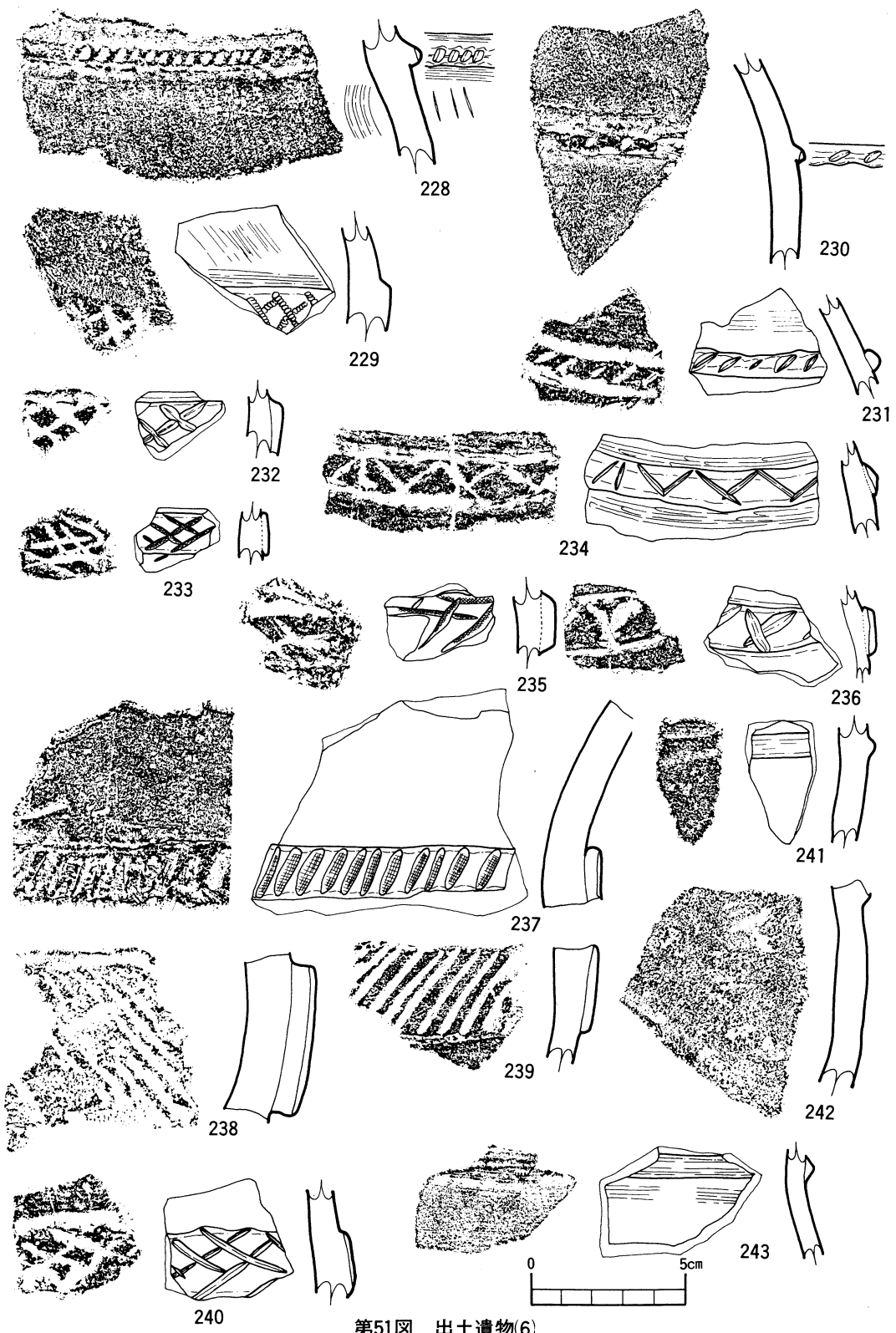


第49図 出土遺物(4)

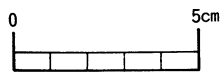
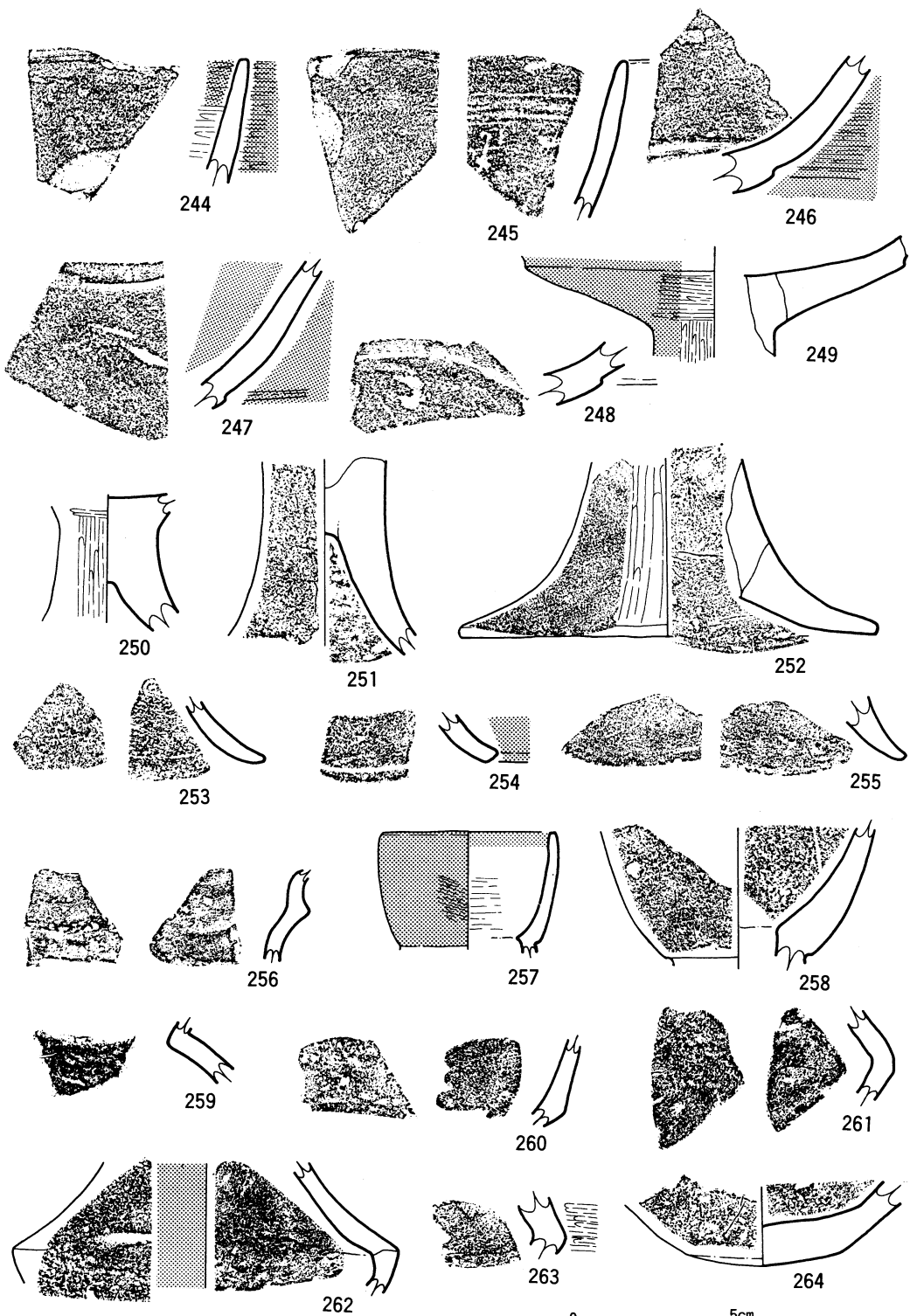


第50図 出土遺物(5)

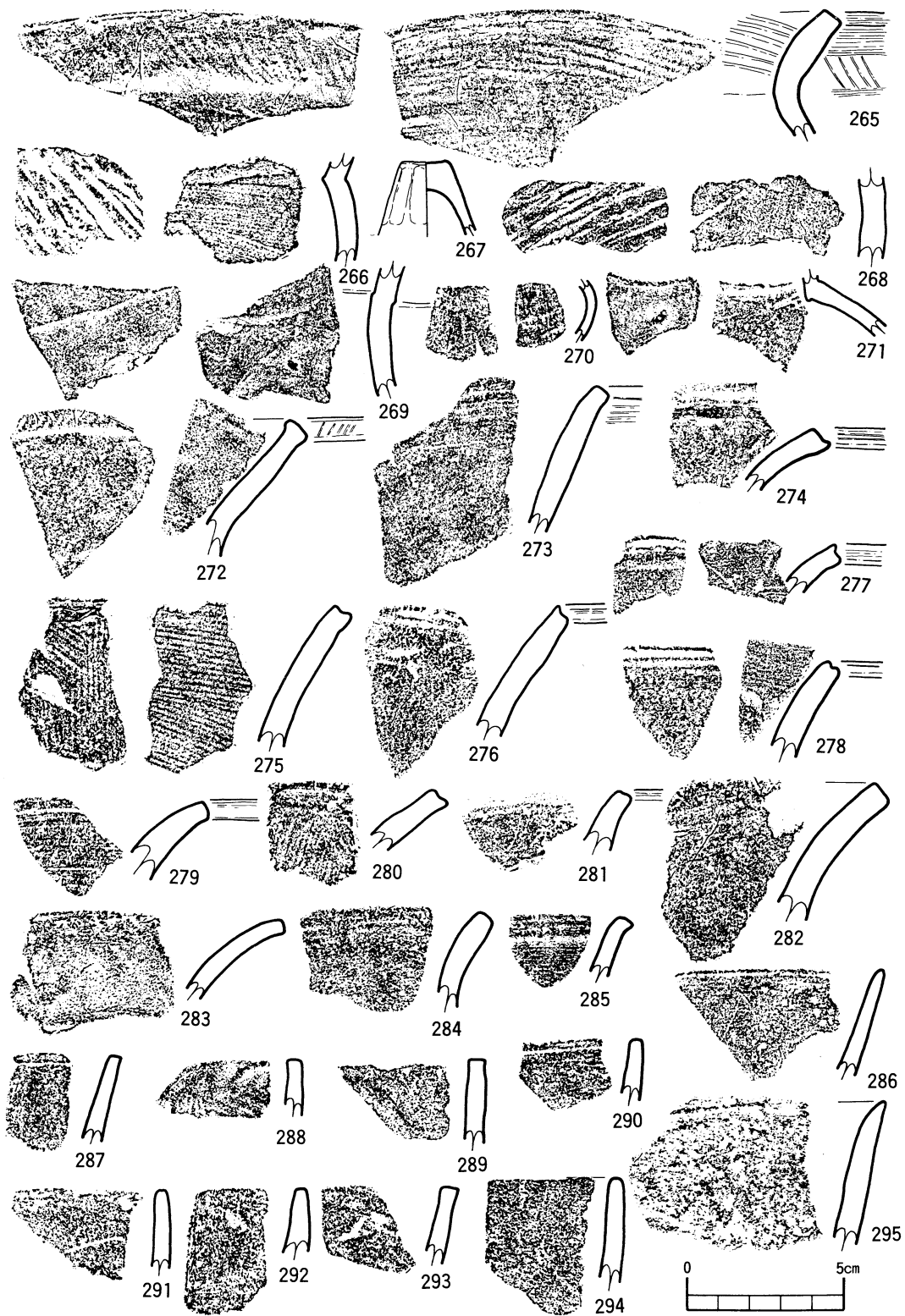




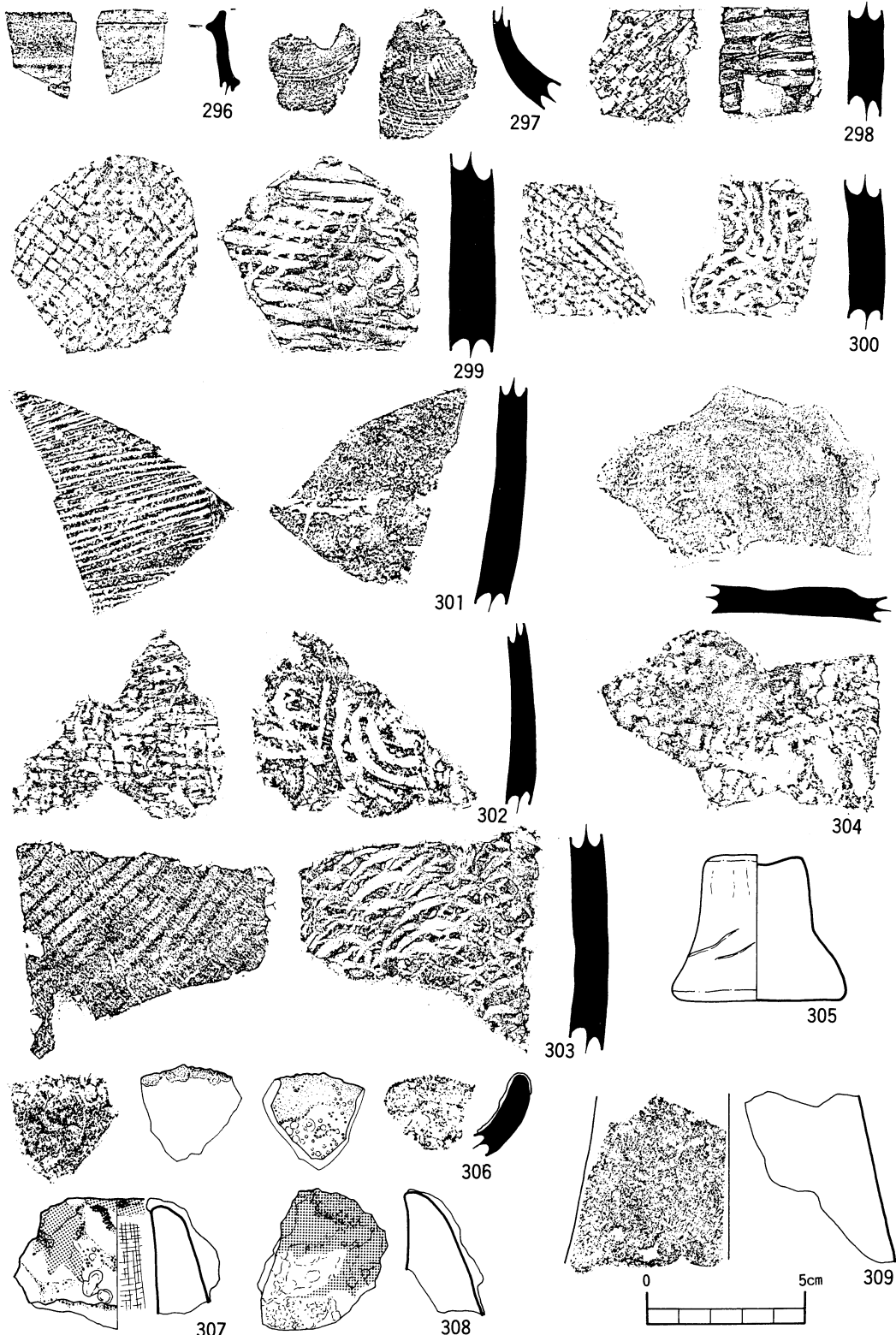
第51图 出土遺物(6)



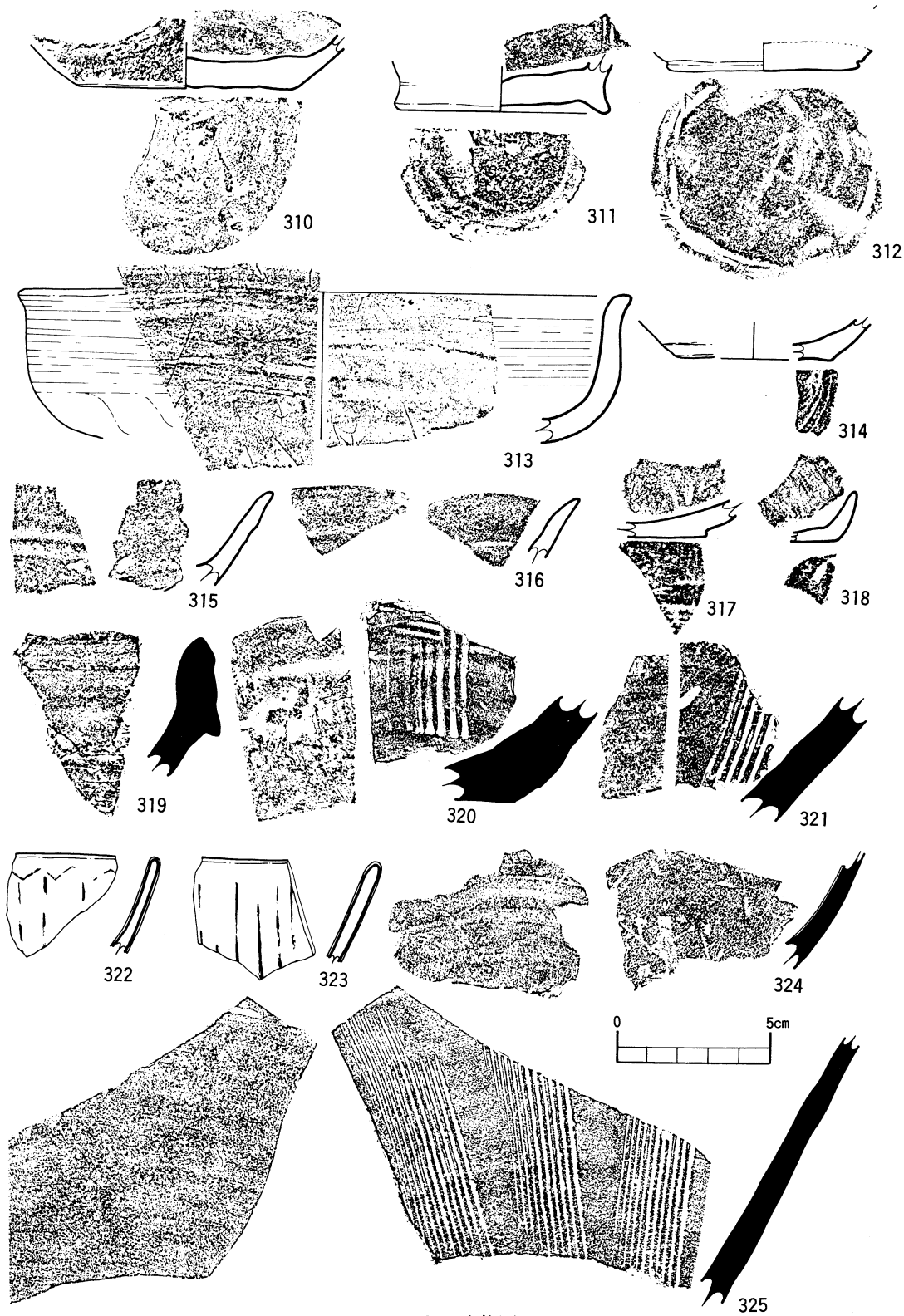
第52図 出土遺物(7)



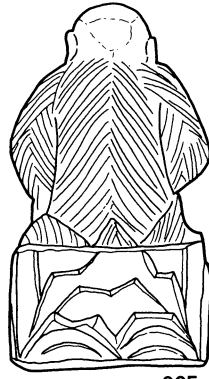
第53図 出土遺物(8)



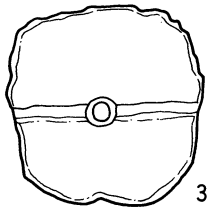
第54図 出土遺物(9)



第55図 出土遺物(10)



325



326



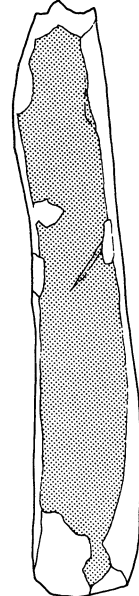
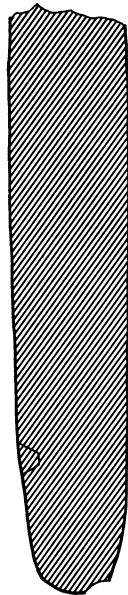
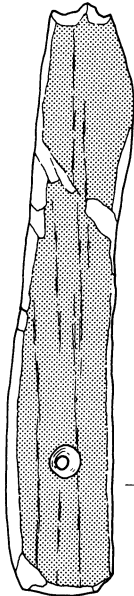
327



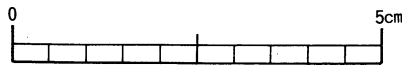
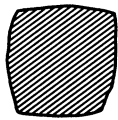
328



329



330



第56図 出土遺物(11)



第57図 出土遺物(12)

表2 遺物観察表(1)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	器面調整		胎土	取上 番号	備考
							内面	外面			
第11 図	01	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナデヨコ	ナデ	砂	298	板の角によるキザミ突帯
	02	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデヨコ	ナデ	砂	210	指おさえによるキザミ突帯231,237
	03	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデヨコ	ナデ	砂	300	指おさえによるキザミ突帯
	04	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナデ	ナデ	砂	—	ヘラによるキザミ突帯
	05	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	明橙	ナデヨコ	ナデ	砂	—	指つまみによる突帯
	06	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	淡黄	ナデヨコ	ナデ	砂	234	
	07	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	暗茶	ナデ	ナデ	砂	224	
	08	1号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナデヨコ	ナデ	砂	310	
	09	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	板目	ナデ	砂	298	ヘラによるキザミ突帯
第12 図	10	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	暗茶	—	ナデ	砂	310	ヘラによるキザミ突帯
	11	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナデ	ナデ	砂	—	ヘラによるキザミ突帯
	12	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナデ	ナデ	砂	—	ヘラによるキザミ突帯
	13	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	淡黄	ナデ	板目	砂	201	布巻棒によるキザミ
	14	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	暗茶	ナデ	ナデ	砂	—	布巻棒によるキザミ
	15	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	明橙	ナデ	ナデ	砂	—	布巻棒によるキザミ
	16	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナデ	ナデ	砂	218	指おさえによるキザミ突帯
	17	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナデ	ナデ	砂	220	指おさえによるキザミ突帯
	18	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナデ	ナデ	砂	—	指おさえによるキザミ突帯
	19	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナデ	ナデ	砂	216	指おさえによるキザミ突帯
	20	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白灰	ナデ	ナデ	砂	—	指つまみによる突帯
	21	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	暗橙	ナデ	ナデ	砂	238	指つまみによる突帯
第13 図	22	1号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	暗橙	ナデ	ナデ	砂	—	指つまみによる突帯
	23	1号住	Ⅲ	鉢形土器	完形	白黄	ナデ	ナデ	砂	308	口径17.4cm,底径8.2cm,器高11cm
	24	1号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデ	ナデ	砂	225	底部内面突帯
	25	1号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデ	ナデ	砂	203	底部内面突帯
	26	1号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナデ	ナデ	砂	—	
	27	1号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	赤	ナデ	ナデ	砂	—	
	28	1号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナデ	ナデ	砂	—	
	29	1号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデ	ナデ	砂	—	
	30	1号住	Ⅲ	壺 ?	口縁	明橙	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	
	31	1号住	Ⅲ	壺 ?	口縁	暗橙	板目	板目	—	—	
	32	1号住	Ⅲ	壺 ?	口縁	白黄	ナデヨコ	ナデヨコ	砂	—	
	33	1号住	Ⅲ	壺 ?	底部	白黄	ナデ	ナデ	砂	152	底径5cm 229
	34	1号住	Ⅲ	壺 ?	突帯	白黄	ナデ	ナデ	—	—	
35	1号住	Ⅲ	—	底部	白橙	ナデ	ナデ	—	—	底径2.6cm	
第14 図	36	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ナデ	ミガキ	精製	296	口径21.6cm
	37	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	口径21.3cm
	38	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	199	
	39	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	—	
	40	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	橙	ミガキ	ミガキ	精製	—	
	41	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	—	
	42	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	橙	ミガキ	ミガキ	精製	—	
	43	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ナデ	ミガキ	精製	236	
	44	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	
	45	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	橙	ミガキ	ミガキ	精製	—	
第15 図	46	1号住	Ⅲ	高坏	坏部	橙	ミガキ	ミガキ	精製	—	
	47	1号住	Ⅲ	高坏	脚部	赤	ナデ	ミガキ	精製	208	底径15.9cm
	48	1号住	Ⅲ	高坏	脚部	橙	ナデ	ミガキ	精製	230	底径12.2cm
	49	1号住	Ⅲ	高坏	脚部	赤	—	ミガキ	精製	219	
	50	1号住	Ⅲ	高坏	脚部	赤	ナデ	ミガキ	精製	209	



表3 遺物観察表(2)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	器面調整		胎土	取上 番号	備考
							内面	外面			
第15 図	51	1号住	Ⅲ	埴形土器	完形	白橙	ミガキ	ミガキ	精製	295	口径11.4cm, 底径4.3cm, 器高15.8cm
	52	1号住	Ⅲ	埴形土器	口縁	白橙	ナデ	ナデ	精製	213	口径9.9cm
	53	1号住	Ⅲ	埴形土器	口縁	赤	ミガキ	ミガキ	精製	235	口径7.2cm
	54	1号住	Ⅲ	埴形土器	肩部	白橙	ナデ	ナデ	精製	—	内面輪積痕
	55	1号住	Ⅲ	埴形土器	口縁	明橙	ナデ	ナデ	精製	—	
	56	1号住	Ⅲ	?	口縁	明橙	ナデ	ナデ	精製	—	
	57	1号住	Ⅲ	蓋形土器	完形	白黄	ナデ	ナデ	砂	291	口径9.4cm, 器高5.8cm
	58	1号住	Ⅲ	手捏土器	完形	白黄	指おさえ	指おさえ	—	225	口径3.8cm, 器高2cm
	59	1号住	Ⅲ	弥生土器	突帯	明橙	ナデ	ナデ	金雲母	228	弥生中期山ノ口式土器
	60	1号住	Ⅲ	縄文土器	口縁	淡橙	ナデ	貝殻条痕	—	—	
	61	1号住	Ⅲ	縄文土器	口縁	淡橙	ナデ	条痕	—	—	
第19 図	62	2号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナデ	ナデ	砂	324	指つまみ突帯
	63	2号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナデ	ナデ	砂	322	指つまみ突帯
	64	2号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナデ	ナデ	砂	—	指と爪によるキザミ突帯
	65	2号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	淡橙	ナデ	ナデ	砂	321	ヘラキザミ突帯
	66	2号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナデ	ナデ	砂	327	指つまみ突帯
	67	2号住	Ⅲ	高坏	脚部	橙	—	ミガキ	精製	230	
	68	2号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデ	ナデ	砂	326	
	69	2号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	—	
	70	2号住	Ⅲ	高坏	坏部	淡橙	ミガキ	ミガキ	精製	325	
	71	2号住	Ⅲ	高坏	脚部	白黄	ナデ	ナデ	砂	389	底径8.1cm
	72	2号住	Ⅲ	埴形土器	底部	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	底径3.3cm
	73	2号住	Ⅲ	矢	鉄鏃	—	—	—	—	382	
	74	2号住	Ⅲ	縄文土器	胴部	淡橙	ナデ	ナデ	—	—	相交弧文, 深浦式土器
	第20 図	75	2号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	—
76	2号住	Ⅲ	高坏	完形	赤	ミガキ	ミガキ	精製	—	口径20.9cm, 底径13.5cm, 器高16.1cm	
第24 図	77	3号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	明橙	板目	ナデ	砂	369	口径26.9cm 370, 382
	78	3号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナデ	ナデ	砂	379	指と爪によるキザミ突帯
	79	3号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデ	ナデ	—	367	ヘラキザミ突帯
	80	3号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	368	指と爪によるキザミ突帯
	81	3号住	Ⅲ	甕形土器	完形	茶褐	ナデ	板目	—	373	口径14.2cm, 底径9.8cm, 器高14.5cm
第25 図	82	3号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	茶褐	ナデ	ナデ	—	372	379
	83	3号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	明橙	ナデ	ナデ	—	317	棒によるキザミ突帯
	84	3号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	茶褐	ナデヨコ	ナデヨコ	—	375	底径9cm
	85	3号住	Ⅲ	高坏	坏部	白黄	ナデ	ナデ	精製	387	
	86	3号住	Ⅲ	埴形土器	底部	白黄	ナデ	ナデ	—	378	底径2.9cm
第29 図	87	4号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデヨコ	ナデヨコ	砂	395	指と爪によるキザミ突帯, 煤付着
	88	4号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナデタテ	ナデヨコ	砂	394	指つまみ突帯, 口径18cm
	89	4号住	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナデヨコ	ナデヨコ	砂	278	指と爪によるキザミ突帯, 煤付着
	90	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデヨコ	ナデヨコ	砂	—	底径8.4cm, 底高1.9cm
	91	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデ	ナデヨコ	砂	392	
	92	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナデ	ナデヨコ	砂	276	底径9.5cm, 底高2.6cm
	93	4号住	Ⅲ	甕形土器	脚部	白橙	ナデ	ナデタテ	砂	270	内面苔付着
	94	4号住	Ⅲ	甕形土器	脚部	白黄	ナデ	ナデヨコ	砂	275	底径10.9cm, 底高2.4cm, 脚内シボリ
	95	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナデ	ナデヨコ	砂	273	脚内面突起
	96	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデヨコ	ナデ	砂	288	底径10.6cm, 底高3.1cm, 脚内面突起
第30 図	97	4号住	Ⅲ	甕形土器	脚部	明橙	ナデ	ナデタテ	砂	281	内面コケ付着
	98	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナデ	ナデ	砂	274	399, 400
	99	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナデ	ナデ	砂	396	
	100	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナデ	ナデ	砂	280	脚内面突起

表4 遺物観察表(3)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	器内 面	調整 外面	胎土	取上 番号	備考
第30 図	101	4号住	Ⅲ	高坏	脚部	赤	ナ	ミガキ	精製	391	底径16cm,底高8.2cm
	102	4号住	Ⅲ	高坏	脚部	白黄	ナ	ミガキ	精製	393	底径9cm,底高6.2cm
	103	4号住	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ナ	ミガキ	精製	397	
	104	4号住	Ⅲ	高坏	脚部	白橙	ナ	ナ	精製	282	底径16cm
	105	4号住	Ⅲ	?	頸部	白橙	板ナ	ナ	砂	—	
	106	4号住	Ⅲ	埴	頸部	橙	ナ	ナ	精製	284	
第33 図	107	溝	Ⅲ	坏形土器	完形	黄橙	水ひき	水ひき	精製	308	墨書土器「中」,底部ヘラ切り
	108	溝	Ⅲ	坏形土器	完形	明橙	水ひき	水ひき	—	303	底部ヘラ切り
	109	溝	Ⅲ	坏 or 埴	口縁	明橙	水ひき	水ひき	—	262	302
	110	溝	Ⅲ	坏形土器	底部	明橙	水ひき	水ひき	—	302	108と接合
	111	溝	Ⅲ	坏形土器	底部	明橙	ヘラナ	ヘラナ	—	307	刻書土器「奈」,硬質な焼成
	112	溝	Ⅲ	高坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	—	
第34 図	113	墓	Ⅱ	洪武通宝	—	—	—	—	—	242	重さ1.84g
	114	墓	Ⅱ	洪武通宝	—	—	—	—	—	243	重さ1.62g
	115	墓	Ⅱ	洪武通宝	—	—	—	—	—	244	重さ2.24g
第 36 図	116	掘込み	Ⅱ	青磁	底部	淡青緑	—	—	—	331	底径6cm
	117	掘込み	Ⅱ	須恵器	口縁	明灰	ヨコナ	ヨコナ	—	334	
	118	掘込み	Ⅱ	須恵器	胴部	灰	タタキ	タタキ	—	339	
	119	掘込み	Ⅱ	坏	底部	白橙	水ひき	水ひき	—	340	底部糸切り,底径5.3cm
	120	掘込み	Ⅱ	坏	底部	白黄	水ひき	水ひき	—	337	
	121	掘込み	Ⅱ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	砂	345	突帯ナシ
	122	掘込み	Ⅱ	甕形土器	胴部	茶褐	ナ	ナ	砂	354	突帯ナシ
	123	掘込み	Ⅱ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	砂	333	指つまみ突帯
	124	掘込み	Ⅱ	?	口縁	明橙	ナ	ナ	—	356	不明
	125	掘込み	Ⅱ	?	口縁	白橙	ヨコナ	ヨコナ	砂	342	不明
第 46 図	126	掘込み	Ⅱ	砥石	—	—	—	—	—	335	幅3.4cm,厚さ1.6cm,重さ74.4g
	127	掘込み	Ⅱ	甕形土器	胴部	明橙	板目	板目	—	343	ヘラキザミ突帯 346, 355
	128	A-4	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	—	93	突帯ナシ
	129	A-4	Ⅲ	?	口縁	白黄	ナ	ハケ目	—	157	?
	130	E-3	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナ	板目	—	54	口径26cm,突帯ナシ
	131	2号住	Ⅲ	甕形土器	口縁	暗橙	ナ	ナ	—	380	ヘラキザミ突帯
	132	C-2	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナ	ナ	砂	29	指つまみ突帯
	133	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	砂	—	指おさえ突帯
	134	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	白灰	ナ	ナ	—	—	?
	135	C-2	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	砂	28	指つまみ突帯
第 47 図	136	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	白橙	ナ	ナ	砂	176	指つまみ突帯
	137	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	砂	—	指つまみ突帯
	138	B-3	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	板目	砂	77	指つまみ突帯
	139	D-2	Ⅲ	甕形土器	口縁	暗橙	ナ	ナ	砂	25	?
	140	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	茶褐	ナ	ナ	—	—	?
	141	D-5	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	砂	245	?
	142	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	白黄	ナ	ナ	砂	—	?
	143	—	Ⅲ	甕形土器	口縁	白灰	ナ	ナ	—	403	?
	144	B-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	明橙	ナ	ナ	—	161	ヘラキザミ突帯
	145	—	Ⅲ	甕形土器	突帯	茶褐	ナ	ナ	—	—	ヘラキザミ突帯
146	—	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	砂	—	指つまみ突帯	
147	—	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	砂	—	ヘラキザミ突帯	
148	B-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	165	ヘラキザミ突帯	
149	B-4	Ⅲ	甕形土器	突帯	明橙	ナ	ナ	砂	60	ヘラキザミ突帯	
150	A-2	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	砂	—	指と爪によるキザミ突帯	

表5 遺物観察表(4)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	器面調整		胎土	取上 番号	備考		
							内面	外面					
第47図	151	E-2	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	デ	砂	14	指と爪によるキザミ突帯	
	152	—	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	板目	砂	407	布目による指つまみ突帯	
	153	—	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	192	指つまみ突帯
	154	A-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	113	棒
	155	D-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	50	指と爪によるキザミ突帯
第48図	156	—	—	甕形土器	突帯	白灰	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	157	E-4	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	59	指つまみ突帯
	158	B-4	Ⅲ	甕形土器	突帯	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	116	?
	159	D-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	白灰	ナ	ナ	板目	—	—	203	指つまみ突帯
	160	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	161	—	—	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	162	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	?
	163	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	164	B-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	80	指つまみ突帯
	165	A-4	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	104	指つまみ突帯
	166	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	167	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	—	指つまみ突帯
	168	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	169	—	—	甕形土器	突帯	茶褐	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	
	170	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯
	171	—	—	甕形土器	突帯	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	ヘラキザミ突帯
	172	A-3	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	112	指つまみ突帯
	173	—	—	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	板目	—	—	—	指つまみ
174	—	—	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯	
175	B-2	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	73	指つまみ	
176	B-4	Ⅲ	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	91	指つまみ突帯	
177	B-4	—	甕形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	指つまみ突帯	
178	B-2	Ⅲ	甕形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	74	指つまみ突帯	
第49図	179	A-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	141	底径7.9cm, 底高2.1cm
	180	A-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	150	底径5.1cm, 底高1.3cm
	181	掘込み	Ⅱ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	347	
	182	—	—	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	—	
	183	D-4	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	253	
	184	—	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	142	
	185	—	—	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	
	186	—	—	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	—	
	187	E-4	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	ナ	デ	—	241	
	188	—	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	底部内面突起
	189	B-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	67	底部内面突起
	190	—	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	底部内面突起
191	D-2	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	—	底部内面突起, 底径10cm, 底高2.6cm	
192	B-4	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	169	底部内面突起, 底径0.4cm, 底高2.5cm	
193	D-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	26	底径4.1cm, 底高0.9cm	
194	掘込み	Ⅱ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	359		
195	—	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	—	ナ	ナ	デ	砂	—		
196	4号住	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	406	底径11.1cm	
197	B-3	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	砂	125		
198	A-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	ナ	ナ	デ	砂	148		
199	D-2	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	—	—	底径8.0cm	
200	—	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	ナ	デ	—	—		

表6 遺物観察表(5)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	器面調整		胎土	取上 番号	備考	
							内面	外面				
第49 図	201	—	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	—	—		
	202	—	—	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	砂	—		
	203	—	—	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	砂	—		
	204	—	—	甕 or 鉢	脚部	暗橙	ナ	ナ	—	—		
	205	D-2	—	—	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	—	—	
	206	—	—	—	甕 or 鉢	脚部	明橙	ナ	板目	—	—	
第50 図	207	A-1	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	茶褐	ナ	ナ	砂	140	底径10.4cm	
	208	B-3	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	砂	115		
	209	A-1	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	—	136		
	210	—	—	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	砂	—		
	211	B-3	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白橙	ナ	ナ	—	79		
	212	D-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	暗橙	ナ	ナ	—	27		
	213	D-2	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	暗橙	ナ	ナ	砂	12		
	214	B-3	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	黒褐	板目	板目	砂	172		
	215	E-7	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	砂	254		
	216	D-3	Ⅲ	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	—	46		
	217	—	—	甕 or 鉢	脚部	白黄	ナ	ナ	—	—		
	218	A-1	Ⅲ	壺形土器	底部	白黄	ナ	ナ	砂	173	底径8.1cm	
	219	掘込み	Ⅱ	壺形土器	底部	暗橙	ナ	ナ	砂	349	底径6.7cm	
	220	A-3	Ⅲ	壺形土器	底部	白黄	ナ	ナ	—	112		
	221	B-4	Ⅲ	壺形土器	底部	明橙	ナ	ナ	砂	100	底径6.2cm	
222	A-3	—	壺形土器	底部	—	—	—	—	—	底径5.3cm		
223	B-4	Ⅲ	壺形土器	底部	白黄	ナ	ナ	砂	99	底径8cm		
224	A-4	Ⅲ	壺形土器	底部	白黄	ナ	ナ	砂	101	223に類似		
225	—	—	?	底部	暗橙	ナ	ナ	—	—	底径2.9cm		
226	B-4	Ⅲ	壺形土器	底部	明橙	ナ	ナ	砂	167			
227	—	Ⅲ	壺形土器	底部	明橙	ナ	ヘラナ	—	240			
第51 図	228	C-2	Ⅲ	壺形土器	突帯	暗橙	板目	ナ	—	254		
	229	—	—	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	砂	—		
	230	B-4	Ⅲ	壺形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	—	90		
	231	—	—	壺形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	—	—		
	232	—	—	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	—		
	233	—	—	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	—		
	234	—	Ⅲ	壺形土器	突帯	暗橙	ナ	ナ	—	44	D-2, E-2 266	
	235	D-2	Ⅲ	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	21		
	236	—	—	壺形土器	突帯	暗橙	—	ナ	—	—		
	237	C-2	Ⅲ	壺形土器	突帯	暗橙	ナ	ナ	砂	88		
	238	—	Ⅲ	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	408		
	239	E-3	—	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	—		
第52 図	240	D-2	Ⅲ	壺形土器	突帯	白黄	ナ	ナ	—	18		
	241	—	—	壺形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	—	—		
	242	B-3	Ⅲ	壺形土器	突帯	白橙	ナ	ナ	砂	166		
	243	—	—	壺形土器	突帯	明橙	ナ	ナ	—	—		
	244	A-4	Ⅲ	高 坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	159		
	245	B-4	Ⅲ	高 坏	坏部	橙	ナ	ミガキ	精製	102		
	246	A-4	Ⅲ	高 坏	坏部	赤	ナ	ミガキ	精製	160		
	247	—	—	高 坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	—		
	248	E-3	Ⅲ	高 坏	坏部	赤	ナ	ミガキ	精製	121		
	249	A-4	Ⅲ	高 坏	坏部	赤	ミガキ	ミガキ	精製	242		
	250	D-2	Ⅲ	高 坏	坏部	橙	—	ミガキ	精製	13		

表7 遺物観察表(6)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	器内 面	調整 外面	胎土	取上 番号	備考
第52 図	251	—	—	高坏	脚部	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	
	252	B-2	Ⅲ	高坏	脚部	橙	ナデ	ミガキ	精製	70	底径13cm
	253	—	—	高坏	脚部	暗灰	ナデ	ナデ	精製	—	
	254	—	—	高坏	脚部	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	
	255	—	—	高坏	脚部	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	
	256	—	—	埴形土器	—	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	
	257	B-4	—	埴形土器	口縁	赤	ナデ	ミガキ	精製	—	口径5.4cm
	258	E-5	—	埴形土器	口縁	暗橙	ナデ	ナデ	精製	246	
	259	D-2	Ⅲ	埴形土器	口縁	明橙	ナデ	ナデ	精製	19	
	260	—	Ⅲ	埴形土器	胴部	白橙	ナデ	ナデ	精製	—	
	261	—	—	埴形土器	胴部	白橙	ナデ	ナデ	精製	—	
	第53 図	262	A-4	—	埴形土器	胴部	赤	ナデ	ミガキ	精製	103
263		B-2	Ⅲ	埴形土器	胴部	暗橙	ナデ	ミガキ	精製	66	
264		B-3	—	埴形土器	底部	赤	ナデ	ミガキ	精製	120	底径4.8cm
265		A-1	—	?	口縁	白黄	板目	板目	砂	137	
266		—	—	?	頸部	白黄	板目	タタキ	—	—	
267		A-4	Ⅲ	—	—	暗橙	ナデ	指おさえ	—	177	
268		D-2	—	?	胴部	白橙	板目	タタキ	—	—	
269		—	—	—	—	白橙	ナデ	ナデ	—	—	
270		—	—	?	胴部	白黄	ナデ	ナデ	精製	—	
271		E-7	Ⅲ	?	頸部	白黄	ナデ	ナデ	精製	252	
272		D-1	—	?	口縁	暗灰	ナデ	ナデ	精製	—	
第54 図		273	B-3	Ⅲ	?	口縁	暗橙	ナデ	ナデ	精製	123
	274	C-2	Ⅲ	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	精製	36	
	275	D-1	Ⅲ	?	口縁	白橙	板目	板目	精製	5	
	276	—	—	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	精製	—	
	277	—	—	?	口縁	白橙	板目	ナデ	精製	—	
	278	—	—	?	口縁	白橙	板目	板目	砂	—	
	279	C-2	Ⅲ	?	—	淡茶	ナデヨコ	ナデヨコ	—	61	
	280	—	—	?	口縁	白橙	板目	板目	—	—	
	281	A-3	Ⅲ	?	—	白橙	ナデ	ナデ	砂	114	
	282	B-2	Ⅲ	?	—	白橙	ナデ	ナデ	砂	71	
	283	D-2	—	?	—	白橙	ナデ	ナデ	—	—	
	284	B-3	Ⅲ	?	—	暗橙	ナデ	ナデ	—	163	
285	D-3	Ⅲ	?	—	白橙	ナデヨコ	ナデヨコ	—	55		
286	—	—	?	口縁	白橙	ナデヨコ	ナデヨコ	精製	—		
287	—	—	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	—		
288	—	—	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	—		
289	B-3	Ⅲ	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	122		
290	—	—	?	口縁	暗橙	ナデ	ナデ	—	—		
291	—	—	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	—	—		
292	—	—	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	—		
293	—	—	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	—		
294	A-2	Ⅲ	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	砂	149		
295	B-3	Ⅲ	?	口縁	白橙	ナデ	ナデ	—	78		
296	A-4	—	須恵器	口縁	青灰	ヨコナデ	ヨコナデ	—	158		
297	—	—	須恵器	頸部	白灰	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—		
298	D-5	Ⅲ	須恵器	胴部	灰	タタキ	タタキ	—	406		
299	—	—	須恵器	胴部	灰	タタキ	タタキ	—	—		
300	D-5	Ⅲ	須恵器	胴部	灰	タタキ	タタキ	—	406		

表8 遺物観察表(7)

図	番号	地点 遺構	層	器種	部位	色調	調整		胎土	取上 番号	備考	
							器内 面	器外 面				
第 54 図	301	—	—	須恵器	胴	灰	ナ	デ	条線	—	—	
	302	—	—	須恵器	胴	明橙	タ	タ	タ	—	—	
	303	D-5	Ⅲ	須恵器	胴	青灰	タ	タ	タ	—	406	
	304	—	—	須恵器	底部	暗灰	ナ	デ	ナ	—	—	
	305	D-2	Ⅲ	?	?	明橙	—	ナ	デ	—	267	
	306	—	—	るつぼ	口縁	暗灰	—	ナ	デ	—	—	
	307	—	Ⅲ	フイゴ	口縁	暗灰	—	—	—	—	口径3.5cm	
	308	—	—	フイゴ	口縁	暗灰	—	—	—	—	—	
	309	A-1	Ⅲ	?	?	白黄	—	ナ	デ	精製	138	
第 55 図	310	—	—	坏形土器	底部	明橙	水	水	水	—	—	
	311	D-4	Ⅲ	碗形土器	底部	白橙	ナ	デ	ナ	—	260	
	312	—	—	?	底部	白灰	—	—	—	—	—	
	313	D-2	Ⅲ	?	口縁	白橙	ヨ	ヨ	ヨ	—	269	
	314	—	—	坏形土器	底部	明橙	ヨ	ヨ	ヨ	—	—	
	315	—	—	坏 or 碗	口縁	明橙	水	水	水	—	—	
	316	—	—	坏 or 碗	口縁	白橙	水	水	水	—	—	
	317	—	—	坏形土器	底部	白橙	ヨ	ヨ	ヨ	—	—	
	318	—	—	坏形土器	底部	白橙	ヨ	ヨ	ヨ	—	—	
	319	B-3	Ⅱ	摺鉢	口縁	暗灰	ナ	ナ	ナ	—	76	
	320	—	Ⅱ	摺鉢	底部	暗橙	—	—	—	—	81	
	321	—	—	摺鉢	胴部	暗灰	ナ	ナ	ナ	—	—	
	322	—	—	青磁	口縁	深緑	—	—	—	—	—	
	323	D-5	Ⅱ	青磁	口縁	青緑	—	—	—	—	248	
	324	—	—	?	胴部	白黄	—	ナ	ナ	—	—	
325	—	—	摺鉢	胴部	明橙	ヨ	ヨ	ヨ	—	—		
第 56 図	326	—	Ⅱ	土人形	完形	白橙	—	—	—	—	型づくり, 高さ5cm, 幅2.7cm	
	327	—	Ⅱ	がん具	完形	暗橙	—	—	—	—	型づくり, 幅1.8cm, 厚0.7cm, 重2.33g	
	328	D-4	Ⅱ	洪武通宝	完形	—	—	—	—	—	重さ2.25g	
	329	D-3	Ⅱ	寛永通宝	完形	—	—	—	—	—	重さ2.95g, 「ス」寶銭	
	330	—	—	砥石	—	—	—	—	—	—	重36.35g, 長8cm, 幅1.4cm, 厚1.6cm	
第 57 図	331	—	—	弥生土器	口縁	暗橙	ナ	ナ	ナ	金雲母	—	
	332	C-6	Ⅲ	弥生土器	突帯	暗橙	ナ	ナ	ナ	金雲母	401	
	333	A-4	Ⅲ	縄文土器	口縁	白黄	ナ	ナ	ナ	—	159	
	334	—	—	縄文土器	胴部	明橙	ナ	ナ	ナ	—	—	
	335	B-3	Ⅲ	縄文土器	口縁	暗橙	条	条	条	痕	—	—
	336	—	Ⅲ	縄文土器	胴部	暗橙	ナ	ナ	ナ	条痕	—	180
	337	—	—	縄文土器	胴部	暗橙	貝	貝	貝	殻条痕	ナ	—
	338	B-2	Ⅲ	縄文土器	胴部	暗橙	貝	貝	貝	殻条痕	—	—
	339	E-4	Ⅲ	縄文土器	胴部	暗橙	貝	貝	貝	殻条痕	—	250
	340	B-2	Ⅲ	縄文土器	口縁	暗橙	貝	貝	貝	殻条痕	—	—
341	E-6	Ⅲ	縄文土器	胴部	暗橙	貝	貝	貝	殻条痕	—	162	

## 第2節 平松原遺跡出土の馬歯および牛歯

西中川 駿 (鹿児島大学家畜解剖学教室)

### 1 はじめに

牛や馬が、何時頃からわが国で飼養されるようになったかは、非常に興味ある問題であるが、これまで縄文説<sup>1,2,5,11)</sup>弥生以降説<sup>9)</sup>などがあり、今だに明確にされていない。長谷部は、出水貝塚や轟貝塚などから馬歯を、また、陸平貝塚から牛骨を検出し、わが国の石器時代に牛、馬ありと報告している<sup>1,2)</sup>。

最近、全国各地の遺跡から、馬骨、牛骨の出土が報告されているが、いずれも古墳時代以降のもので、特に中世のものが多い。鹿児島県内での馬骨、馬歯の出土は、出水貝塚<sup>1,3)</sup> 麦之浦貝塚<sup>8)</sup> 橋牟礼川遺跡<sup>9)</sup> 上能野貝塚<sup>6)</sup> 中島ノ下遺跡<sup>10)</sup>などにみられ、特に出水貝塚は、縄文後期のものとして注目されてきた。しかしながら、最近の考古学調査法による発掘では、縄文遺跡からの出土例は皆無であり、先人の報告に疑問がもたれている。

平松原遺跡は、鹿児島県姶良郡姶良町平松原にあり、県埋文センター建設のために、県文化課が発掘調査を行い、古墳から江戸時代の遺構が検出された遺跡である。出土した馬、牛の歯と一部の骨の年代は、確定されていないが、江戸時代と推定されている。遺物は、土ごと当教室に搬入されたが、土を注意深く取り除き、歯は出来る限り歯槽と共に取り出し、検索に供した。検索方法は、歯の形状を肉眼的に精査した後、ノギスを用いて計測し、日本在来馬の御崎馬、トカラ馬や在来牛の見島牛ならびに口之島牛のものと比較検討し、さらに馬については、頭蓋の大きさや体高の推定を試みたので、その概要を報告する。

### 2 出土馬歯・牛歯の概要

出土状況については、本文に詳しいので省略するが、馬4頭、牛1頭分の歯は、寛永通宝の出土したⅡ層にみられ、検出時には肋骨などの痕跡があったということから、1頭ずつ埋葬されていたことがうかがわれる。出土量は馬のもの1,107.7g、牛52.0gで、合計1,159.5gである。馬、牛共に個体が判明しているので、個々の歯についての記載をさけ、各個体ごとに切歯、前臼歯、後臼歯に分けて述べることにする。出土馬歯の計測値は、同時代の指宿市中島ノ下遺跡出土歯および在来馬のものと共に表1に示した。

#### 1号馬 (図版4の1～9)

1号馬は、左下顎を下にして、上下の後臼歯 ( $M^1 \sim M^3$ ,  $M_1 \sim M_3$ ) が咬み合わさった状態でみられ、前臼歯 ( $P^2 \sim P^4$ ,  $P_2 \sim P_4$ ) や切歯 ( $I^1 \sim I^3$ ,  $I_1 \sim I_3$ ) は、それら歯の位置に散らばって検出され、また、上顎骨や下顎骨の歯槽の一部もみられる。歯の保存状態は、今回出土した中で最もよく、その重量は601.6gである。切歯は左 $I^1$ ,  $I^2$ ,  $I^3$ , 右 $I^2$ および左右の $I_1$ がみられ、咬面のゾウゲ質、セメント質は、溶解し、エナメルヒダのみが明瞭で、黒窩を囲むエナメルヒダは、長楕円形を呈している。左 $I^1$ の歯冠長と幅は $14.9 \times 9.1$  mmで、これはトカラ馬より大きく、御崎馬より小さい。下顎切歯はトカラ馬のものと同じ大きさか、それより小さい。上顎の前、後臼歯共に、一部に破損したのものもみられるが歯根尖の欠損を除くとほぼ完全な形を残し

ており、咬面のエナメルヒダは明瞭にみられ、その形状はトカラ馬や御崎馬など由来馬の歯と類似している。歯の大きさは、トカラ馬の小さい方に近い値を示している。下顎の前、後臼歯は、左 $P_3 \sim M_2$ まで歯根を有し、ほぼ完全で、 $P_4$ の歯冠長、幅および全歯高（歯根から）は、それぞれ24.1、13.3、86.7mmであり、全歯高は御崎馬の8歳のものと同じ大きさである。咬面のエナメルヒダの形状は、全臼歯共に由来馬に類似している。

#### 2号馬（図版4の11～18）

2号馬も1号馬と同じように下顎を下に、上顎が噛み合った状態で検出され、上顎の臼歯の歯根尖はすべて破損している。切歯は、上下、左右共に残っているが、犬歯はみあたらない。保存状態が悪いために不完全な歯が多い。左右の下顎臼歯には下顎骨がみられ、右側では $P_3 \sim M_3$ が歯槽に釘植している（写真Iの14）。総重量は216.6gである。切歯は上、下顎共に遺存しているが、不完全であり、咬面中央のエナメルヒダは、完全に消失し、老馬であることがわかる。左 $I_1$ の歯冠長と幅は、11.5×9.9mmで、これはトカラ馬の下限にあたる。上顎臼歯は、左 $M^3$ を除くすべてが検出されたが、咬面の摩耗は著しく、特に両側の $P^3 \sim M^1$ では咬面内部のエナメルヒダは消失し、凹状を呈している。右 $P^3$ の歯冠長と幅は、21.6×24.2mmで、長さより幅が大きく、トカラ馬のものより小さい。下顎臼歯も上顎と同じように外側のエナメルヒダのみが明瞭で、 $P_3 \sim M_2$ の咬面内部のヒダは完全に消失し、凹状を呈している。左右 $M_3$ の咬面のエナメルヒダは、由来馬と似ているが、歯冠長と幅は、それぞれ33.2×11.4、30.1×10.5mmで、幅が著しく小さい。

#### 3号馬（図版4の19、20）

3号馬は、右上顎の臼歯（ $P^3$ 、 $P^4$ ）および右下顎臼歯（ $P_3$ 、 $P_4$ 、 $M_1$ ）のみで、他の歯は検出されておらず、総重量は23gで、保存状態も悪い。 $P^3$ は舌側の原錐、原小錐の破損しているが、その歯冠長は27.9mmで、由来馬とほぼ同じ大きさである。また、 $P_3$ の歯冠長と幅は、28.0×11.8mmで、幅が由来馬より小さいことが特徴的である。

#### 4号馬（図版4の21～27）

4号馬は、2号馬より少し若い歯の形状をしており、上顎と下顎が少しずれて検出され、左側の上顎骨および下顎骨は一部遺存している（写真Iの23、25）。切歯は左側の上下と、右 $I^2$ がみられ、上顎臼歯は、左側の全臼歯、下顎は $M_3$ を除く全臼歯がみられ、総重量266.3gで全般的に保存はよいが、歯根尖やセメント質は欠損している。切歯は、 $I^1 \sim I^3$ 共に小さくなった円形の歯星がみられ、左 $I_2$ の歯冠長と幅は、13.5×8.6mmで、これはトカラ馬とほぼ同じ大きさである。上顎の $P^4$ 、 $M^3$ の咬面中央のエナメルヒダは完全に消失し、凹がみられ $P^4$ 、 $M^2$ も咬耗が著しい。 $P^3$ の歯冠長と幅は、23.0×24.2mmで、これはトカラ馬とほぼ同じ大きさである。下顎臼歯では、上顎ほど咬耗は著しくないが、 $M_1$ で中央のエナメルヒダは完全に消失し、凹状を呈している。他の臼歯のヒダの形状は、由来馬と類似している。 $M_2$ の歯冠長と幅は、22.0×11.8mmであり、トカラ馬とほぼ同じ大きさである。



### 1号牛 (図版4の28, 29)

牛の出土は、1個体であり、それらは $P_4 \sim M_3$ の下顎骨の一部で、総重量52gである。 $P_4$ はほとんど破損し、計測不能であるが、他の臼歯の歯冠長と幅は、 $M_1$ で $23.0 \times -$ 、 $M_2$ で $25.4 \times 15.5$ 、 $M_3$ で $39.3 \times 15.1$ であり、 $M_3$ の大きさは、見島牛とほぼ同じ大きさであり、口之島牛より大きい。咬面のエナメルヒダは明瞭で、その形状は、見島牛によく似ている。

### 3 出土歯から年齢、性別および体高の推定

まず、御崎馬を中心として作成した年齢推定式を用いて、各出土馬の年齢の推定を試みた。

1号馬は、 $P_3 \sim M_3$ 、 $P_3 \sim M_2$ の各歯の歯高(中心部)を各々の推定式に代入して推定した。その結果 $102.58 \pm 12.46$ カ月齢となり、8.5(7.5~9.6)歳と推定された。性別は判別分析を用いて判別すると雄と判定されたが、犬歯が検出されていないことから、雌の可能性もある。体高の推定は、出土した歯の歯冠長から臼歯列長を推定し、さらに臼歯列長から頭蓋長、頭蓋基底長や下顎全長を推定して、これらの推定値から林田・山内の方法で体高を推定した。その結果1号馬は $127.32 \pm 3.83$ cm(下顎全長から)で、これはトカラ馬より大きく、御崎馬より小さい中型馬であることが示唆される。

2号馬の年齢は、1号馬と同じ方法で求めると、 $246.22 \pm 21.80$ カ月齢で、20.5(18.7~22.3)歳であると思われる。性別の判別では雌と判定され、犬歯もないことから雌の可能性が高い。体高は $120.99 \pm 7.62$ cmと推定される。3号馬は、完全な歯の形状を保っていないため、推定式を用いて計算出来ないが、10歳以上のもので、性別も不確実であり、また、体高も推定出来ない。4号馬は、 $197.67 \pm 12.60$ ケ月齢で16.5歳と推定される。性別は犬歯のないこと、また、判別分析でも雌と判定される。体高は、 $125.21 \pm 4.86$ cm(下顎全長から)と推定される。

一方、牛の歯は年齢の推定式などが作られておらず、見島牛や口之島牛との比較において8歳位と思われ、また、性別は雌で、体高も在来牛との比較において、115cm前後のものと推定される。

### 4 考 察

近年、全国各地の遺跡から馬歯、馬骨の出土が報告され、特に中世の馬についての全様が明らかにされようとしている。中でも鎌倉市の千葉地東遺跡からは大量に出土し、馬が戦いのために使用されていたことが判明している<sup>9)</sup>九州でも馬の出土は多くなり、最近、筑紫野市の諸田仮塚遺跡では、轡を着けた馬の頭蓋が出土し、話題になっている。

鹿児島県内での馬骨、馬歯の出土は、前述したように、出水貝塚(縄文)をはじめ麦之浦貝塚(古墳以降)、橋牟礼川遺跡(平安)などから出土しているが、出水貝塚の馬歯、馬骨の出土層には疑問をもつ人もあり、また、最近の考古学調査方法において、縄文遺跡からの馬、牛の出土のないことから、これまでの先人の報告に疑問がもたれている。

平松原遺跡出土した馬歯は、形状や大きさが、明治以降に洋種により改良された馬のものより、日本在来馬の歯に似ていることから、改良以前のものであり、また、発掘地層が寛永通宝の出土と同じⅡ層からであることから、時期は、江戸時代のものであると考えてよいであろう

う。江戸時代の出土馬歯は、指宿市の中島ノ下遺跡の廃寺跡から出土が報告されており、歯の大きさは本遺跡のものより少し大きい(表1)、形状は御崎馬と似ていることが報告されている。本遺跡の馬は、体高が120~127cm位と推定され、これは現存のトカラ馬(115cm)より大きく、御崎馬(130cm前後)より小さい馬であり、また、前記鹿児島県内の遺跡から出土馬と同じ大きさである。また、20歳前後の老齢馬もあり、これらの馬が何に使用されていたかはわからないが、おそらく運搬や農耕に使用され、また、雌馬は仔馬の生産のために飼養され、死後埋葬されたものと考えられる。

一方、牛の出土は、県内では高橋貝塚(弥生)、橋牟礼川遺跡(平安)にみられるが、高橋のものは後世の混入の可能性もあるという。本遺跡出土の歯は、現代和牛の黒毛和種より小さく、日本在来牛である見島牛の大きさで、また、形状も似ていることから、馬と同様に改良以前のもので、体高が115cm位の牛であったことが考えられる。また、当時の牛は、農耕と深いかかわりをもっていたことが想像される。

## 5 まとめ

平松原遺跡(江戸)出土の馬歯、牛歯について調査した。

- 1) 馬歯の出土量は、1,107.5g(骨片を含む)、牛歯52.0gで、合計1,159.5gで、馬4体、牛1体分の歯である(写真1~29)。
- 2) 歯の形状は、馬はトカラ馬や御崎馬に、牛は見島牛によく似ており、改良以前の馬、牛である。
- 3) 歯高(中心部)から出土馬の年齢を推定すると、8.5、16.4、20.5歳であり、体高は120~127cmで、小型馬(トカラ馬)と中型馬(御崎馬)の中間の大きさである。牛は8歳位で、115cm前後と推定される。
- 4) 飼養の目的はわからないが、農耕や運搬に使用していたことが考えられ、死後埋葬されたものと思われる。

### 参考文献

1. 長谷部 言人：石器時代の馬に関して，人類誌40(4)，131—135(1925)
2. 〃：石器時代に飼牛あり，人類誌，54(10)，21—26(1939)
3. 林田 重幸：日本在来馬の系統に関する研究，1—180，日本中央競馬会，東京(1978)
4. 〃，山内 忠平：馬における骨長より体高の推定法，鹿大農学術報告，6，146—156(1957)
5. 直良 信夫：日本馬の考古学的研究，1—201，校倉書房，東京(1984)
6. 西中川 駿他：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅲ．鹿児島県上能野貝塚出土骨の概要，鹿児島考古，16，99—114(1982)
7. 〃：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅴ．鹿児島県高橋貝塚出土骨の概要，鹿大農学術報告，34，83—93(1984)
8. 〃：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅵ．鹿児島県麦之浦貝塚出土骨の概要，鹿大農学術報告，37，105—113(1987)
9. 〃：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の起源，系統に関する研究，文部省科学研究成果報告書1—93(1989)
10. 〃：中島ノ下遺跡出土の馬歯，指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)，119—123(1990)
11. 芝田 清吾：日本古代家畜史の研究，100—189，学術出版会，東京(1969)

表9 出土馬齒の計測値

(mm)

		歯の種類	第一切歯	第二切歯	第三切歯	第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯	推定年齢
一 号 馬	上 顎	歯冠長 L	14.5	14.7	17.3	30.3	23.5	23.5	21.2	20.7	22.2	8.5才
		歯冠長 R				30.3	23.9	23.0	21.9	21.0		
		歯冠幅 L	9.1	8.8	8.2	19.6	22.1	22.6	20.8	22.3	18.3	
		歯冠幅 R				(17.8)	(20.9)	22.0	21.4	21.9		
		歯高 L	(36.2)	(36.5)	34.2	40.7	52.4	52.5	54.4	46.6	52.1	
		歯高 R				40.3	46.2	(46.7)	(45.2)	40.0		
	下 顎	歯冠長 L	12.4			26.1	24.3	24.1	22.1	23.2	25.6	
		歯冠長 R	12.6			27.5	23.9	24.5	21.5	22.9	25.4	
		歯冠幅 L	7.7			11.8	13.3	13.3	12.3	11.9	10.7	
		歯冠幅 R	7.6			11.6	12.6	14.3	12.4	12.0	11.4	
		歯高 L	(40.6)			37.7	45.6	57.0	38.9	51.8	44.3	
		歯高 R	(38.6)			40.8	46.5	55.2	46.0	48.4	45.9	
二 号 馬	上 顎	歯冠長 L		13.8		(27.5)	22.3	20.6	19.8	20.3	24.3	20.5才
		歯冠長 R	13.6	13.5		(30.0)	21.6	21.0	19.2	23.2		
		歯冠幅 L		10.8		22.1	24.5	23.2	21.7	21.3	21.2	
		歯冠幅 R	(11.7)	13.0		21.9	24.2	22.5	20.8	20.5		
		歯高 L		40.1		5.9	13.8	13.3	9.6	15.3	21.8	
		歯高 R				11.1	16.2	9.6	10.3	17.2		
	下 顎	歯冠長 L	(2.0)	(3.2)	(1.2)	5.5	6.2	7.8	6.3	8.1	14.6	
		歯冠長 R	(2.1)	(3.4)	(1.3)	8.5	8.1	5.7	5.8	10.8		
		歯冠幅 L	11.5	12.1		26.6	21.2	10.7	19.2	20.4	33.2	
		歯冠幅 R	11.8	11.9		12.5	13.2	12.8	11.8	13.1	11.4	
		歯高 L	9.9	9.7		6.9						
		歯高 R	9.6	10.3	13.1							
四 号 馬	上 顎	歯冠長 L	14.3	13.9	14.1	33.9	24.4	23.1	19.7	20.5	25.3	16.4才
		歯冠長 R										
		歯冠幅 L	11.8	12.7	11.3	19.0	22.8	24.2	22.2	22.4	21.1	
		歯冠幅 R				25.5	23.8	21.5	17.1	23.8	23.0	
		歯高 L	40.3	44.4	44.8	11.2	14.4	16.1	12.1	15.0	13.6	
		歯高 R	(3.4)	(4.6)	(3.6)							
	下 顎	歯冠長 L	(3.4)	(4.6)	(3.6)							
		歯冠長 R	12.0	12.8	13.5	26.1	23.9	22.9	21.0	22.8		
		歯冠幅 L		8.8	8.4	12.3	13.7	14.8	13.4	11.8		
		歯冠幅 R				22.8	23.0	23.9	19.5	27.5		
		歯高 L	(3.0)	(3.9)	(2.1)	8.9	12.3	14.0	9.3	12.0		
		歯高 R	(1.7)									
中 島 ノ 下 遺 跡	上 顎	歯冠長 L				36.2			24.8	23.9	24.8	10~15才
		歯冠長 R							24.9	23.6	24.7	
	歯冠幅 L				29.5	27.9		24.9	23.1	20.6		
	歯冠幅 R				31.2		26.5		24.3	21.0		
ト カ ラ 馬	上 顎	歯冠長 L	13.7±3.2	14.7±2.1	15.5±1.9	33.7±1.6	26.7±1.6	23.8±0.8	23.5±2.4	22.8±1.3	25.3±1.3	3~16才
		歯冠長 R	13.8±2.5	15.8±1.9	15.5±2.3	34.0±1.7	27.1±2.1	24.7±1.0	23.3±2.6	23.6±2.1	24.6±1.6	
		歯冠幅 L	11.1±3.0	10.8±0.7	9.7±0.7	22.4±1.5	24.8±1.9	24.4±2.0	24.1±1.3	22.6±1.7	21.0±1.4	
		歯冠幅 R	10.7±1.4	10.9±1.9	9.6±1.1	23.2±1.4	26.0±2.3	24.3±0.5	23.8±0.7	23.0±0.8	19.5±1.5	
		歯高 L				27.8±12.2	33.6±13.5	35.9±11.9	32.7±15.6	37.8±15.4	35.3±8.1	
		歯高 R				33.9±2.9	43.0±16.3	46.1±18.1	40.3±20.7	46.4±22.9	41.9±16.1	
	下 顎	歯冠長 L	13.7±2.4	13.7±2.8	14.2±1.3	26.9±1.7	25.9±0.9	23.3±1.5	23.6±2.9	24.1±2.1	29.1±3.7	
		歯冠長 R	12.4±1.9	12.0±2.6	13.5±2.2	28.1±2.4	26.2±1.6	24.5±1.7	24.7±2.4	24.8±2.1	27.9±1.6	
		歯冠幅 L	8.9±1.1	9.1±0.9	9.4±1.7	13.4±1.8	14.6±1.6	13.8±1.8	13.9±1.4	12.3±1.5	11.5±1.6	
		歯冠幅 R	9.3±0.8	9.5±0.9	8.9±1.2	13.0±0.8	13.9±1.1	13.4±1.5	13.7±1.0	12.4±1.0	11.1±1.0	
		歯高 L				23.9±11.2	32.0±13.6	37.4±10.7	34.6±15.3	39.6±13.8	34.6±9.3	
		歯高 R				30.8±14.1	38.1±19.3	36.7±20.3	42.5±22.9	49.2±18.5	44.6±17.8	
御 崎 馬	上 顎	歯冠長 L	16.9±1.6	18.5±2.2	18.2±2.8	34.9±1.1	27.6±1.6	25.3±1.3	24.2±1.8	24.9±2.3	24.2±2.7	4~22才
		歯冠長 R	15.5±1.1	16.9±1.4	16.9±2.9	33.9±1.9	27.3±1.7	25.7±1.4	22.7±1.9	23.4±2.3	27.1±2.6	
		歯冠幅 L	9.6±0.4	9.6±0.8	9.1±0.8	22.3±1.1	24.9±0.8	23.8±1.7	24.2±0.4	23.5±0.8	19.9±1.6	
		歯冠幅 R	10.5±1.1	10.5±1.4	9.5±1.2	21.6±1.9	25.4±1.1	25.5±1.5	24.9±0.9	23.7±1.6	21.0±1.9	
		歯高 L				35.3±12.4	46.8±16.6	41.0±15.4	45.2±17.1	50.4±20.4	47.7±16.9	
		歯高 R				25.2±12.1	34.3±17.2	52.4±18.1	32.6±17.0	37.2±20.9	35.2±18.9	
	下 顎	歯冠長 L	14.6±1.4	16.3±3.2	16.5±1.5	29.9±1.8	26.6±1.9	25.6±1.9	23.9±2.1	25.4±2.1	27.5±3.1	
		歯冠長 R	13.3±1.7	14.2±1.5	15.1±2.3	30.0±1.6	25.8±1.1	24.2±2.8	23.1±1.9	24.1±2.0	30.6±3.2	
		歯冠幅 L	8.2±0.4	8.7±0.7	8.8±1.1	13.7±0.5	15.0±0.6	14.3±1.1	14.2±2.3	14.3±3.7	11.8±1.5	
		歯冠幅 R	9.6±1.9	9.7±1.2	9.1±1.1	14.0±1.0	15.5±2.6	14.6±1.2	14.4±2.0	13.9±2.5	12.5±1.4	
		歯高 L				32.2±12.4	47.1±19.1	55.9±20.3	46.7±20.3	54.3±19.7	49.9±18.7	
		歯高 R				24.9±12.5	33.8±20.4	39.3±22.1	33.1±21.2	39.2±19.7	39.8±17.1	

( ),不完全な歯, L:左, R:右, M:雄, F:雌

## 第 9 章 考 察

縄文時代・弥生時代の遺物は十数点のみであり、生活の中心的な場所であったとは考えにくい。古墳時代・平安時代・中世～近世は遺構も検出されており、当時の生活の一端を窺い知ることができる。

### 古墳時代について

甕形土器の口縁部形態は、やや外反するものがあるものの、ほとんどが直口あるいは内湾している。また高坏の坏部は内湾するタイプのものである。さらに甕形土器あるいは鉢形土器の脚部内面に突起をもつものが多い。中村直子はそれぞれの部位の変遷を属性分析を通して提示している<sup>(1)</sup>。これによると、平松原遺跡出土土器の特徴は「成川式土器」の中でも新しい属性を兼ね備えている。

平松原遺跡では4基の住居跡を検出した。切り合はなく直接的に時間の前後関係を捉えることはできない。ただし1号・3号住居跡と2号・4号住居跡の向きが異なることは、時間的な差が認められるのではなかろうか。少ない材料ではあるが、各住居跡出土の甕形土器に注目すると、まず3号住居跡には突帯をもたず外反する口縁部の土器がみられる。また突帯の刻みの施し方に着目すると、ヘラあるいは棒によるものと指による刻みの比は1号47.4:52.6, 2号28.6:71.4, 3号50:50, 4号0:100となり、2号住居跡と4号住居跡の指による刻みの割合が高い。平田信芳は甕形土器の口縁部形態と突帯のあり方について時間的推移を示している。これによると、口縁部形態は外反→直口→内湾、また突帯については突帯なし→刻目突帯→絡条突帯という方向性を述べている<sup>(2)</sup>。このことから1号・3号住居跡の方が2号・4号住居跡よりも若干古い様相を示しているといえる。住居跡が建てられた時期が異なるのであって、存在した時期は重なっているのかもしれない。土器の特徴から古墳時代後期（6世紀から7世紀初めころ）の年代が与えられる。

### 平安時代の溝について

溝内から出土したものは土師器の坏である。底面の切り離しはヘラ切りによるものである。また、坏の体部が内湾せずストレートにのびる。太宰府編年によると、S E 400 出土例に類似し、9世紀前半の年代が与えられている<sup>(3)</sup>。さらに、「奈」の文字を刻んだ土器は底部から体部へいたる部分であり、よくヘラミガキされている。須恵器の特徴を残す黒色土器に似ているものであり、8世紀代に遡るものである<sup>(4)</sup>。

以上のことから、溝の年代は9世紀と考える。

溝は検出面での幅1 m 50cm、深さ1 m 10cmで断面「V」をなし、ほぼ南北方向にまっ直のびている。平安時代の初めにこれほど大きな溝の検出例は初めてである。どれぐらいの規模であるのかは、周辺の調査を待たなければならないが、墨書土器・刻書土器を伴っていることから官衛的な施設も想定できるであろう。

発掘調査区域内には同時期の遺構・遺物がみられなかったことから、溝より西側に生活の主体部が存在する可憚性が大きい。

### 墓について

洪武通寶は1368年が初鑄の中国でつくられた錢である。櫻木晋一によると鹿児島県内で墓に伴って洪武通寶が出土したのは、枕崎市松之尾遺跡13号人骨7枚・同17号人骨7枚・川内市成岡遺跡墓壙A 4枚・川内市西ノ平遺跡中世墓壙B 5枚・同火葬遺構7枚・鹿屋市前畑遺跡6号墓17枚が知られている。川内市成岡遺跡墓壙A 4枚例を除くとすべて奇数の枚数であり、平松原遺跡の3枚もこの例に加えることになった。また、櫻木は中・近世墓に副葬される六道錢を調べることによって、渡来錢と古寛永通宝との間が不連続であることを指摘している。このことは徳川幕府の錢貨政策によって渡来錢を速やかに回収し、幕府公鑄貨である古寛永通宝を大量に流布したことを示している<sup>(5)</sup>という。

以上のことから平松原遺跡の墓は、古寛永通宝が鑄造される1636年までにはつくられていたと考える。

### 獣骨について

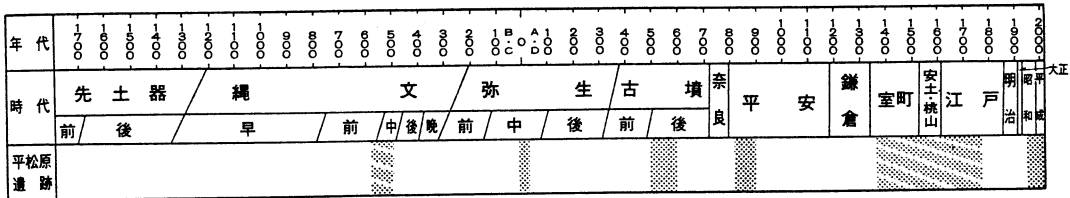
6頭分の獣骨が出土した。残りが良くて取り上げられたのは、顎骨と歯のみであったが、検出時には肋骨部分の痕跡もみられたので、1頭まるごと埋められていたことがわかる。掘り込み面ははっきりしないが、埋土は古寛永通宝が出土したⅡ層と同質のものである。動物が埋められた正確な年代は確定することはできず、古寛永通宝がつくられた1636年から青年学校が建てられる1943年までの間としか現在のところは言えない。なお、隣接地に現在「馬頭観音」と呼ばれている石碑があることは興味深い。石碑には「羽山大明神」の銘が刻まれており、「羽山」は「早馬」に通ずるとい<sup>(6)</sup>う説もある。また「寶曆二」(1752年) 銘も刻まれており、出土獣骨との相関の有無については、更なる検証が必要である。

- 1) 中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古 第6号』1987.12 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 2) 平田信芳『萩原遺跡』1978.3 始良町教育委員会
- 3) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館 研究論集2』1976.3 九州歴史資料館
- 4) 森 隆「西日本黒色土器生産(中)」『考古学研究』第37巻第3号 1990.12 考古学研究会
- 5) 櫻木晋一「鹿児島県の出土六道錢一前畑・成岡遺跡を中心として」『平成二年度鹿児島県考古学会研究発表要旨』1990.7 鹿児島県考古学会
- 6) 始良町歴史民俗資料館長 楠田靖夫氏御教示。

## 第 10 章 ま と め

県立埋蔵文化財センター建設に伴う平松場原遺跡の発掘調査によって、この地で縄文時代から現代に至るまで綿々と生活が行われていたことが明らかになった。要約すると以下のとおりである。

1. 縄文時代の土器片が12点出土した。
2. 弥生時代中期の土器が3点出土した。
3. 古墳時代後期の住居跡を4基検出した。
4. 平安時代初めの溝を検出した。
5. 平安時代初めの溝からは「中」の墨書土器と、「奈」の刻書土器が出土した。
6. 洪武通寶3枚を副葬した墓1基を検出した。
7. 中世～近世にかけての掘り込みを検出した。
8. 6体分の獣骨が出土した。
9. 1943年に建てられた青年学校の基礎を確認した。



第58図 平松原遺跡のタイムスケール

図版1  
1号住居跡



1号住居跡検出状況



1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡全景



1号住居跡鉢形土器  
出土状況

1号住居跡周辺



図版2  
住居跡

2号住居跡



3号住居跡及び基  
検出状況

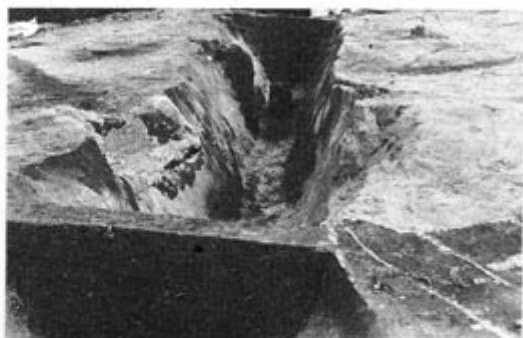


3号住居跡遺物  
出土状況

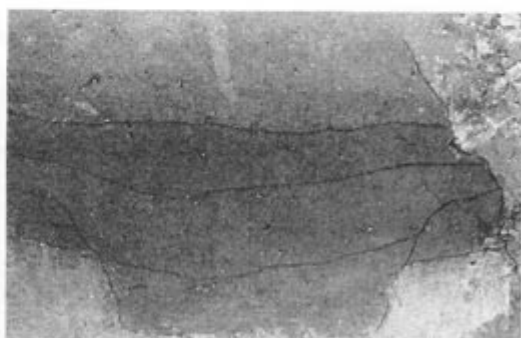




図版3 溝及び馬頭観音



溝全形

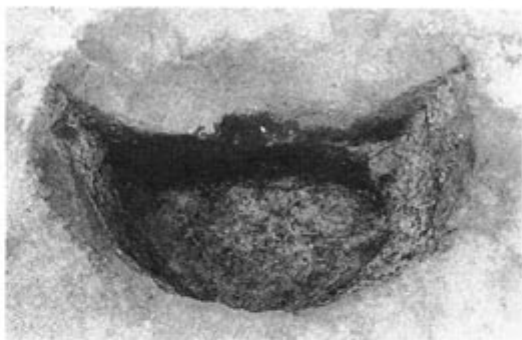


溝断面



馬頭観音

墓断面



墓完掘



掘り込み完掘



掘り込み断面

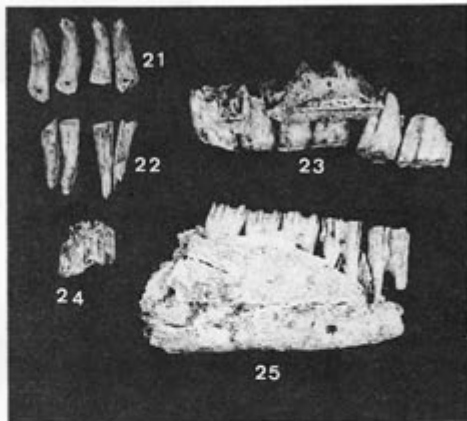
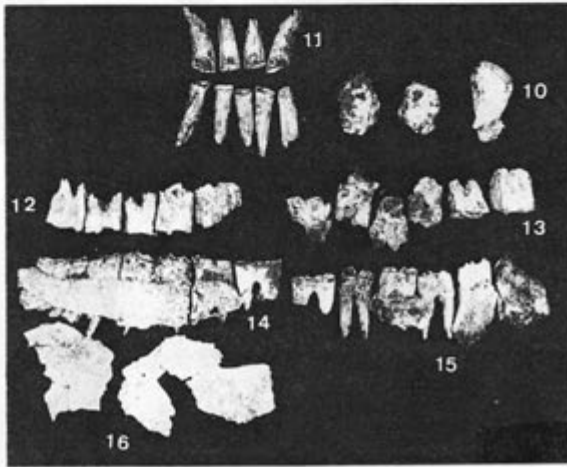
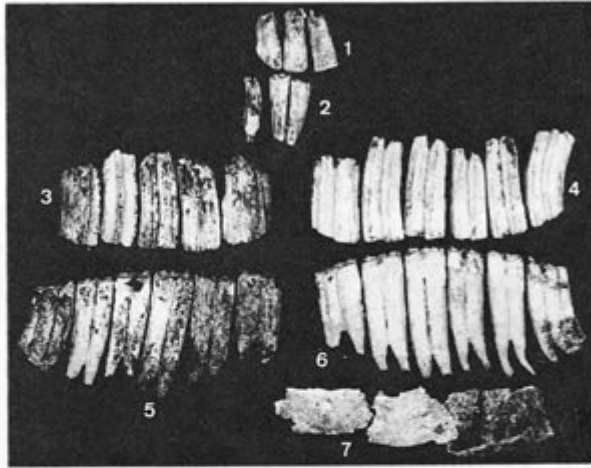


図版4 墓及び掘り込み

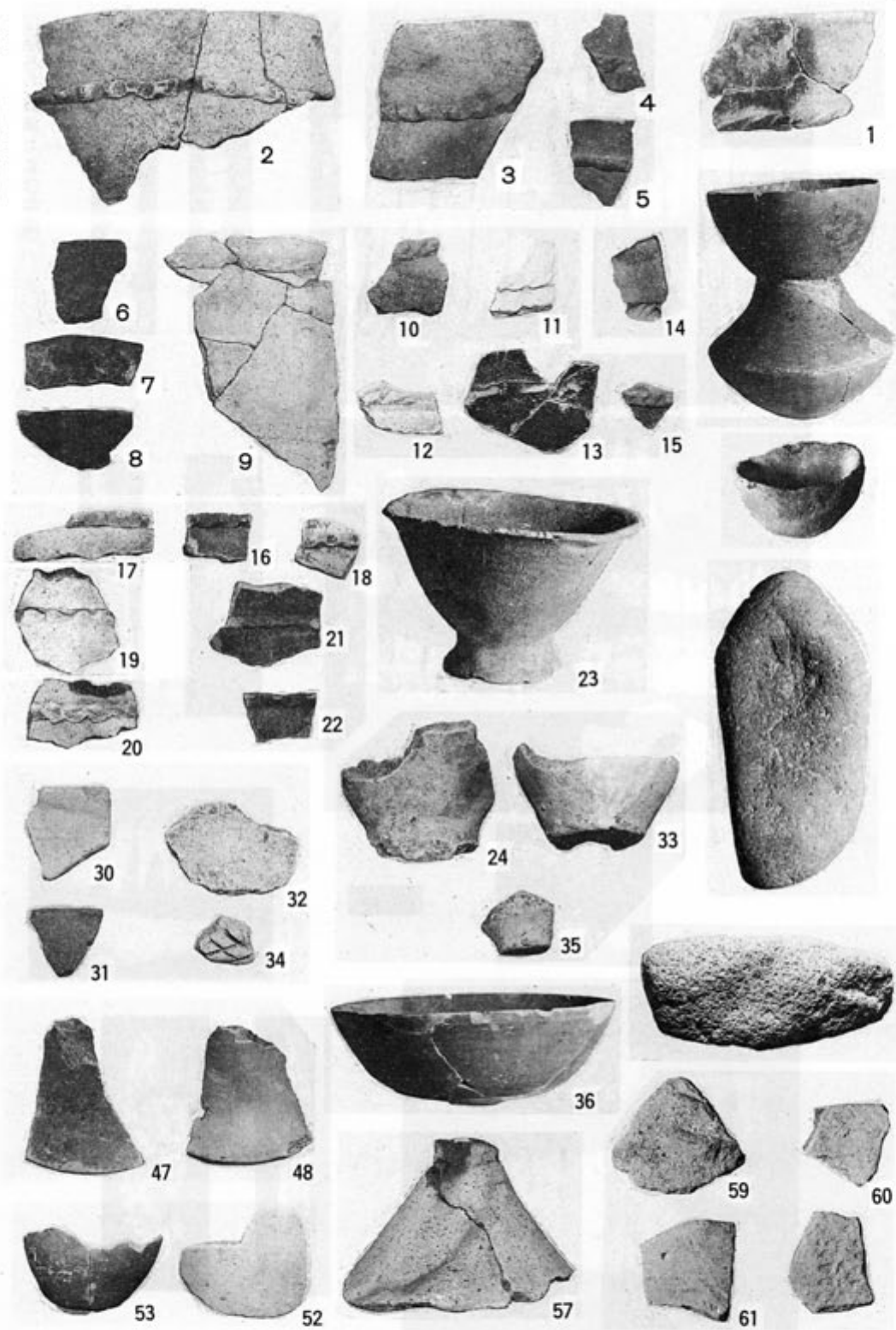
## 写真説明

- 1～9：1号馬，10～18：2号馬，19・20：3号馬，21～27：4号馬，28・29：1号牛
1. 上顎切歯(右から左の $I^1$ ,  $I^2$ ,  $I^3$ ), 2. 下顎切歯(右から右の $I_1$ , 左の $I_1$ ,  $I_2$ )
3. 右上顎臼歯(右から $P^2$ ,  $P^3$ ,  $P^4$ ,  $M^1$ ,  $M^2$ ), 4. 左上顎臼歯(左から $P^2$ ,  $P^3$ ,  $P^4$ ,  $M^1$ ,  $M^2$ ,  $M^3$ ), 5. 右下顎臼歯(右から $P_2$ ,  $P_3$ ,  $P_4$ ,  $M_1$ ,  $M_2$ ,  $M_3$ ), 6. 左下顎臼歯(左から $P_2$ ,  $P_3$ ,  $P_4$ ,  $M_1$ ,  $M_2$ ,  $M_3$ ), 7. 左下顎骨片
8. 左下顎臼歯咬面(上から $P_2$ ～ $M_3$ ), 9. 左上顎臼歯咬面(上から $P^2$ ～ $M^2$ )
10. 側頭骨片 11. 上段：上顎切歯(左から左 $I^2$ ,  $I^1$ , 右 $I^1$ ,  $I^2$ ), 下段：下顎切歯(左から左 $I_2$ ,  $I_1$ , 右 $I_1$ ,  $I_2$ ,  $I_3$ ), 12. 右上顎臼歯( $P^2$ ～ $M^2$ ), 13. 左上顎臼歯( $P^2$ ～ $M^3$ ), 14. 右下顎臼歯(右から $P_2$ ～ $M_3$ ), 15. 左下顎臼歯(左から $P_2$ ～ $M_3$ ), 16. 左下顎骨片
17. 右上顎臼歯咬面(上から $P^2$ ～ $M^2$ ), 18. 右下顎臼歯咬面(上から $P_2$ ～ $M_3$ )
19. 右上顎臼歯(右から $P^3$ ,  $P^4$ ), 20. 右下顎臼歯(右から $P_3$ ～ $M_1$ )
21. 上顎臼歯(右から右 $I^2$ , 左 $I^1$ ,  $I^2$ ,  $I^3$ ), 22. 下顎臼歯(右から右 $I^2$ ,  $I^1$ , 左 $I^1$ ,  $I^2$ )
23. 左上顎臼歯(右から $P^2$ ～ $M^3$ ), 24.  $P^2$  25. 左下顎臼歯(右から $P^2$ ～ $M^2$ )と下顎骨片
26. 左下顎臼歯咬面(上から $P_2$ ～ $M_3$ ), 27. 左上顎臼歯(上から $P^2$ ～ $M^4$ )
28. 左下顎臼歯( $P^4$ ～ $M^3$ ), 29. 左下顎骨片

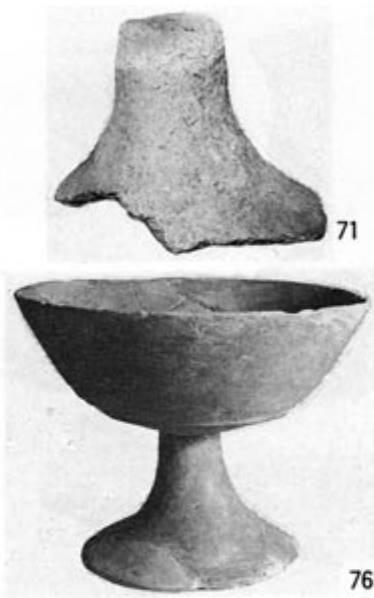
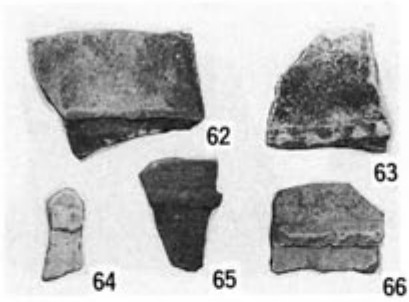
図版5 馬歯および牛歯



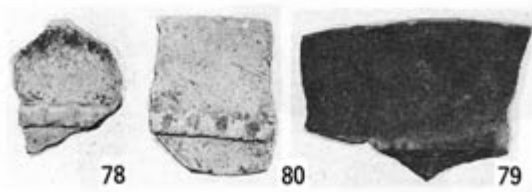
图版 6  
出土遗物 (1)



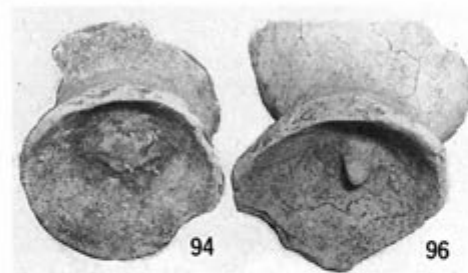
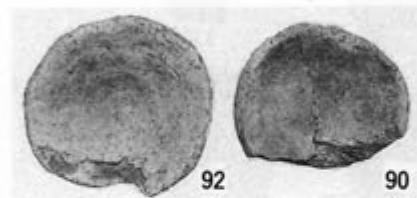
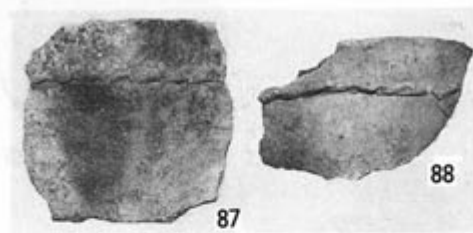
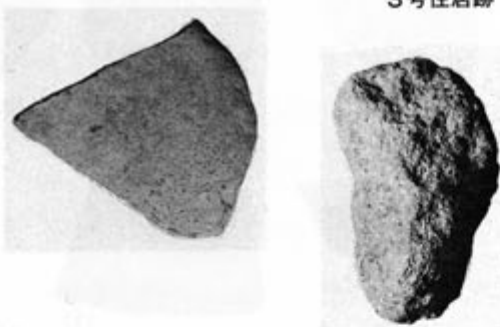
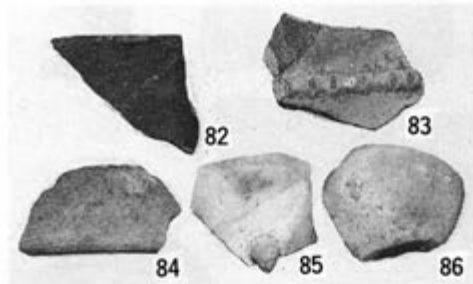
図版7  
出土遺物(2)



2号住居跡

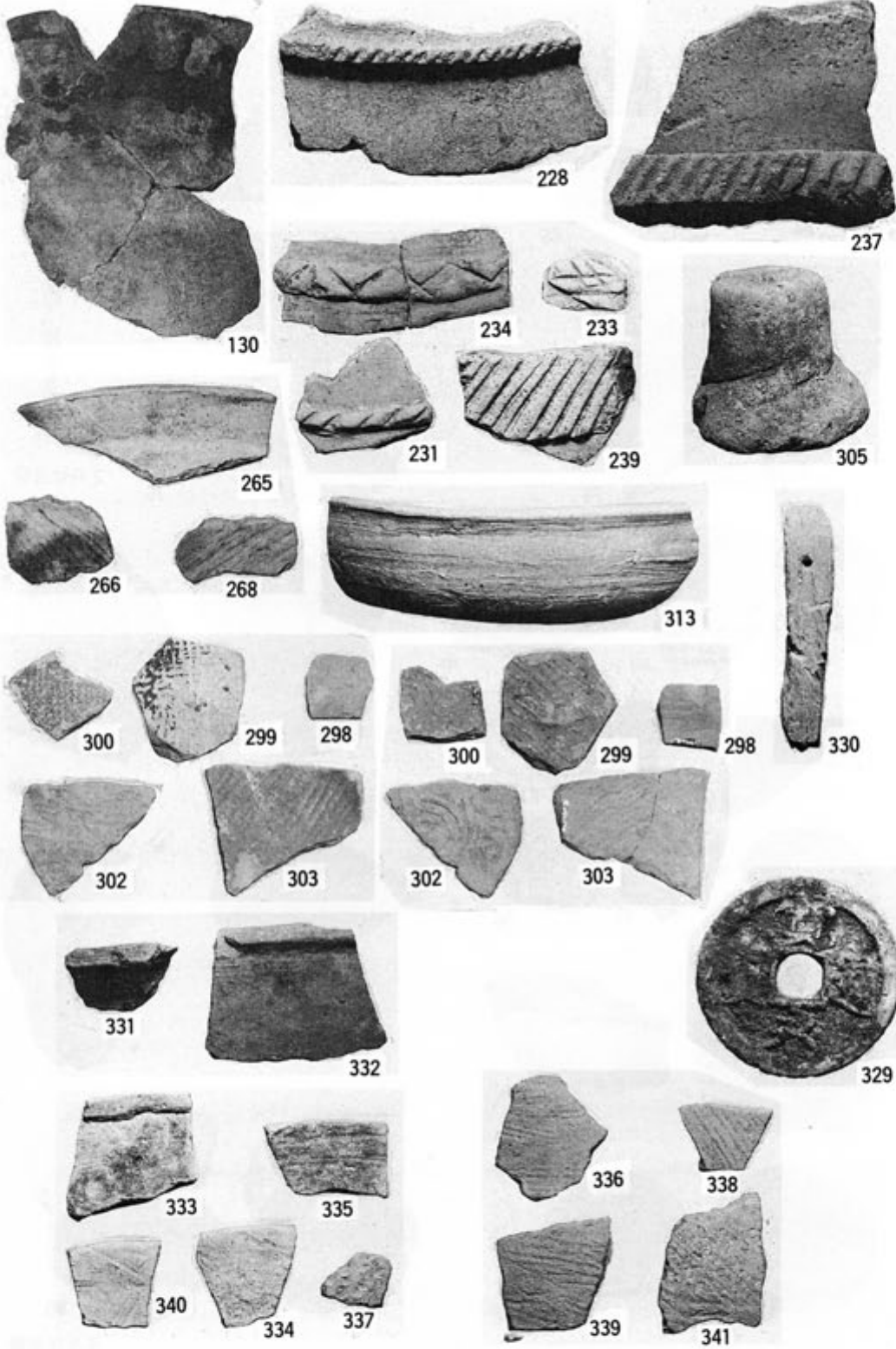


3号住居跡



4号住居跡

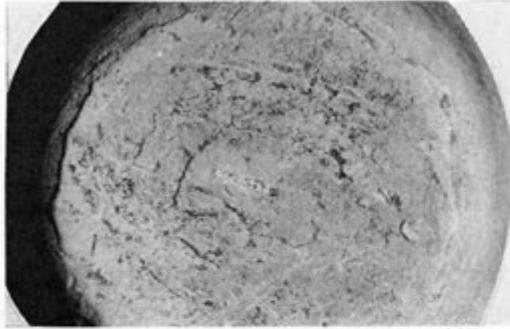
図版 8  
出土遺物 (3)



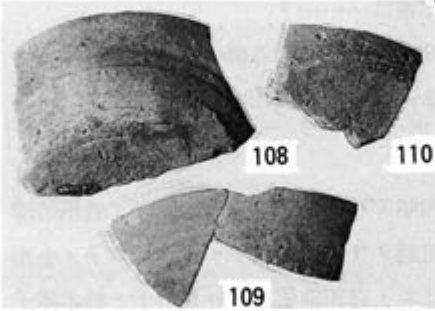




107



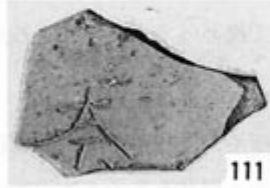
107



108

110

109



111

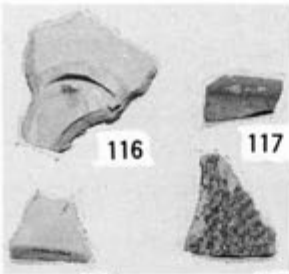
107~111 : 溝内出土  
 113~115 : 墓内出土  
 116~127 : 掘り込み内出土



113

115

114



116

117

119

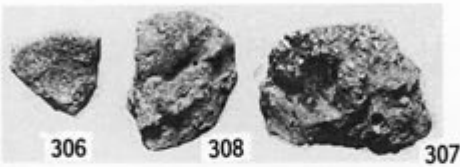
118



126



127



306

308

307



306

308

307



327



326



## あ と が き

平松原遺跡の発掘調査は、梅雨期の6月から真夏の7月にかけて行われた。特に今年の夏の気温は異常だった。連日の猛暑続きで、天気予報は最高気温35度・36度を告げていた。

平松原遺跡は縄文時代・弥生時代から古墳時代・平安時代・中世～近世、そして昭和時代を通して、その当時の人々が生活を営んだ土地である。さらに今、平成時代になり埋蔵文化財センターが建設され、この地に新しい歴史を刻もうとしている。この地は、100年後どのように利用されているのだろうか？そして、1000年後・5000年後は……………？

過去のことばかりではなく、未来のことまで考えさせてくれる今回の調査だった。発掘から整理・報告まで携わって下さった平松原遺跡近隣の皆さんに心から御礼申し上げます。

### 発掘作業に携わったみなさん

相場義昭・精松イチ子・精松幹夫・有田すみ子・有満和子・石原トシ子・岩切涼子・岩爪美津子・白井アサ子・白井ちえ子・大迫光子・槐島孝子・川越ノブ・川畑初子・黒江ヒロ子・小出水幸子・税所みゆき・地福郁子・地福きよ子・地福フミエ・志和池和恵・杉森敏子・鈴木律子・瀬戸正一・園田佳子・高橋和子・竹崎美津子・竹下 忠・田知行はじめ・田知行光江・田畑みき代・溜水はつえ・出水清則・鶴田みずお・徳重昭人・徳丸孝子・中野セツコ・中村マス子・畠中清子・浜崎洋子・春山 功・春山つき子・春山ナルコ・東志津子・俣木まき・森 静江・安永一葉・柳田保人・矢野君代・山口 昇・山田重雄・山中キヨ子・米満みどり

### 整理作業に携わったみなさん

岩城カヨ子・四丸久美子・徳永美喜子

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(58)

鹿児島県立埋蔵文化財センター建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

ひら まつ ばる  
平 松 原 遺 跡

発行日 平成3年3月30日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 有限会社光文社印刷 〒890 鹿児島市鷹師二丁目8-4